

淫獣愛牢

——双天女淫恋に墜ちる

試し読み版

妄想虜囚

第一部 淫十性宣4

プロローグ 友人愛5

第一章 戦士愛17

第二章 姉妹愛38

第三章 耐え忍ぶ愛113

第四章 真・姉妹愛176

第二部 天女淫壊231

第五章 獣愛232

人物紹介

亜衣……………天神学園に通う天神子守衆の巫女。麻衣の双子の姉。祖母が亡くなり当主となる。得意な武具は弓。腰まである長髪のポニーテールがトレードマーク。淫らの秘術に対抗できる強靱な精神力を持つ。先祖より受け継いだ天女の羽衣の神通力で変身し、淫敵を射倒す。

麻衣……………亜衣の双子の妹。亜衣と同じく天神に仕える巫女であり羽衣の戦士である。ショートボブの可憐な娘。薙刀術を得意とする。その腕は玄妙の域に達している。天神の力を宿した薙刀で邪淫の鬼を薙ぎ倒す。

幻舟……………故人。天神子守衆前当主、麻衣の祖母。正確には亜衣、麻衣は幻舟の妹の孫娘に当たる。早世した亜衣、麻衣の母に代わり姉妹を厳しく育てた。

羽衣伝説――。

日本各地に伝わるこの話はただの伝承ではなかった。

天津家こそ地上に降りた天女の末裔である。双子姉妹ばかりが生まれる天津の娘は、代々、天神に巫女として仕えた。悪鬼羅刹が跳梁ちようりようするとき、始祖たる天女が織った羽衣と不浄を打ち払う雷光でこれを滅ぼしてきた。

彼女たちの宿敵、世界に淫乱と混沌をもたらそうとする鬼獣淫界。

天津の巫女は天神子守衆を率いて、幾度となくその邪悪なもくろみを打ち碎いた。

時は流れ現代。天津亜衣、麻衣の双子姉妹に継承された。ふたりは激闘の末、敵の首領、鬼夜叉童子を討ち取り、世界の静謐と秩序は保たれた。

だが、それもつかの間のこと――。

穢れなき美しい姉妹にふたたび淫らの魔手が伸びようとしていた。

第一部 淫十性宣

プロローグ 友人愛

0

このところ厳しさを増した北風が窓を揺らしている。

放課後の教室。

寒風が窓枠を叩きつける音とは別に、教室ではギイギイと音が鳴っていた。グラウンドに立てられた照明灯が真っ暗な室内をうつすらと照らしている。

制服姿の少女が椅子に座っていた。座席が揺れている。椅子の足がきしみ、音を立てていたのだ。室内がもう少し明るければ、少女が顔を赤らめているのが認められたであろう。

少女の名は奈那実^{ななみ}。このクラスの生徒である。けれども彼女が腰を下ろしているのは本来の座席ではなかった。

教室の真ん中よりやや前方少し廊下側、そこは天津亜衣の座席だった。

天津亜衣——この天神学園にあつて、妹の麻衣とともに他の生徒からも教師からも信頼の厚い精神的柱ともいえる生徒。成績優秀にして弓道部の主将。文武両道の理想を体现し、そのうえ眉目麗しい少女なのだから同性からも羨望^{ぼう}の的となるのは当然だが、なにより内からほとばしる力強さに女子生徒たちは心酔していた。

教師からも一目置かれている亜衣だが決して優等生というタイプではない。活発な女子でスカート丈も短い。その短さは厳密には校則違反だろうが、素知らぬ顔だ。彼女は手頃な木を見つけると、ささつと登ってしまうおてんばな一面もある。

通常イメージする木登りとは全く異なっていて、手をほとんど使わずに駆け上がってしまうのだ。垂直に飛ぶ三段跳びとでも呼ぶべきか、すすすすつと幹を跳ねて、あつという間に高くまで登ってしまう。

「弓兵の基本よ」亜衣はこともなげにそう言っていた。下からはパンツが丸見えなのに。

亜衣は決して無意味に木に登るわけではない。鷹のような眼差しで周囲を

見渡し、さっと飛び降りたと思ったらそのまま走り出して、路上でナンパ男にしつこくつきまとわれている女子生徒を救出する。そんなことはたびたびだから学園の守護者として敬意を集めている。

双子の妹の麻衣も学園の人気者だ。

柔和な笑顔と親しみやすい人柄でアイドルのように慕われている。麻衣のまわりには人の輪が絶えない。堅物の姉と違いイケメン話にも乗ってくれるし、女性同士ならではの猥談も少しだけなら話を聞いてくれる。すこしエッチな単語が出てくるだけで純情な彼女は顔を赤らめる。そのうぶな姿がとびきりに可愛いのだ。

麻衣は愛嬌を振りまいているだけではない。薙刀だけでなく様々な武術に精通している。本人の言うところによれば「武器がなくても戦えなくっちゃしょうがないでしょう」ということらしい。

奈那実も麻衣の武術に救われたことがある。露出狂に襲われた時のことだ。麻衣は下半身丸出しの男にも臆することなく投げ飛ばした。彼女も学園の護り手だった。

さらにつけくわえるなら姉妹共々芸事も修めている。舞踏や茶道の腕もな

かなかのものであった。武芸百般などというがまさにそれを体現していた。学園中から愛されるのも当然のことなのだ。

机の上には一目で亜衣とわかる弓道衣の女性の彫像が置かれていた。矢を射た後のポーズなのだろう。矢所に視線を残しつつ、両手を腰に戻した弓倒しの姿勢の全身立像で、油断なく的に注意を残した緊張感が伝わってくる。

「亜衣……はあ……はあ……」

奈那実は悩ましげに呟いた。

机上に置かれた亜衣の彫像を見つめながら、奈那実の手はスカートの中に忍んでいた。驚くことに彼女は手淫をしているのである。おさげ髪の純朴そうな彼女が、教室という似つかわしくない場所で淫靡な行為に及ぶのは、どうにもアンバランスなエロスを感じさせる。

彫像は彼女が造ったものだ。奈那実が美術部員だった。文化祭でお披露目したとき、亜衣本人からも射法の特徴を良く捉えていると褒められた自慢の作品だ。弓道衣の下、骨格や筋肉の動きまでもイメージしているからこそ、その迫力とリアリティーがある。納得がいくまで何度もこね直した粘土像。亜衣

の均整の取れた肢体を、美しい髪を、凜々しくも勇ましい横顔を、制作過程の全てをこなした奈那実の手が記憶していた。

——亜衣のことを……亜衣の体を……もつと……もつと、あなたの全てを知りたい。

思いを募らせ、奈那実は指先を進めていく。

亜衣、麻衣とは十年來の友人だった。それが病にも似た感情となつたのはいつからだろう。思いを募らせながら同性への恋慕に罪悪感を抱き、かけがえのない友人を失ってしまうことに怯え、気持ちを伝えられずにいた。それが病をこじらせることとなつた。

勉強にも身が入らず、このままでは自分は壊れてしまう——。そこまで追い詰められた彼女は一学期の終わり、姉妹に告白した。いや、それを告白と呼んでよいものか——。

「わたし、あなたたちが好きなの。ふたりとも大好きなの。どちらか決められないの。普通の好きじゃない。性的な意味で好きなの。オナニーだってしたわ。友達をズリネタにしてたなんて最低最悪の異常者でしょう。友達失格なの。だからお願い。わたしと絶交して」

——これで終わった。それでよかったのだ。と、奈那実思った。

好きだけど、好きだけど、どうにもかなわないことだとわかっていても——。それでも好きで、自分からは距離を置くこともできず、姉妹のほうから絶縁してほしい。それが奈那実の懺悔ともいえる告白だった。

うつむいて泣きじゃくる奈那実。ふたつの手の平が肩に掛かるのを感じた。とても柔らかな手の平だった。奈那実は亜衣と麻衣に抱きしめられていた。

「なに言ってるの、これから友達だよ」

「そうよ、わたしたちはずっと友達」

干し立ての毛布にくるまれているようだった。暖かで心がやすらぐ匂いがした。心の闇と穢れが祓われ、姉妹に対する病的なまでの気持ちはその日以来おさまった。

それが——。

姉妹に対する恋慕は以前にも増して強まっている。そう、あの日から。校舎にいた見知らぬ老人に会ってからだ。老人に見よと命じられた、手鏡に映

った現実離れした光景こそが奈那実姉妹への愛情を取り戻させたのだ。

日の照っているあいだは不思議と老人に出会ったことさえ忘れているのに、夜が訪れ、股間の割れ目を丹念にまさぐるとあの日見た淫景がより鮮明に頭に浮かんでくる。奈那実はもつと見たくて、より熱心に指先を動かした。

——ガラッ。

突然、教室の扉が開いた。

「びつくりさせないでよ。美由衣先生」

姿を現した大きな人影に奈那実は言った。びつくりしたというわりには手はスカートのなかに置いたままで、さして驚いたふうでもない。

美由衣は正式な教師ではなかった。教育実習生だった。天神学園の卒業生でもある。実習期間が終わったあともまだ学園に残り教師の手伝いをしている。顧問が産休に入ってしまった剣道部の臨時コーチを買って出て、教え方がうまいと評判だった。それ以上に好評だったのが化粧だった。

彼女の得意とするすっぴんメイクは教えを請う生徒たちが後を絶たなかった。化粧が禁止された女子学生にとって、そうとは判断がつかない程度に素顔をランクアップさせてくれるすっぴんメイクは必修項目だ。ニキビ跡を隠

すメイク術も絶妙だった。

生徒たちにすっかり尊敬された彼女は、授業を担当していなくても先生と呼ばれている。

「わたしもいつしよに、イイでしょう？」

美由衣は奈那実の横の椅子に座った。そこは亜衣の妹、麻衣の席だった。美由衣は女性にしては大柄で身長があり、座っていても奈那実より頭ひとつ高い。

「先生の分もありますよ」

奈那実は鞆から布に丁寧にくるまれた像を取り出した。天津麻衣の彫像である。薙刀を掲げ持ち、これから戦う直前といったきりつと引き締まった表情をしている。こちらも力作であった。

「素晴らしい出来映えね。これならはかど捗るわ」

机に彫像を置くと美由衣はスカートをめくり上げて、これまた手淫を始めた。

美由衣も天津姉妹に思いをこじらせてしまった女だった。

姉妹と初めて出会ったのは五年も前になる。美由衣の剣道の腕前は同世代

相手では敵なしだった。恵まれた体格の彼女は男子相手にも力負けせず、剣技はすでに指導者である父をも凌駕しつつあった。国体にまで出場して少々天狗になっていた。

憂慮した父親からとある武道教室への参加を勧められた。

馬鹿にしていた。日頃の運動不足を解消するためのスポーツ教室に過ぎぬだろうと。男相手に鍛錬を重ねた自分には暇つぶしにもならないと。

——ところがだ。参加者の真剣さとレベルの高さにまず驚いた。範士クラスまでもが参加していたのだ。背の縮んだしわくちやの老婆が指導者だというのである。

彼女を真に驚かせたのは老婆の孫娘だという自分よりも三つも年若の双子姉妹だった。

双子と立ち合った美由衣はどちらにも敗北した。

自分よりリーチもパワーもスピードも劣る相手に、鰐を合わせることもできなかった。男子にも伍する美由衣である。技が劣っていたとは考えたくなかった。あとから聞いた話によれば、ふたりとも剣道に専心しているわけではなく、得意な武具はほかにあるという。彼女の鼻っ柱は父親の目論見通り

折れた。しかしそこに誤算があった。

——美由衣は双子姉妹に懸想してしまったのである。

姉妹が天神学園への進学を希望していると聞いたときは感激したが、入学したときには自分は卒業しているとすぐに気づいて絶望した。姉妹とともに学園生活を送ることができず悔し泣きした。

美由衣は卒業した後もなにかと理由を付けては母校に訪れていた。今も実習期間を超えて長居している。

学園の北に位置する玄武を祭る神社の娘で厳しく躰けられたからであろうか。美由衣の思いは屈折していた。彼女の願いは天津姉妹と本当の姉妹になることだった。実習期間の本来の終了日に美由衣は姉妹に告白した。

「お願い、あなたたちわたしの妹になって——。わたしのことをお姉様と呼んで。わたしんちの養子になつてもらふことは父にも承諾させたわ。嫌ならわたしが天津家の養子になつてもいいのよ——」

結果は語るまでもない。奇抜な申し出は丁重に断られた。

美由衣の願いは純粹に亜衣、麻衣を妹にすることだったが、謎の老人と接触してから肉体的な関係も含んだものへと変質した。老人が奈那実が会つ

たのと同人物であつたことを美由衣は知らない。

「ああ、麻衣、可愛いわ、食べちゃいたいくらい」

「亜衣っ、もつと見せて。あなたの全部、なにかも——」

奈那実と美由衣の自慰行為が激しくなっていた。奈那実はスカートがまくれ上がりショーツの中に手を突っ込んでいる様子が丸見えだ。美由衣はスカートを脱ぎ捨てて開脚した股間を夢中で擦っている。

老人に見せられた映像がはつきりとした。頭の中で直接再生されたかのような不思議な映像——。

亜衣も麻衣も武神のようでもあり天女のようなでもある。勇ましくも優雅な衣装をまとっていた。彼女たちは巨体の化け物と戦っていた。昔話の伝承そっくりの鬼だった。脳内で再生される映像が別のシーンに切り替わる。

姉妹が鬼たちになぶり者にされている。粘液を滴らせた汚らしい触手が裸に剥かれた姉妹の体を這っていた。

大切に、他の何ものよりも大切に思っている姉妹が穢されている。それなのになぜこんなにも興奮するのか。

——キイッ——。

教室に甲高い音が響いた。ふたりが足をつつぱらせ、椅子の脚が床を滑り、音を鳴らしたのだった。

しばらくふたりは放心していたが、よろよろと体を起こすと机の上の彫像を交換した。

思い人を換えて、奈那実と美由衣の指先はまた股間を擦り始めた。

老人が何者だったかなどふたりにとってはどうでもよいことだった。

脳裏に浮かんだこの世のものとは思えぬ淫景こそが全てだった。

第一章 戦士愛

1

ボブヘアの美少女が難しい顔をしていた。

鼻の下に鉛筆を挟んだ天津麻衣が唸っている。

「うーん、難しい。パス。次、行ってみよう」

「こーら、麻衣！」

長髪をポニーテールに束ねた天津亜衣が、妹をたしなめた。

十二月に入り、年の瀬が迫った天神学園の図書室はずいぶんと賑わっている。受験を間近に控えているからだろう。年が明ければすぐにでも試験が始まる。

天津姉妹手ずから祈祷し、袋につめた合格祈願のお守りは学園の希望者に頒布済みだ。受験にも就活にもきつと御利益があるだろう。姉妹からのプレゼントをみんな喜んでくれた。

麻衣も亜衣も図書室の奥に位置する資料室で勉強に励んでいた。と言って

も彼女たちが取り組んでいるのは受験勉強ではない。

鬼獣淫界の邪悪な企てを阻み、ひとまずの平安がもたらされた。皮肉めいているが人間の淫欲を糧とする鬼獣淫界は人間がいるかぎり不滅の存在だ。人間から欲を断ち切ることは完全にはできないが、淫脈の流れを制すれば鬼獣淫界の活動を抑えることはできる。

武の力で悪しき者を打倒したあとは、叡^{えい}智^ちの力で平和を確かなものとする。亡き祖母、幻舟は鬼獣淫界の復活を早くから予見し、姉妹には直接打撃を与える武術を優先して修練を積ませた。そのためどうしても習得に時間のかかる術式や敵についての知識はおろそかになった。

幻舟はやはり予期していたのであろう。生前に天津家と鬼獣淫界との戦いが綴られた多くの古文書を図書館や郷土館に寄贈していた。価値を理解できなかった学芸員によつて大半は死蔵されていたが、それゆえに天津屋敷や天神学園の周辺で繰り広げられた鬼獣淫界との戦火に巻き込まれずに済んだ。姉妹はそれらの古文書を学園に取り寄せ、部活を終えると資料室で読み漁るのが日課になっていた。

あまりに遅くまで籠もっているのです、音を上げた司書教諭から図書室の合

い鍵まで渡されている始末だ。

「これは日記ね。雪がたくさん降ったから雪だるまを作った、ですつて。平和な時代に生きたご先祖様もいたのね」

「お姉ちゃんずるい。わたしもそういうのが読みたいな」

天神子守衆の成立は千年以上も前にさかのぼる。写本も含め、四、五百年前の書物はざらである。専門家でも読み解くのは難しい古文書が、苦勞しつつも不思議と姉妹には意味を感じ取れた。きっと子孫に伝えるために神通力と思いやりを込めて先人がしたためたからだろう。

「ほら、手を休めない。国語得意なんでしょう」

「はいはい、読みますよ。お姉さま」

軽い口調ではあるが麻衣も目つきは真剣だ。

天津家の居候、鬼麿は女人断ちの行に入った。木偶の坊を従えていまは遙か遠く西の地にいる。数年に渡って行われる正しき成人の儀がいよいよ始まったのだ。天神の血を受け継ぐ鬼麿が克己復礼し、光の護法者として完全に覚醒すれば、鬼獣淫界の反抗など恐るるに足らない。

鬼麿が彼にとっては死よりも辛いであろう女人を遠ざけて荒行に耐えてい

ると思えば、姉妹もそれに負けじとひたむきに知識習得に取り組んだ。

いつのまにやら今日も既に四時間は経過している。図書室で勉強していた生徒たちはとつくに帰宅していた。

古文書を読む亜衣の手が止まった。

——寒気。冬の寒さとは違う異質の冷気を亜衣は感じた。

ほんのごく僅か、ごく一瞬。靈感の強い人間でも気づくことはないであろう、わずかにこぼれ漏れた人外の気配。

麻衣は既に椅子から立ち上がっている。

学園内にくまなく配置された霊的感応呪符は鳴子のごとき警報装置として機能している。それが微かに揺らめく程度の邪淫の気を姉妹は逃さなかった。

ふたりは同時にうなづく。

麻衣は右の手首から、亜衣はポニーテールから、それぞれ純白に輝く紐をほどいた。紐は輝きを増しながら、はためく大きな布となった。本来の姿を取り戻し、薄く長く伸びた羽衣が室内を流れ舞う。

「天神招来——。羽衣天神、一の舞！」

資料室の小窓から眩い光が溢れた。



美術室前方の扉がすつと開き、弓を手にした少女が室内を窺^{うかが}いながら入った。

教室の中には人気はない。通常よりも大きな教室内はしんとしている。部屋の明かりをつけるなり亜衣は弓を構えた。指出しの青い手袋に包まれた右手に矢が握^{にぎ}まれている。武神の勇ましさと天女のような気高さを併せ持った羽衣軍神をまとった亜衣がにらみを利かす。

蒼天の巫女は雁股^{かりまた}の矢を何もない教室の中心に向かってつがえ、大音^{だいおん}声^{じょう}で呼ばわった。

「隠れても無駄だ。姿を見せよ、邪淫の手先め！」

冷厳な声は教室中に響いた。しかし、その声に応じるものはいない。

「ならば……」

亜衣の視線は一点に向けられたままである。

おもむろに亜衣は矢を放った。

——キンツ。

甲高い金属音が鳴った。教室のちょうど対角線を飛んだ矢は、端に到達することなく弾かれたのである。

何もない空間に亀裂が走っていた。

間髪いれずに二の矢が亀裂の中心を穿った。今度は大砲でもあたったかのようなドンと鈍い衝撃音がした。分厚いガラス片のようなものが飛び散った。大小の欠片は空気を押し固めてでできていたかのごとく落下する前に消滅した。

そのすぐ横に二メートル以上はあろうかという巨大な人影が降り立った。異形の化け物だった。ソフトボール大の風船のようなものが体中を覆い尽くしている。降り立った衝撃でその球体は震えている。ブルブルとした動きから、ただの風船ではなくどうやら中には液体が満たされているようと推測できた。水風船は赤、緑、紫と様々な色でそのどれもが薄暗い色をして、全体としての不気味さを醸し出している。どこが指かも判然としない胞状の手に錫杖を握りしめている。それが机を打ってシャンと鳴った。

「むむうっ……我が陰伏陣が破られるとは……」

化け物は呻いた。化け物の肩口が切り裂かれ、赤紫色の液体が流れていた。亜衣の二の矢による手傷と見て相違なからう。

異形の魔物に呼吸を整える暇はなかった。

教室の後方の入り口から飛鳥のごとく駆ける人影があつた。

麻衣である。

姉同様、既に羽衣軍神へと変身している。姉との羽衣装束の違いは赤と白を基調としている点だ。

赤い長手袋に包まれた両手を広げ、突進するその姿はさながら不死鳥であつた。

麻衣は床を蹴ると宙を駆けるように跳躍した。机から机を跳弾のように蹴り飛び、瞬く間に化け物に迫つた。

——疾い。あまりにも疾い。

羽衣の飛翔能力に自らの脚力を上乘せしているのだろう。幾度となく死闘を戦い抜いた彼女は羽衣の神通力を完全に引き出しているのだ。

ほんの数歩で麻衣は化け物を間合いに捕捉した。

紅の羽衣戦士は手にした薙刀で猛然と突いた。化け物は辛うじて刺突をか

わした。麻衣は勢いもそのままに体を回転させる。読み切っていたのだろう。回転軸をずらしながら、化け物の回避方向へ大きく麻衣は踏み込んだ。追いつがる薙刀にさしもの化け物もかわすことも受けることもままならない。白刃は化け物を真横に薙いだ。腹部の水風船が割れて、液体が飛散した。

破裂した水風船から噴出した不気味な赤紫の液体が麻衣に降り注ぐ。

麻衣は落ち着き払って羽衣を握った左手をかざした。すると液体は麻衣の体に触れることなく浄化され、蒸気を上げて霧散した。

薙刀を中段に構え、麻衣は平穏な学園に突如として現れた怪物に机上から屹然きつぜんとにらみを利かせる。

「天神子守衆、天津麻衣見参！ 邪淫の鬼よ、覚悟なさい」

日頃のあどけない顔だからは想像もできない裂帛れつぱくの気合いを放ち、麻衣が名乗りを上げた。

亜衣が矢を放ってから十秒と経っていない。それにも関わらず化け物は深手を負っている。勝勢は明白だ。天津流巫女舞、羽衣継承者の凄まじき力であつた。

「おふたりともお強く、ご立派になられた。申し遅れました、我が名は快幻坊かいげんぼう

にございます」

水風船に囲まれた眼窩の奥深く、琥珀色に目を光らせて、化け物は名乗った。よく見れば法衣の成れの果てらしき黒いぼろ切れを身にまとっていた。とはいえ坊主とは名ばかりの破戒僧であることは明らかである。

「お前の名など聞いていない。答えなさい！ 貴様の目的はなんだ」

弓矢で狙いをつけながら、亜衣は問い質した。少女とは思えぬほど有無を言わさぬ威厳があつた。

「惜しいかな。いま少しのところで感づかれてしまうとは我が一生の不覚」
僧形の化け物は気圧される様子もなく呟いた。

「答えないのね。元より期待などしていなかったけれど——」

「お待ちください。拙僧はご姉妹に敵意などございません。鬼獣淫界とは三百年も前、とうの昔に縁を切っております」

「ならばなぜ学園に忍びこんだ？」

「おふたりの内なる願いを聞いたためでございます。拙僧は確かに聞いたのでございます。美しくも素晴らしきお体に生まれたご姉妹がつまらぬ因習に縛られ、女としての悦びを知らぬとは不憫。おふたりとも本当は待ち望んで

おられるのです。内なる肉褻を歓喜に振るわせる日を」

「黙れ！ 邪淫の者」

耳にするのも不快な言葉に、亜衣は隠すことなく怒りを露わにした。誘蛾灯のように、美しく清白な姉妹は邪な欲望を持つ者を引き寄せてしまう。この化け物も淫欲に衝き動かされ、姉妹に近づいてきた招かれざる客だ。

——ならば滅ぼすまで。

亜衣は弦を解き放った。

ギュン。

唸り声を上げて飛ぶ矢とともに戦いは再開された。

怪僧は錫杖で矢を逸らしつつ、体軸を横にずらした。怪僧は飛び跳ねると同時に体をひねり、さらにぐるぐると猛烈な勢いで体を回転させた。

麻衣が即座に反応し斬りかかった。怪僧も回転しながら錫杖を振るつていく。

無数の水風船からなる快幻坊の体は内部の液体の重みと遠心力で不規則に拡がった。それに加え錫杖を振るう腕も伸び縮みさせ、軌道を変化させている。間合いをはからせないための邪道の技だ。

しかし、麻衣はいとも簡単に錫杖の圈内に入っていた。上中下に打ちわけられる快幻坊の攻撃を、上体を反らし、あるいは低く沈ませて輕妙にかわす。初めて見る技を瞬時に見切った麻衣の技量である。

麻衣が薙刀の間合いに捉えようとしたとき、快幻坊は足を刈り取らんと下段へ錫杖を払った。彼女はなわとびでも跳ぶかのようにかろやかに跳ねてかわした。それはいささか不用意のようにも思えた。即座に宙に浮いたままの麻衣目掛けて、次の一撃が襲ったのである。

空中では落下運動に任せるまま――。身動きはできない。

だが錫杖は空を切った。なんと麻衣は天井に「着地」していた。

薙刀を支えに逆立ちとなった麻衣はそのまま天井に足を着けていたのである。さらに麻衣は天井で一步踏み込んだ。

――鋭ッ！

快幻坊の肩口から血煙が飛んだ。

天井からの思わぬ一撃に三百六十度の全周攻撃を誇る快幻坊も受け太刀することまでできない。頭をそらすのが精一杯であった。

麻衣から受けた傷はかなりの深手ではあったが怪僧はなおもひるまない。

体を鞠のように弾ませて方向転換すると、標的を亜衣に変えて突進した。

広めの美術室とはいっても室内である。弓を射るには狭い。怪僧の巨体は弓の間合いを押し潰し、亜衣を圧倒するかに見えた。

怪僧の突進は不意に止まった。その目前に薄い布があつた。間近で凝視しなければみえないほど薄く透明なフィルムのように伸びた羽衣が天井から床に張られていたのである。

「ぬうう、これしきの薄皮ごとき」

怪僧は力尽くで羽衣を引き裂こうとする。しかし、その巨軀を持つてしても一歩も前には進まない。一見頼りなさげな薄く伸びた羽衣はたわむばかりで怪僧の前進を許さなかつた。

「これで終わりよ、淫敵退散！」

亜衣の放った矢が快幻坊の眉間を打ち抜く。

「淫者必衰の理と知りなさい！」

よろよろと後退したところを麻衣がとどめの袈裟切りを見舞った。もんどりうった怪僧は泡をとなつて溶解していく。

亜衣は口を手で覆った。麻衣も心得たもので羽衣を口に当てている。

淫鬼から噴出した体液にどんな毒性があるかはわかったものではない。麻衣はすぐさま教室の窓を開けた。

快幻坊の体はもはや血泡へと消え、無念そうに突き上げた腕だけとなっている。亜衣はその腕も沈んでいくのを見届けながら、自分に対する怒りで身震いしていた。

よりにもよって嚴重に警戒し、十重二十重の守護結界を敷いていた学園内に淫鬼の侵入を許してしまっていたとは……。宗家様と敬われ浮かれていたわけではあるまいが、どこかに落ち度があったのだ。自分の甘さに齒噛みする。

「お姉ちゃん大丈夫？」窓から戻った麻衣が声を掛けた。

「少し、吸っちゃったけど大丈夫よ」

少々の毒気は羽衣が浄化してくれる。姉妹は美術室を調べてみることにし

た。淫鬼の侵入経路を捜索しなければならない。

まもなくして隣の準備室で巧妙に蓋がされた穴が見つかった。

「わたしが先に降りるわ、麻衣もついてきて」

ふたりは羽衣の力で浮遊し、ゆるやかに降下した。

かなり深い縦穴だった。

穴を降りると石畳の部屋へとたどり着いた。

ひんやりとした冷気が肌を刺す。正方形の部屋だった。石畳には苔が生して年月を感じさせる。部屋中央では石畳が青白く光っていた。

「これは……？」

ガラス室の壁面に亜衣と麻衣の粘土像が埋まっている。たしか文化祭でみせてくれた奈那実の彫像だ。褒めると奈那実は顔を真っ赤にしてすごく照れていた。

「お姉ちゃん、わたしたちの写真があるわ。こっちはお姉ちゃんが使ったタオルじゃない？ やだっ、これわたしの下着！ あのときの下着泥棒、鬼磨様じゃなかったんだ」

——学園内で盗撮されたとおぼしき写真。亜衣は正座して入念に弓の手入

れを、麻衣はクラスメイトと談笑する姿が写っている。ふたりの人柄をよく表した写真だった。

——祖母の知人からの頂き物で、羽を生やした二頭身の猿らしきキャラクターのプリントがどうもなじめず人に譲ったタオル。

——奮発してちよつと高めのブランド品を購入したのに、数えるほどしか身につけないうちに盗まれてしまった麻衣の下着。いつものように学園内に忍びこんでいた鬼磨をとつちめたものの、頑として悪行を認めようとしなかった。

四方の壁面には他にも姉妹にゆかりのある品々が埋まっていた。さながら天津姉妹展示会である。

亜衣は部屋の中央に近寄った。青白い呪印が光っている。鬼獣淫界のものと似ているがどうも違う、文字も紋様も見えたことのない呪式だった。

「お姉ちゃん、わかる？」

「ううん、初めて見たわ、こんなの」

亜衣は首を振って答えた。

恐らく異国の術式が混じっている。あの快幻坊と名乗った淫鬼は鬼獣淫界

と縁を切ったと言っていた。漂泊の末、独自に編み出された呪印なのかも知れない。

「応急処置だけでもしておかないと――」

亜衣は周囲を歩きながら観察した。光っているということは呪式が生きているということである。そんな危険なものを学園内に野放しはできない。

「ここね」、亜衣は足で掃き、呪印の一部を削り取った。同じように三カ所を掃いて消す。亜衣の眼力は呪印の要を正確に見定めていたらしい。青白い光は消え、室内は真っ暗になった。

「きやつ」

突如として訪れた暗闇に麻衣は悲鳴を上げ、亜衣に抱きついた。



「あきれるくらい臆病なんだから。ほら、こんなときのために術を学んだんでしょ」

亜衣の広げた手の平に小さな火が生まれた。それを床に投げ捨てると発炎

筒のように周囲を照らす。麻衣も姉に倣って灯火を放った。

螢^{ほたる}火の術——殺傷能力はないが好んで闇に潜む淫鬼を探索するには欠かせぬ術だ。こんな初歩に類する術を覚えたのも最近のことである。光源を得る手段は他にもいくらでもあるからだ。例えば羽衣に念を込めても輝かすことはできる。松明なら明かりとしてだけでなく、火を術の触媒にすることもできる。とにかく戦闘の役に立たない術は後回しだった。

「さっきの敵、強かった。でもどうしてあんな奴が学園内にいたの？ 鬼獣淫界は封印したのに？」

「……………」

抱きついたまま麻衣が問う。亜衣にもその答えはなかった。

麻衣の言うとおり奴は強敵だった。羽衣を継承したばかりのころならもつと苦戦していただろう。亜衣とてあの怪僧が何者なのかわからない。

地の底深くに潜む鬼獣淫界を相手に戦ってきたのだ。地中の守りは万全だ。少なくとも学園の敷地内においては——。侵入するのは地表よりも困難と言える。そのはずがこのような怪しげな石室が造られていた。夢想だにしなかったことだ。

想像を絶する淫敵が学園を、わたしたちを狙っている。

——でも負けない。負けるわけにはいかないのだ。この世界はわたしたちが護る、亜衣は強い決意そのままに麻衣をぎゅつと抱きしめた。

「このままもう少しお話しさせて、卒業したらお姉ちゃんと離ればなれでしょう」

「麻衣——。そのことなら何度も話し合つて——」

以前から決めていたことだった。ふたりとも進学はしない。

亜衣は天津家当主として己の技を磨きつつこの地を護る。麻衣は全国を巡り各地の護法者から術法を学び、亜衣にフィードバックする。護法者たちからは既に快諾の返事をもらっている。いずれも幻舟の古くからの知己で国内有数の術者たちだ。幻舟から教わりきれなかった術法を補い、天津巫女流の力を損なわれないようにするための計画だった。

新生・天神子守衆——。亜衣と麻衣がそれぞれの修練を終えたならば、子守衆はかつての隆盛を取り戻し、強靱に生まれ変わるだろう。鬼獣淫界をはじめとする邪悪な魔の手から、未来永劫、人々を守り続けるには必要なこと

なのだ。

麻衣とは数年、いやもつと長い間会えなくなるかも知れない。麻衣はおつとりとしているようで強情なところがある。たまに軽口を叩くが根はまじめなのだ。納得のいくまで修行を続けるだろう。

「わたし、さみしいわ。そうしなきゃいけないってわかつてる。それでもね……」

「だめよ、それ以上言わないで。わたしだって……。ずっとふたり、いつしよだったんだもの」

麻衣に言われて、亜衣にも急に寂寥せきりよう感がこみ上げてきた。胸の奥で我慢していたものが溢れ出ていく。ひとりで天神子守衆を背負っていかなければならない心細さが全身にひろがっていく。なぜ今日はこんなにも感傷的になるのだろう。

「お姉ちゃんもわたしと同じ気持ちなんだ。——嬉しいよ」
不意に麻衣が顔を寄せた。

近すぎる——。

姉妹の唇と唇が触れあっていた。

——麻衣にキスされている……。

あまりに予想外な妹の行動に亜衣は硬直していた。

（なんだろう、これ……すぐく柔らかくて……）

亜衣はずっとこうしていたくなる感じがした。それでもそれをいけないことだと感じて麻衣と顔を離した。

「お姉ちゃんのファーストキス奪っちゃった。うふっ」

「麻衣、いきなりなんてことするのよ！ わたしたちは姉妹で——」
言いかけた亜衣の言葉を妹の指が封じた。

「軽くチューしたぐらいでびっくりしちゃうなんて、お姉ちゃんかわいい」
妹の黒く澄んだ瞳が近づく。麻衣にまたキスをされていた。

（ああ……またこの感じ……）

亜衣の心の中からさみしきや心細さが消えていく。戦闘後も残る怖じ気さ
えも溶けてなくなった。麻衣の唇を通じて元気を分けて貰っているようだった。
た。

キスが終わる。麻衣の唇が離れると、途端にさみしきが舞い戻ってくる。
体を押し戻そうと麻衣の肩に添えたはずの両手は、いつしか反対に彼女を

抱き寄せていた。

「姉妹だってキスぐらいいいでしょう？」

「麻衣のばか」

今度は亜衣からキスをした。冷気がたちこめる石室内だというのに温かい。心が安らぐ。さみしさはもうどこかへ行ってしまった。

最初のキスよりも、二回目のキスよりも、長いキスをした。

第二章 姉妹愛

3

【北東隔室】

どこにも入り口のない一メートル四方の小さな部屋。そこに奈那実はいた。

分娩台のような椅子に座り、宙に浮かぶ鏡のようなものを見つめていた。そこには抱きあう天津姉妹が映っていた。

「亜衣、麻衣……そうだよ。それでいいの」

奈那実は亜衣も麻衣も大好きだったけれども、自分では釣り合わないとも自覚していた。天神学園では天津姉妹への告白は名物行事のようなもので、告白しフラれるまでが一連の流れだ。フラれるとわかっていてもドキドキ感がたまらなくて女子たちはコクるのだ。成就した生徒は誰もいない。他校の男子たちももれなく玉砕していた。

亜衣は男嫌いを公言してはばからないから、そこに尾ひれ背ひれがついて、過度に誇張された噂話がまことしやかに語られている。女生徒たちは自分にもチャンスはあると色めき立った。亜衣にしてみれば単に色恋沙汰に興味がないだけなのだろうけれども――。天津姉妹への告白詣では引きも切らなかつた。

誰が姉妹を射止めるのか、誰が相手として相応しいかということも、天神学園に通う女生徒たちの一大関心事である。お節介なこととは承知していても、奈那実もよく脳内シミュレーションしたものだ。

エースにして四番の甲子園のヒーロー、爽やかな笑顔が印象的な剣道全国チャンプ、帰国子女のイケメン学生モデル、海外の大学からも引く手あまたなIQ三百の天才少年、エキサイティングなダンスパフォーマンスと軽妙なトークでファンを魅了するアイドル……。

でもどうもしつくりとこない。

ところがだ。ちよつと見方を変えれば身近なところに適任がいる。

最初から相手を探す必要などなかったのだ。

そうだ、亜衣と麻衣がくつついてしまえばいいのだ。

双子ならではの息の合いっぷりといい、最高に釣り合ったカップルではないか。女同士とか姉妹だとかそんなことは些細な問題だ。

奈那実が夢にまで見た亜衣と麻衣のカップルが現実のものとなっている。それも謎の老人にみせられたあの幻想的で天界の貴人を思わす装束でだ。

天女と天女が抱き合いキスを交わす――。こんな美しい構図がほかにあるだろうか。一幅の秘儀図から飛び出したかのようなのである。

「もつと、もつとキスをして」

床から生えたガラス棒に水晶球がついている。そこに奈那実は股間を押しつけていた。下着は既に脱ぎ捨てられ、スカートをめくり上げ、水晶球に開脚した付け根を擦りつけている。ぐにゅぐにゅと陰唇が形を変える。恥じらいなどとうに捨ててしまったらしく、奈那実は双乳を揉みしだきながら、夢中になって腰を動かす。

水晶球からガラス棒を伝わり、乙女の雫が流れていった。

【北西隔室】

美由衣は服を脱ぎながらオナニーしていた。床にはスカートと紐パンが乱雑に脱ぎ捨てられている。

（ガーターでよかった。普通のストッキングじゃ脱ぐの面倒くさいもの）

乳房を揉みし抱きながら思った。ブラウスのボタンを外しては、懷により深く手を差し伸べる。今日は予感があつたのだ。姉妹との関係が進展すると――。

壁から水平に伸びたバーに跨がり美由衣は腰を振った。

美由衣が見つめる鏡から声が聞こえる。

『お姉ちゃんからチューしてくれるなんて思わなかったな』

『麻衣ばかりずるいでしょ』

『じゃあ、今度はわたしの番だよ』

鏡の中では仲睦まじく姉妹がキスを繰り返している。

天津姉妹は密接な関係であるべきだ。双子ならなおのこと。仲のよすぎる姉妹。それは美由衣の理想でもある。あのふたりのなかに入って行けたらどんなに幸せだろう。

——美由衣お姉ちゃん。

亜衣が、麻衣が、美由衣に呼びかける。一緒に同じ料理を食べ、お風呂に入り、寝る前にはおやすみのキスをするのだ。そして……。

想像するだけ高ぶる。亜衣、麻衣、美由衣の三姉妹。なんて素敵なんだろう。名前に「衣」の字が入っていたのはそうなる運命を暗示していたのだ。こんなに興奮するのは、麻衣の下着を拝借したとき以来だ。汗で汚れた下着を更衣室で見つけたとき、ほっとけなくて思わず家に持ち帰ってしまった。汗のにおいは香水のような気品があり、味もまさに極上だった。ショーツの秘めやかな部分から漂うかすかな分泌液の香りを嗅いただけで美由衣は絶頂したほどだ。

将来、姉となるのだから姉妹のことはなんでも知っていなければならない。綺麗に手洗いして下着を返せば麻衣はとても喜んでくれるだろう。そのときには同じサイズの下着を一緒にプレゼントするつもりだ。もう何枚も買っている。

亜衣と麻衣の下着姿を想像するとランジェリーショップで物色するのが楽しくて仕方がない。双子だから当然なのだが、姉妹は体つきまで瓜二つだ。

そんな彼女達も専修する武具のためか、微妙な違いが現れるようになった。弓を修練する亜衣は胸回りが鍛えられたせいかな、挑発するような上向きのバストに磨きが掛かっている。スレンダーなだけにカップサイズ以上に乳房の形の良さが際立つのだ。

麻衣は重量のあるなぎなたを武具とするだけに、肩幅も亜衣よりひとまわり大きく、下半身もがっしりしている。本人は言いたがらないがヒップサイズは姉を上回っているはずだ。チャイナドレス風のスリットから覗かせる太ももが悩ましい。

ふたりとも武道家としての成長とともに、体つきまでも女性としての魅力が増しているのは確実だった。大柄な美由衣からすれば信じられないほど華奢なのだが。

「もつと仲良くなつていいのよ。あなたたちは最高の姉妹なんだから」
亜衣と麻衣は微笑ましくなるよう初心なキスをチュツチュツと続けている。

美由衣はもつと深い関係になつてほしいと切に願った。

何度、姉とキスを交わしたのだろう。姉の唇は柔らかくてしつとりしている。以前、鬼獣淫界の刺客、スートラに唇を奪われたことがある。スートラは亜衣とそっくりに化けていた。でも本物のほうが断然いい。

いま知ったばかりのことだ。もつと本物の良さを知りたいと思う。

今日はなんだか変だ。戦闘後の高揚感のせいだろうか。あのはぐれ淫鬼は強かった。一方的にもみえる戦いだが紙一重だった。倒したあとに少し震えがきて、姉にどうにか気取られずに済んだ。今日ぐらいは甘えてもいいだろう。麻衣は思った。

「もうやめましょう。こんなこといけないわ」

「じゃあ、ほっぺにする」

麻衣は右の頬にキスをした。そのままぺろりとほっぺたをなめる。ここも柔らかい。

「もお、麻衣ったら」

姉は文句をいいながらも、ほっぺにキスを返してくれる。

（やだつくすぐつたい。でも舐められるのも気持ちいい）

次は左の頬にキスをした。姉の形のよい耳たぶが目に入った。頭を引き寄せてそこも舐めた。

「はうっ」

予想していなかったのか亜衣は素っ頓狂な声を上げた。なんて可愛らしい声なのだろう。

「はあっ」、姉にリベンジとばかりに自分の耳を舐められると、同じように声を出してしまった。右の耳もお互いに舐めあう。

「はいつ、ここまで！」

亜衣が毅然とした声で終了宣言する。

でも麻衣はまだ物足りなかった。舐められた舌の感覚。魔法の刷毛のような姉の舌はどんな感じなんだろう。それが知りたくなってしまうのだ。

「お姉ちゃん、こんなこともう一度としないから……。今日だけだから……。あと一回だけキスをしよう」

麻衣がそう言うのと姉は頷いた。

いやらしい娘だと思われなさうか？ 潔癖な姉に嫌われなさうか？ 内心怖い。それが拍子抜けするぐらいあつさりと亜衣は了解してくれた。きつと姉も物足りないのだ。

唇を重ねる。今度はスートラにされたようなキスを試みよう。恐る恐る舌を差しいれると、触れた瞬間、さつと亜衣の舌は引っ込んでしまった。

でもさらに深く――。用心深く、細心の注意をこめて舌を前進させる。

今度は亜衣の舌は逃げなかった。チロチロと触れさせる。濡れた舌はフルーツの果肉のように柔らかだった。甘い。その表現が正しいのかどうかかわらないが、触れあう舌から初めて味わう歓喜の味がする。

至福の感触にそのままじっとしていた。亜衣がもういいでしょうとばかりに顔を離そうとする。

麻衣は亜衣の首の後ろに手をやり、ぎゅつと押さえた。姉と目があう。

（これでラストなんだから、もう少しこのままでもいいさして……）

（わかったわ）

目と目で意思疎通すると、姉は目を閉じた。麻衣はスートラにされたことを真似てみた。舌と舌を擦れあわせる。気持ちいい。

うんっ、亜衣がぐぐもった声をだした。きつと姉も同じなんだ。そう思うと嬉しくなる。

姉妹で初めてのデ IPP キスを終わるとふたりは見つめあった。

「次はお姉ちゃんの番だよ」

「しょうがない子」

満更でもないという顔で姉は口を寄せてきた。麻衣は唇を少し開いて姉の舌を迎え入れた。

5

【南西隔室】

——大スクープだわ。

さくらは確信した。だからといって写真も撮らず、いまは鏡に映るこの光景を目に焼きつけていた。抱かれない女ナンバーワンの亜衣と抱きたい女ナンバーワンの麻衣。天神学園人気投票トップの座を同票で分け合った姉妹。全校生徒憧れの的。そのふたりが抱き合っている。

『もう一回、これが本当に最後だから』

麻衣先輩が強引に唇を奪った。

まだまだ続く——さくらの読み通りふたりはディープキスを続行した。唾液のアーチを残し、離れたふたりはしばらく見つめ合い、どちらからともなく唇を重ねた。

——天神学園新聞部に彗星のごとくあらわれた敏腕記者。わたしの目に狂いはないんだから。

ベリーショートの少年のような顔に笑みを浮かべて、さくらは思った。

麻衣先輩はおとなしそうに見えて積極的だ。でも亜衣先輩だって負けてない。的確にやり返している。主導権を奪われた麻衣先輩が体をくねらせている。

学園の模範的な生徒であるふたりの秘め事はとても妖しい色香に充ち満ちている。それでいて淡く輝く装束がとても神々しい。見てはいけないものを覗き見してる。さくらは興奮しきっていた。

天津姉妹を先輩と呼んでいるが、さくらとは同じ学年だ。

天神学園には四月から転入した。初めて顔をあわせたとき、見掛けぬ顔で

背が小さく童顔のさくらを姉妹は下級生だと勘違いした。年下扱いをむしろ気に入ったさくらは、それ以来、亜衣と麻衣を先輩と呼んでいる。

姉妹を取材すればするほど、先輩と呼ぶに値する尊敬できる少女であることを知った。部活道の実績も申し分ないし、暴漢を撃退して女子生徒を救ったことも一度や二度ではない。それに加えてあの美貌だ。女子生徒に絶大な人気があるのも頷ける。姉妹のことを調べるうちにさくらもファンになっていた。ふたりは神社の巫女さんでもあつて、神社に取材にいったときには巫女姿を拝めた。紅袴姿の可憐さに同性ながらメロメロになつてしまった。

学園の慣例にのつとり、さくらも告白した。ふたりとも好きだけれどもさくらは麻衣を選んだ。麻衣には転校したばかりのころ、慣れぬ学園内で迷子になっているときに助けて貰った恩義もある。

もちろん玉碎した。そのとき麻衣に頭を撫でられたのは、大切な思い出だ。振られてあんなに清々しい気持ちになるなんて考えてもみなかった。女子生徒がこぞって告白するわけである。

「さくらちゃん、盗み撮りはダメよ。一声掛けて貰えれば撮ってもいいんだから」

告白は成功しなかったが、麻衣先輩から今後の撮影の許可は得られた。早速、失恋記念に写真を撮らせてもらった。麻衣先輩とのツーショット。さくらの宝物だ。

あのとき真っ直ぐに帰宅してさえいれば思い出は美しいままだっただろう。

不審な老人を見かけたさくらは、記者の嗅覚が働いて尾行した。そして気がつけば部室で自慰をしていた。姉妹の写真を机に並べ、何度も自慰に耽った。

あの日以来、日課となったオナニーを今もしている。四つん這いになって、床から突き出たT字のガラス棒に剥き出しの秘所を擦りつけている。T字の横棒部分に少し傾斜がついていて股間にぴったりと接合するのだ。

「まだまだ、愛しあっているんですよ。もつと激しく……」

さくらは願望を口にした。

亜衣と麻衣の唇は息継ぎ程度の間しか空けず、再び重なり合った。

亜衣は麻衣の舌を吸った。

なんて甘いんだろう。

——姉妹でこんなことをしてはいけない。そんな気持ちもこの甘さの前では吹き飛んでしまう。どうにか麻衣の肩を押さえて舌を離れた。

「気が済んだでしょう」

「嘘つき……」

麻衣が口を重ねた。舌を吸われると力が抜けていく。麻衣のなすがままに吸われていた。それでいて心地良い。

麻衣の言ったとおり。嘘なのだ。いつまでもこうしていたい——。

「お姉ちゃんのことが好き。離ればなれなんてイヤ」

「わたしだって麻衣のことが好きよ。ずっといつしよにいたい」

かけがえのない姉妹なのだから大事に思うのは当たり前だ。でも普段は口にしない言葉を発して顔が火照る。照れ隠しで麻衣の唇を塞いだ。

ふたりでそれぞれの道を歩んで本当にいいのだろうか。決断済みのことな

のにいつになく亜衣は不安になってしまう。

——快幻坊との激戦。麻衣の薙刀さばきは見事だった。あの技の冴えは日頃の鍛錬の賜だろう。

麻衣にはつらく当たり過ぎたのかも知れない。天津宗家として、姉として、幻舟亡き後は麻衣には厳しく接してきた。

だが麻衣の薙刀術は生半可な達人を超え、玄妙の域に達している。もはや亜衣でさえ稽古相手にならない。実力が上の相手に指導などできるはずもない。ときに泰然自若とした麻衣にガミガミと口うるさく発破を掛けているだけだった。

おっとりとしているようでもきちんと修練を積み、万全の状態で備えていることは快幻坊との一戦でも証明されている。彼女は自分の為すべきことをしていた。

それに対して自分は天津宗家としてのお役目を果たせるのだろうか。あんなにも頼りになる妹がいなくて、この地を護れるのだろうか。

きつくキスをするのとそれだけ心細さや不安が取り除かれていく。キスがこんなに心安らぐものだとは知らなかった。初めてのキスが麻衣で本当によか

った。麻衣がいとおしくて抱き寄せる。体の温もりとともに気持ちまでもが伝わってくるようだ。

「お姉ちゃんのつばき美味しい。もっと頂戴」

亜衣は舌の上に唾液を乗せて、麻衣の口中へと運んだ。

麻衣は唾液を嬉しそうに飲んだ。今度は亜衣の番だ。チューと唾液ごと舌を吸い取ると一息に飲んでしまった。

「もう一度しようか？」

麻衣のつばきを味わいたくて亜衣は思わず口にしてしまった。麻衣に唾液を与えると、お返しに飲ませてもらう。今度はゆっくりと亜衣は味わった。うっとりとして体が蕩けそうになる。

「麻衣、大好きだよ」

「わたしだって。男子なんかよりお姉ちゃんの方がずっとかっこいいし」

キスをする度に好きという気持ちが増幅されているようだ。

麻衣にまた舌を吸われた。ふわふわとした浮遊感がする。妹の唾液に酔ってしまったようだ。ひとりじゃ立っていられなくて麻衣の体をぎゅっと抱きしめる。麻衣も同じらしく、しっかりと腰に手を回してきた。麻衣の手が亜

衣の体をさする。

好きな人が相手だと、撫でられただけでもこんなにも気持ちのよいものだとは。

亜衣も妹の背中から腰にかけて撫で回す。麻衣は嬉しそうに鼻を鳴らした。
——素直になつて。そうすればもつと素敵な気持ちになれるの。

頭の中で麻衣の声が響いた。気を張って生きていたのが馬鹿馬鹿しくなる。少し心をほどけば、こんな歓喜の世界があつたのだ。

この時間がいつまでも続けばいいと亜衣は思った。

7

【南東隔室】

高持^{たかもち}冴美^{さえみ}——隣町にある梅吹雪学園弓道部に所属する女子生徒である。

彼女の姉は高持冴子。鬼獣淫界の毒牙にかかり、邪欲に飲み込まれたあの少女だ。冴美は冴子のふたつ年下の妹である。姉と同様にロングヘアを編

み込んでアレレンジしている。カチューシャ風に頭上で巻いているのが彼女の工夫だ。

姉から天津姉妹のことはよく聞かされていた。姉は彼女たちを憎んでいたと思う。それが原因不明の熱病で寝込んだあとからだった。

憑き物が落ちたように、姉は穏やかになった。険が取れて表情が柔和になり昔のように優しい姉に戻った。卒業するころには天津姉妹の熱烈なファンにまで変貌していた。

卒業間近になって、姉は天津姉妹にプレゼントを贈った。鉾物のような外見の美しい石けんである。

『これすつごくイイ匂いなのよ。わたしがプレゼントするなんて光栄なことよ、喜びなさい。大切に使うのよ』、小耳に挟んだところによれば、そんなことを言つて渡したらしい。

その日、姉は心ここに在らずといった様子で、一日中ニヤニヤと気色の悪い笑みを絶やさなかった。天津姉妹が自分と同じ匂いに包まれる。それがよほど嬉しかったらしい。

あのプライドの高い姉をこうまで変えてしまう天津姉妹とは、一体どんな女性なのだろうとずっと疑問に思っていた。

天神学園との合同練習で天津亜衣と接する機会があった。天神学園弓道部の練習は走り込みからしてハードだった。と、言っても体育会系のよくあるしごきとは違っていた。集団走ではなく自分のペースで走る。亜衣は部員たちを置き去りにし、何度も追い抜き、その度に激励し、最後まで走っていた。

彼女だけ周回数が別な上、気分によつてさらに追加しているらしい。走り終えた部員たちが休憩している間もひとりで走っていた。控えめにみても三倍は走っていたのではないか。弓兵たるものそれぐらい当然ということらしい。確かに戦国の世ならば弓兵は相手に間合いを合わせ、地形の優位を得るために戦場を駆け回るのだろうが、冴美には理解しがたい発想だ。

地べたに座りこんでへばっていたら、亜衣がタオルを投げ渡してくれた。走るついでにタオルも持ってきてくれたらしい。

人に倍するトレーニングを自らに課しながら、他校の冴美にまで配慮を怠らない。なるほど亜衣は気配りもできるし、リーダーシップもある。姉が惚れ込むのも理解できた。

いよいよ弓を持つて的前に立った。的に狙いをつける亜衣の横顔は凜々しかった。冴美も他の部員と同じようにハートを射止められてしまっていた。

「亜衣さん、このタオル、今日の記念にいただいてもいいかしら」
もつと綺麗なのがあると亜衣は言ったのだけれど、冴美は半ば強引にそのタオルを貰った。お返しの商品を渡すという名目でアポイントを取り、亜衣に思いを告げた。

——冴美の思いは実らなかった……。

他校の生徒がいきなり告白したのだ。振られてしまうことは予想していたが、その時見せた申し訳なさそうな亜衣の顔にまたときめいてしまった。

彼女の人気ぶりからすれば告白なんて慣れっこだろうに……。

押しかけて迷惑をかけたのはこちらなのに……。

亜衣は少し困った顔をして、それが彼女の優しさと誠実さの現れなのだろう。その困り顔にさらに惚れ込んでしまった。

もつと彼女のいろんな顔を見たい。その願いは思わぬ形で結実した。見知らぬ老人にこの小部屋に導かれたのである。

亜衣も麻衣も冴美の見たことのない顔をしていた。いや、誰にも見せたこ

とのない顔だろう。頬が朱に染まり、瞳は潤んでいる。なんと艶っぽいことか。

姉妹はもう長いこと唾液交換に夢中だ。

唾液をお互いに与えながら、体と体をひとつにして摺り合わせている。あして口づけをしながら、肌を愛撫しているのだ。スポーツ万能の健康美を誇るふたりだけに淫靡な行為の中にもそこはかとなく爽やかさがある。互いを抱きしめる腕には武道家の娘らしい力強さが感じられる。時折のけぞらせ身体を預ける様もふたりの信頼の強さを雄弁に物語り素敵だった。

——見ているだけで胸がときめく。

天女のごとき衣装からのぞかせる首筋のラインにも惹き付けられた。冴美は筋肉が好きだった。と言っても男性的なごつごつとしたそれではなく、女性のナチュラルな筋肉が好きだった。ふたりの体は武術の実績からすれば信じられぬほど華奢ではあるが、唾液を飲み込むたびに鍛え抜かれた肉体がその片鱗を表し、筋肉に緊張が走るのがわかる。

麻衣の方は感受性豊かな彼女らしく全身を震わせている。手に力が入るのだろう。特に肩から二の腕にかけての三角筋、上腕二頭筋、上腕三頭筋の動

きが著しく二の腕の肌を引きつらせている。

亜衣の方はポニーテールのおかげで露出したうなじからはだけた背筋までがよく見え、僧帽筋の優優たる動きが冴美を飽きさせない。抑えがちな動きのなかにあつても背中までは隠せぬと見えて、とどまることのない波濤はとうのようなうねりが亜衣の本心を表しているようだった。

冴美は全裸だった。

立ったままの姿勢で垂直に伸びたガラス杭のようなものに股間をすり寄せている。尖った先端で割れ目をなぞり、華蜜が垂れていた。

何を思ったか――。冴美はガラス杭に腰を落とし、自らを刺し貫いた。肢体を震わせ陶醉している。ガラス杭を伝わり鮮血が流れ落ちた。

冴美は処女だった。

彼女は知る由もないが、他の三カ所の小部屋にいた少女たちも純潔の乙女だった。

皆、同時に破瓜の血を滴らせていた。

亜衣と麻衣は飽きる様子もなく、互いの口を貪^{むさば}っている。

姉妹が重ねてきた年月、それをゆつくりと語り合うように口づけを交わしている。

「あんっ……」

「はあっ……」

悩ましい声を出して息継ぎをする。唇が離れる僅かな時間も惜しむように、再び口を重ねる。それを繰り返した。

心も体もひとつにするようにこれ以上ないほど体と体と密着させている。縄でもより合わせるがごとく、互いの体をねじらせた。

ふたりの肢体をしっかりと覆っていた羽衣装束もはだけ、優美な肩がもろ出した。先の尖りさえ見えてしまいそうなほどに乳房が露出している。

いつのまにか艶姿を披露する姉妹は桜色に照らされていた。

亜衣が断ち切ったはずの呪印がピンク色に輝いている。

四方の壁から薄赤色の液体が壁面を伝わり流れ落ちた。四辺の側溝を満たした液体は、さらに床面の細かな溝を流れた。呪力を帯びた液体は蛍光色にひかり、室内を桃色に染めている。

姉妹のもとに近づく影があつた。

薄茶色のそれは枯れた木のようにでもあり、案山子のようにでもあつた。床を滑り、音もなく移動すると、姉妹のすぐ横で止まつた。

その横腹から腕が生えた。もともとの腕と加えて四本の腕と二本の足。針金細工の人形のように腕も足も体も至る所が細長い。その昆虫のような体つきはナナフシを思わせた。

奇怪な化け物が近づいても、亜衣と麻衣はふたりだけの世界に没頭している。

「おふたりとも美しくなられた。無粋に得物を振り回すより今のお姿のほうが相應しい。真の愛に目覚め、もつと美しく、女へと羽化なさるのです」

巨大ナナフシは呟いた。体格に比して小さな角張った頭に琥珀色の目がギリと光っている。

背丈と変わらぬほど異様に長い腕に薄皮がへばりついている。薄皮は棒の

ような体にもへばりついていてた。そこから蒸気が噴き出ていた。ここへの通り道である縦穴も今は塞がれてしまったのか、天井には蒸気が滞留し、もやがかかっていた。

——信じがたいことだが、この異形の化け物の正体は快幻坊である。

天津姉妹と激闘を繰り広げ、討ち取られたはずの怪僧だ。よく見ればもはやただのぼろ切れと化した法衣の成れの果てが腰に巻き付いている。

快幻坊の体を覆っていた無数の水風船は中身を全て噴き出し、骨組みだけの姿へと変態したのだ。



姉妹へと怪僧の腕がゆつくりと伸びた。

慎重な動きで指先が羽衣装束に触れた。邪悪を拒むはずの神衣は何の反応も示さない。最も信頼できるものとの愛情行為のなかで、羽衣軍神までもが弛緩しかんしてしまっているようである。

怪僧の二組の腕が姉妹の襟元を開かせる。四つの白く輝く乳房が完全に露呈した。

亜衣と麻衣は素肌が触れあう感触に戸惑いをみせた。それでもすぐ傍らにいる怪僧に気がつく様子はない。ふたりの目にはお互いだけしか映っていないようだ。

「これで終わりでよろしいのか。まだまだ足りぬはず。続けなされ」

怪僧の声を心の声と感じたのか。姉妹は口づけを再開した。剥き出しになった乳房と乳房をぶつけ合い、衣服越しとは違う感触に嘆息する。

「すべすべしてて……」

「心地いい……」

ふたりの気持ちはひとつ。同じ言葉を口にした。

「そうでございましょうとも。拙僧もお手伝いさせていただきます」

亜衣の背後へと回った怪僧は手を開いた。その手もやはり異形である。葉脈を残して枯れ果てた葉のような穴だらけの手の平。触覚とでも呼んだほうが適切であろう二十センチ近くはある細く長い指。

怪僧の細長い紐状の指がふたりの乳房に巻き付く。根元から締め上げた。押しつけあった乳房と乳房をさらに密着させる。

残る指先が重ね合わせた乳房の間へと潜り込んだ。乳房に埋もれ外から見

えなくなってしまうたふたつの乳首を、転がしては押し潰し、転がしては押し潰し、細い指先で丹念にひとつに溶け合わせる。

「ああっ……」

「はああっ……」

姉妹は声を昂ぶらせた。

息の合った動きで体を上下に揺さぶり、乳肉がふるふると震えた。

ときおり肉丘に埋もれたふたりの乳首が姿を見せる。

快幻坊の指を補助にして、ひとつになった乳首はキスをしているようだった。ピンク色の頂きがぐくねくとダンスを踊っている。

邪淫を討つべき姉妹は使命を忘れ、いまは快淫に夢中になっている。

怪僧の存在に気づく素振りもない。

二対の腕を器用に操り、巨大なナナフシのような化け物は乳房を丹念に揉みしだきながら、衣服を脱がせていく。

怪僧は感慨深げに独語した。

「かくも美しき姉妹愛かな」

火照りすぎた顔が熱い。脳までも蕩けてしまったようだ。

延々と粘っこいキスを繰り返したせいだろう。口の中がねばねばになっている。

「あつい……」

亜衣はつぶやいた。体が熱く、喉が渴く。

キスを中断した姉妹の間に氷柱が上から降りてきた。円柱状の氷の表面は透明な雫で濡れている。

（得体のしれないものを飲んでダメ）

頭脳は蕩けていても戦士としての直感が亜衣には働いていた。飲み物には気をつけよ、とは祖母の教えでもあるし、姉妹の苦い経験でもある。

しかし、耐えがたい渴きが理性を凌駕してしまう。

亜衣は恐る恐る氷柱へと舌を伸ばした。

まずは一口。

冷たくて甘い。口の中ですつと消える上品な甘さ。火照った体に冷たさが丁度いい。

清涼感溢れる雫を今度はためらうことなく、たつぷりと舌ですくい取った。目の前の麻衣も同じように舐めている。

（甘いわ。美味しい。甘露の雫だわ）

もうひと舐めする前に氷柱は頭上へと消えていった。

麻衣ももう少し舐めたかったのだろう。残念そうな顔をしている。

亜衣と麻衣は舌に残った雫を互いに分け与えた。麻衣は欲張りにも歯茎まで舐めてくる。亜衣も負けずと舐め返した。

氷柱がまた降りてきた。

亜衣は雫を舐め、麻衣の口中へと流し込んだ。麻衣も亜衣に雫を飲ませてくれる。麻衣の唾液と混ざり合うと甘みがまろやかとなり、美味しさが増した。亜衣が舐めては唾液をブレンドさせて麻衣に与え、麻衣も唾液をブレンドさせた雫を贈り返す。

亜衣の慧敏けいびんな観察力が健在であれば透明な雫が、少しずつ濁っていくことを見逃さなかっただろう。

雫の味は甘さだけでなく、苦みが感じられるようになった。さらには渋み、えぐみまで増していく。それでも姉妹は雫を舐めるのをやめようとはしなかった。

（この雫は一体なに？ 苦くて、どろりとしてて、青臭いの。とつても美味しい）

最初に舐めたときとは別物へと変貌していきながら、やみつきになりそうな美味の正体が亜衣は知りたくなかった。

——大人の味にございます。

声が頭に響き教えてくれた。

（これが大人の味……。もつと舐めたい）

その願いはすぐに叶えられた。亜衣の朱唇を氷柱が分け入る。亜衣は上を向いて口に含みやすくした。

氷柱から垂れた粘液が亜衣の口中を満たしていく。無色透明だった雫は、黄みがかった白色へと変色していた。



奇怪な氷柱の正体、それはほんの少し元を辿れば判別がついた。

辿るにつれて薄茶色へと色が変わっていた。

それは快幻坊の腕の一本が変化したものだった。

天井を仰いだ亜衣は飲みきれずに口からこぼした。腕の表面からにじみ出る粘液を亜衣は飲みきれずに口からこぼした。

麻衣は姉の口が犯されているとも知らず、姉の首筋を伝わる黄ばんだ白濁液をピチャピチャと舐めている。

「口で扱くので御座います。そうです。上手ですぞ」

怪僧の声は上ずっていた。快感を得ている声だった。

亜衣の口から腕を抜き取ったときには冷涼そうな氷柱の姿はなく、赤紫色のおぞましい男根そのもの姿へと変化していた。

何度もしたように亜衣は妹に白濁液を口移しにしている。いまだにその液体が甘露だと思っているのだろう。麻衣もうつとりと粘液を嚙下えんげしていた。軽い音を立てて姉妹の足元に何かが落ちた。それは羽衣装束の胴当てだった。帯にも似た形状の胴当ては羽衣軍神の防御の要である。それが剥ぎ取ら

れてしまった。

羽衣は完全にはだけで、下履きまでも露わになった。装着者の意思を反映するのか現代風のショーツと同じ形状である。清楚なふたりの人柄を示すように飾り気のない無地のショーツは純白に輝いている。

男根形状へと変化した腕は麻衣の口をも犯す。

「ごぶつ……」

新たに口から溢れた粘液は姉妹の乳房の谷間を通り、引き締まったお腹や下腹部まで汚していった。蒸気が立ち上った。下履きが粘液を浄化しているのだ。それもつかぬ間のことで純白のショーツは徐々に白濁液に染まっていた。

濡れたショーツから縮れ毛が透けている。

もはや羽衣装束の神通力は失われたも同然だった。

亜衣と麻衣は艶やかな姉妹レズビアンショーを相も変わらず繰り広げている。

上衣は背中からずれ落ち、肘に辛うじてひっかかっているだけとなっている。至要たる羽衣装束だとしても、もうふたりに取っては衣服など邪魔な存在なのだろう。あられない姿を気にする様子もない。

たつぷりと全身に垂らされた粘液をローション代わりにして体を擦り合わせた。皮膚を覆う粘着感覚が肌をより敏感にさせていく。女体のおうとつによつて生じる小さな隙間も粘液が埋めてくれ、姉妹は一体感がもたらす幸福に浸っていた。

くちゅっ……くちゅっ。

くちゅっ……くちゅっ。

途切れることなく、ふたりの体の間から粘着音が奏でられている。

粘液だけでなく、ふたりの汗、もちろん陰部から流れ出る淫蜜もそのいやらしい音の要因だ。

「ああっ……気持ちいい。お姉ちゃんのカラダとっても素敵」

「麻衣のカラダだつて。肌をあわせるだけでこんなにも気持ちいい」

「もつとくつつけて。ぎゅつとして。もつと強く」

「麻衣、あなたを離さないわ」

めくるめく快感の虜となった姉妹の傍らで、快幻坊は下半身へと標的を移していた。姉妹の下着は既に床に輪をつくって落ちている。裾に頭を突っ込み、剥き出しになった秘処を観察しながら、内腿を流れ落ちる蜜をすすっている。

「もう少し、あと少しでございます。垂れ流しなさい」

怪僧が姉妹の腰を後ろから押した。亜衣と麻衣は脚を互い違いにさせ、相手の太腿に濡れそぼった秘所を滑らせる。巫女姉妹は立ちながら素股をしていた。

ぎこちなかったのは最初だけで、類い希な運動神経を誇る彼女たちは器用にバランスを取りながら腰を動かす。振れば振るほどに姉妹の腰つきは大胆になっていく。局部を摩擦するあいだも絶えず口は重ねたままだ。

腰をくいくいと深く振るい、その動きがようやく止まった。亜衣も麻衣も

体を震わせている。姉妹は同時に昇天したのだった。

「ああんっ……護符が……」

「溢れちゃう……」

快樂に囚われていても、第二の処女膜とも言える梅の護符は気になるらしい。

放心状態のふたりはいっしょに頂点を極めた喜びに柔和な笑みを浮かべていた。口の端からよだれを垂らし普段からは想像もつかないだらしない顔をしている。絶頂の余韻が収まると、ふたりは互いに垂らした口元の唾液を舌で舐め取った。きれいに拭き取るとまた舌を絡めだした。

快幻坊は姉妹の股間を探った。

立ち上がった怪僧の両手の指先にはほのかに光る花卉があつた。姉妹を護る最後の砦、梅の花びらの護符は最後の力を振り絞るように稲光を放った。それも怪僧の指先を焦がすにとどまった。花卉から輝きが消えていく。力尽きた護符はただの花びらとなった。

快幻坊の目が怪しく光ると、空中に小瓶がふたつ出現した。赤い液体に満たされた小瓶に姉妹それぞれの花卉を収めた。

「仕上がるまでのあいだ、いましばらく味見をさせていただこう」

快幻坊の関節の節目、その至る所から白い糸のような触手が無数に伸びた。先を争うように糸状触手は姉妹は群がっていく。剥き出しの首筋、優美な背中や、すらりと伸びた美脚、羽衣上衣の隙間からも侵入し、姉妹の至る所で汗と淫蜜をすすりだした。

快幻坊は亜衣の股の間に頭を忍びこませ、口から暗紫色の細長い舌を伸ばした。淫靡な摩擦によって口を開いた陰部はまだ刺激を欲しそうにぴくぴくとひくついている。快幻坊は淫穴に舌を潜り込ませた。もう護符はない。舌は奥深くまで侵入していく。

「亜衣様の蜜は美味でございますな。さて麻衣様のお味は……」
護符を失い、いよいよ危機が迫っている。そんなことも露知らず、姉妹巫女は半裸の肢体を貪られていた。

小瓶の中で梅の花びらは赤く染まっていた。護符へと生成される過程で白梅の花はうつすら赤みがさしているが、もつとどぎつい。梅肉の色へと変色していた。

快幻坊が何やら呪を唱えると、紫色の光点が生まれた。それが葉脈を走り、軌跡を残して、花びらに奇妙な呪印が描かれた。

怪僧の下腹が扉が開閉するように割れた。そこから黒紫色の陰茎が飛び出した。全体が粘液で覆われ、妖しく黒光りしている。怪僧は黒魔羅の先端に梅の花びらを載せた。

「愛の深さをご姉妹は知らぬ。絶頂の渦で忘我を彷徨^{さまよ}う悦びを知らぬ」

怪僧がふたりの腰を撫でる。上衣だけとなった羽衣軍神は腰を覆っているだけだ。それさえも汗と粘液で白い衣は透けている。腰の悩ましいくびれも、ふつくらとした臀丘も、幻想的に浮かび上がらせていた。

「お尻を突き出しなされ」

快幻坊の声が天の声か、お互いの声に聞こえるに違いない。素直に応じて、

姉妹は臀部を後ろに向けた。衣の裾をめくり上げると、成熟したヒップがまろびでる。亜衣の尻は引き締まり、麻衣の尻は少し大きいだろうか。内ももと内ももの隙間へ怪僧の指が消えていく。蜜部を卑猥な指先で調べられても、ふたりとも脚はピンと伸ばしたままだ。

節くれ立った長い指先を蠢かせながら、怪僧はしばらく思案していた。天女ふたりの女体はこの得体の知れない淫鬼をも惑わすのだろう。

快幻坊はギョロリと亜衣に目を向けた。

「まずは亜衣様からにございます。いざ、つかまつりますぞ」

亜衣の背後に立った快幻坊は、彼女の両手を頭上でひとまとめに掴み、差し出された尻に狙いを定めた。

そしておもむろに突き込んだ。



亜衣は胎内をえぐる衝撃に叫喚した。切り裂かれるような痛み、いや痛みよりもドス黒い穢れが体のなかに塗りつけられる感触に怖気が走る。

（犯されている……化け物に？）

再び衝撃が走った。今度こそはつきりと理解した。後ろから淫鬼に犯されていると。そして背後から感じる邪気には覚えがあつた。

「貴様は……快幻坊か！」

「ほう、亜衣様は流石に勘のよい。そのとおり、わたくしは快幻坊にございまする」

姿形がまるで変わった陵辱者の正体を、ずばりと言い当てた亜衣を怪僧は褒め称えた。

「くうつ、いったいどうして……。汚らしい！ わたしから離れろっ！」

「このようにキツく締め付けられては離れるに離れません」

「おのれ！」

「それではこれはおわかりになりますかな？」

虫の様な姿にそぐわぬ慙慙いんぎんな言葉使いで怪僧は問うた。繰り出す魔羅に異様な淫気が立ち昇っていた。

亜衣は怪僧の全存在を凝縮したような禍々しい邪淫の気を魔羅から感じた。だが、それだけではなく魔羅の先に奇異な存在がある。

「あなたたちがいつも身につけているものです。あなたの最も愛しい人が身

につけていたものでございます」

「ぐううつ……これは？」

膾の中にありながら異物感をさほど抱かせない。日頃から身につけているからだ。女陰の中に――。でも、聖なる装身具であるべき小片から、邪な力を感じられた。

「これは梅の花の護符？ 貴様、何をした」

「あふれ出した護符を元のところに戻しているだけでございます」

「やめろ、これ以上なかに入れるな」

「大事な護符が一度と外れてしまうことのないようにして差し上げましょう」

「いやっ……奥まで……」

「くくくつ、礼には及びませんぞ」

ずぶずぶと小刻みに抜き差しし、少しずつ護符が奥へ奥へと送りこまれる。怪僧がぐいつと気合いを入れて腰を突き込み、遂に護符は膾の行き止まりまで到達した。それは同時に最奥まで亜衣が犯されたということでもあった。

「麻衣様はまだ欲しております。亜衣様と同じ。さあ、続きをなさいます。拙僧のことはお気遣いご無用にございます」

乱暴に頭を掴まれ、まどろんだままの麻衣と顔を密着させられた。麻衣が口を重ね、何度もそうしたように反射的に舌を絡めてきた。

——覚えている。麻衣とした淫戯の全てを覚えている。麻衣のことは愛している。しかしそれは妹として、たったひとりの家族としてだ。純粹な姉妹愛がどうしてこのような淫らなものへと変質してしまったのか。

歪められている。淫欲にまみれた愛情へと歪められている。怪僧の秘術に陥ったのだ。淫敵の罠にむぎむぎと掛かってしまったのだ。

（わたしのせいだ。付け焼き刃の知識で邪淫の結界を無効にしようとしたのが間違いだったのよ）

犯される悔しさに目をつむると、麻衣の幻影が見えた。麻衣が官能への世界へ手招きしている——。そうか、これは麻衣のつけていた護符だ。胎内奥深くに貼り付けられた小片の正体を蒼天女は見抜いた。

麻衣が亜衣の舌を吸った。

（だめっ、力が抜けちゃう）

数え切れないほどキスをして、甘く蕩けるようなキスの味に亜衣はすっかりと魅了されてしまった。秘部からも初めて味わう感覚に襲われた。愛する

人を受け入れる準備が整ったねつとりと溶けた膺道、そこを陰莖が通過する度に、最奥まで突き入れられた護符を叩く度に、紛れもない快感が背筋を走る。

（このままでは……。麻衣、ごめんね。我慢して）

「痛っ！ ……お姉ちゃん？」

亜衣は麻衣の舌を噛み、彼女はやつと覚醒した。

「なんたること！ 妹君を拒むとは……。…」

「麻衣、これは敵の罠よ。戦いなさい」

「我が秘術にこれほど抵抗するとは、流石は天津流巫女舞ご宗家様。一筋縄ではいきませんな」

麻衣の魅惑のキスを拒んでも、亜衣の窮地は変わらない。忌むべき淫鬼の魔羅に貫かれているのに、快感はどんどん強くなっていく。子宮口に張り付いた護符を魔羅が打つたびに、和太鼓の音のような重い衝撃がずんと腹に響く。

ずんずん、ずんずんと快幻坊は容赦なく膺奥を叩いた。

「ううぐっ……。ううっ……。負けるものか」

齒を食いしばり襲い来る快感に耐える亜衣。怪僧はグイグイと腰を動かすピッチを速める。その動きが遂に止まった。

「くうううっ」

快幻坊が射精した。それでも亜衣は護符がもたらす快感に最後まで抗った。あれほど姉妹レズに耽溺していたながら抵抗した精神力は賞賛に値するだろう。しかし、だからこそ消耗した。膣に粘液を吐き出される汚辱感の中、亜衣は自失してしまった。

12

「お姉ちゃん！」

床に倒れた亜衣を助けようと麻衣は手を伸ばす。

だが、怪僧の異様に長い手がそうはさせない。そのまま麻衣を投げ倒した。呪印の描かれた石畳が隆起している。麻衣はそこで犯そうという腹づもりらしい。倒れ込んだ麻衣の後ろから快幻坊が迫った。

その刹那、麻衣が振り向きざまに手刀を見舞った。

怪僧の腕がぽつきりと折れている。折れた前腕をつきだして、快幻坊がや
つと理解したほどの早業だった。

姉妹レズに蕩けていた麻衣から予想外の反撃を受けて快幻坊はたじろい
だ。

さらに驚くべきことに――。

麻衣は己の下腹部に平手を見舞った。

見よ。麻衣は凜然とした戦士の顔になっている。

彼女が大きく頭上に手をかざすとその手に飛び梅の枝が現れた。雷光を放
つと薙刀へと姿を変えた。

「よくもお姉ちゃんを。あなたは絶対に許しません！」

「何をおっしゃる。亜衣様と麻衣様が結ばれるは学園の皆様も望んでおりま
する。麻衣様ご自身もあんなにも安らぎに満ちた顔をしていらしたではあり
ませんか。これは必然の運命なのでございます」

「世迷い言を！」

四本腕を折りたたみ、カマキリのように快幻坊は構えた。昆虫らしい俊敏

な動きで腕が伸び、鋭い槍のごとき刺突が麻衣を襲う。

——シュツ、シュツ、シュツ、シュツ。

空気を切り裂く音が続けて響いた。怪僧の四連撃を麻衣は薙刀で応戦する。白刃がきらめくたび、細枝でも切るように快幻坊の腕が切り落とされていく。四本腕の攻撃に対し、一本の薙刀が勝っている。尋常ではない。単に剣速だけではない。まったく無駄のない剣捌きがそれを可能にしている。天賦の才を持つものが血の滲む鍛錬によつて初めて成し得る技量と的確な攻撃予測による神業である。

薙刀は寸分の狂いもなく左右に振られ、快幻坊の腕は見る間に短くなっていく。

——麻衣は薙刀を握り直すと刃先を快幻坊の首に向けた。もう快幻坊に腕はない。

「お覚悟！」

とどめの一撃が怪僧を両断するかに思えた。

そのとき麻衣の目に快幻坊の節くれ立った脚が、鉤爪を石畳に引っ掛けているのが映った。足の指先が大きく伸び、力を蓄えている。

（しまった）

腕による攻撃は囷。上に注意を向けて置いて足元で仕掛けを練っていたのだ。

後退する一方だった快幻坊が一転してカタパルトから飛び出すように突進した。その速度は麻衣の予測をも超えていた。水風船を捨てた快幻坊の真のスピードであつた。

意表を突かれた麻衣は刃の圈内よりも内側に侵入されてしまう。それでも麻衣は力を緩めることなく薙刀を振るつた。

紅の巫女が持つ薙刀は神器である。刃が霊刀なら柄は神木だ。岩をも砕く天神の力が籠められている。快幻坊とて打ち据えられればただでは済まない。だが果たして――。

薙刀の柄が怪僧の横つ腹を捉えた瞬間、くるりとその体は柄を軸にして回転した。麻衣のお株を奪う、舞のような動きで薙刀の力を受け流す。そのまま怪僧は麻衣の背後をとつた。



怪僧には既に新たな腕が生えていて麻衣の動きを封じている。

「本来の技の切れがございませんでしたな。見事な精神集中といたいところですが、わたくしの触覚は麻衣様から漂う女陰の匂いを捉えております」
腹から生えた快幻坊の腕が、股間を探り、細長い指が内へと侵入する。するすると深く深く入っていく。

「活！」気合いを入れる麻衣だがすぐに驚愕の表情へと変わった。

「……護符が？ ……どうして」

丹田に気を集中し、護符の力で怪僧の指先を防ごうとした麻衣であったが、膣内には肝心の護符がなかった。

「おのが蜜で溢れさせたことも忘れて夢中になっていたとは。ご安心召され。護符は拙僧が預かっております。ほうっ……やはりまだこんなにも濡らしたままではありませんか。これでは戦える道理がございせん」

「やめてっ」

「そうですね、まずは護符を戻さねば」

刻印が刻まれた花びらが舞う。ひらりひらりと漂った護符は陰茎の上へと舞い降りた。

麻衣は薙刀を握りしめたまま、頭上に腕を拘束されてしまっている。身をよじることままならない紅の巫女戦士に淫僧の怒張が湯気のように淫らの気を立ち昇らせる。難なく快幻坊は肉びらのわけめに魔羅を突き入れた。

護符はなくとも淫鬼に穢されるわけにはいかない。麻衣は聖なる気を膺に集めた。

——ズブリ。

ゆつくりとだが確実に速度を落とすことなく、魔羅は閉じようとする膺肉を分け、押し入ってくる。いともたやすく巫女の聖域を犯されてしまう。

護符だ。護符であつたものと言うべきか。梅の花びらが水先案内人のように穢れなき聖なる膺道を先導している。

「これが麻衣様。なんと初々しい。お体のなかまで可憐でいらつしやる」

肉棒を中程まで突き込んだ快幻坊が媚肉の感想を口にした。初々しいのは当然のことだろう。彼女は淫界の魔具で無理矢理に破瓜させられたものの、男を受け入れたことなどなかったのだ。

処女も同然の清らかな女体に淫気をまとった魔羅が挿入されていた。それでも飽き足りず、魔羅はなおも奥深くを窺っている。

「だめっ……それ以上入ってこないで、もう抜いて」

「左様でございますか」

意外にも快幻坊は浅瀬の抜き差しに切り替えた。ズブリ、ズブリ、抜いては入れを繰り返し、男を迎え入れる初めての体験を何度も麻衣に味わわせた。

（お姉ちゃんが目覚めさせてくれたのに……）

犯される恥辱を受けながら、姉は麻衣を淫術から解放してくれた。それなのにむぎむぎと敵の手に掛かるふがいなさに麻衣は唇を噛んだ。

麻衣にとって怖ろしいのは、次第に媚肉が肉棒を拒絶ができなくなっていることだ。

魔羅が護符を後押しするたびに亜衣との甘美な時間が思い返されることだ。

姉に抱きしめられたときは何の不安もなかった。姉の愛撫の全てを喜んで迎えていた。あのときのように胎内が無防備になっっていく。

「だめっ……だめっ……」

「ご心配召されるな。わたくしは麻衣様が姉上様と結ばれるための下準備をしているに過ぎませぬ。悦びを知るのです。真に亜衣様と契りを果たすには

必要なことにございます」

「誰もそんなことは頼んでいません」

「ご姉妹の御心は何もかも承知しております。ほれ、おからだが性愛のなんたるかを知りたがつておりまする」

ほつれた膣肉を分け入って、魔羅が深く挿入された。

怪僧が射精した。護符が精液を受け止めることはない。むしろ子宮の中へと吸引していた。

穢れた魔精が神聖無垢なむろへと吐き出されていった。

13

亜衣は女の唇を感じて目を覚ました。

麻衣とのキスで知った女性の柔らかな唇。亜衣の口が唇で塞がれているだけでなく、体のあちこち——首筋や、乳房、太腿にも女の唇を感じた。

（キスされている。誰だろう？ 麻衣だろうか）

ゆっくりと目を開くと、そこには級友の奈那実がいた。

「よかった。ずっと気を失ったままだったから心配してたんだよ。でも安心して。悪いやつなら麻衣がやつつけてくれたわ。わたしたちのことも助けてくれたのよ」

奈那実は言った。

「ほら、先生とも目覚めのキスをしましょう」

教育実習生の美由衣先生が上から横から言った。床に転がった亜衣は彼女に後ろから抱きかかえられていたのだった。

美由衣に唇を奪われる。ねっとりとしたキスだ。ううんっと思わず亜衣は声を漏らした。

「わたしも亜衣さんになりたいわ」

乳房の愛撫していた少女が顔を上げて言った。美由衣の唇が離れると、すぐに唇を寄せてきた。切れ長の目で誰だかわかった。高持先輩の妹の冴美だ。他校の彼女がどうしてここにいるんだろうと疑問に思いながらも亜衣は唇を吸われた。

「わたしもいるんですよ、亜衣先輩」

「あなたは……さくらちゃんなの？」

ふとももを舐めまわしていた新聞部のさくらは上体起こして、亜衣の横にいた奈那実と位置に移動する。

「亜衣先輩、わたしともキスして下さい。すごく怖かったんですよ」

確かにさくらは震えていた。怯えた少女を拒むような亜衣ではない。抱きしめてやるとさくらは顔を近づける。その距離がゼロとなるまでさくらは顔を寄せた。

女たちは、思い思いに亜衣を唇で愛した。

さくらのキスは童顔の彼女に似合わず巧みだった。誘うような舌遣いに翻弄され、亜衣からもさくらの舌に擦り合わせていた。

亜衣の背中へと移動した奈那実は、「亜衣の耳たぶ、とっても柔らかいと感激している。」

乳房に張り付いた美由衣は、「おっぱいもつとしやぶらせて」そういいながら夢中で吸っている。

ふとももを担当する冴美は、きわどく内ももを責めてとうとう脚の付け根まで辿り着いた。

「すぐ濡らしているわ。亜衣さん舐めてもいいかしら？ いいわよね」

亜衣の返答など待ちきれないといった様子の冴美は割れ目へ舌を伸ばす。女たちは唇だけでなく、指先でも亜衣を悩ませた。女ならではの繊細な指遣いで体の隅々までなぞられ、どうしていいかわからずに亜衣は体をくねらせた。女たちの手はあちらこちらから伸びてきて逃げ場がない。

「ああっ……あんっ……みんな、もうやめて」

手で押しのけて、亜衣は抵抗する。思いのほかのはなはだしきに女たちは手を休めた。

そろりそろりと奈那実が近づいてきた。警戒心を感じさせぬよう、そんなゆつくりとした動きでだ。

「あなたたちのしてたことみんな見てたのよ」

「……………」

親友のひとことで亜衣が凍りついた。その隙を逃さず、奈那実に唇を奪われる。

「隠すことはないのよ。みんな祝福してるんだから」

「そうですよ先輩。すぐくステキだったな」

（見られていたなんて……どうしよう……）

亜衣が困惑するあいだも、奈那実の緊張をほぐすような優しいキスが続けられている。

「ふたりとも情熱的だったわ。でも女の子同士どうやってしたらいいかわからないんじゃないかしら？」

確かに麻衣とのキスは素敵だった。でも、気持ちをぶつけ合うばかりだったのは事実だ。

「ねえ、わたしたちに任せて。教えてあげる。キスで気持ちを伝える方法」

「麻衣先輩もきつと喜んでくれますよ」

奈那実の舌がごく自然に侵入してきた。無理強いされることなく舌が絡み合っている。一歩引いたところがある奈那実らしい思いやりのあるベーズだ。

「次は私の番ね」

美由衣に選手交代してキスのレッスンが続けられる。

大柄なだけに美由衣の舌は大きい。そしてよく動く。年長者らしく四人の中でも一番レズキスに慣れている感じた。

思えば麻衣とのときはどこか単調だった。とても幸福だったけれども――。

女たちの技巧を尽くした口づけに比べれば麻衣とのそれは児戯にも等しい。こんなキスを麻衣と交わしたらもっと深く繋がりあえるのだろうか？ いつの間にか期待が芽生えていた。

ちゅうつと舌を吸われた。嬉しそうに美由衣は鼻を鳴らす。ヌプヌプと遠慮なく美由衣の舌が出入りし始めた。

「もつと力を抜いて、舌を絡ませて。大丈夫、先生に任せればいいのよ」
耳を舐めながら、奈那実がレクチャーする。

さくらは忙しく動きながら指先から脇腹まで唇でついばむ。

太ももを舐めていた冴美が内ももの間に顔を挟み、今度こそ本格的なクンニリングスを開始する。

いつしか、亜衣は羽毛のごとく極限まで体を脱力させている。
女たちの舌に包まれて、口戯に身を任せていた。



「うーんっ……うっ……はあぁう」

親友との濃厚なベーゼを交わす亜衣から悩ましげな声が溢れ出ている。

「姉妹であんなに愛し合うなんてすっごく興奮しちゃった。亜衣、責任取って。わたしのさつきからこんなになってるんだから」

耳元で奈那実はささやきながら、亜衣の横へと移動した。そして亜衣の手を股間へと導いた。

そこは熱く潤んでいた。

「わたしのだつて……お願い弄って」

さくらと位置を変えた冴美が懇願する。冴美はキスでもお願いしてきた。舌の裏側を焦らすように優しくなぞり、亜衣の舌を軽く吸い上げる。もつと強く吸って欲しいのでしようともでいうように。

それと呼応するように股間に移った美由衣が肉襞の内まで舌を侵入させてきた。

亜衣の指が奈那実と冴美の陰部で動き始めた。彼女たちはそれが嬉しくてたまらないといった様子で喘ぎ声を出した。

（すっごく濡らしてる。わたしもきつと……）

美由衣が蜜を吸うジュウッジュウッという音に合わせて亜衣は上ずった声を漏らした。

麻衣との続きがしたい。亜衣のなかのどこかで、今日初めて知った女同士の甘美な性愛を求めてしまっている。

女たちは亜衣の周りをぐるぐるとポジションを変えながら愛撫を繰り返した。そうして何周したのだろうか。奈那実が言った。

「そろそろ寂しくなってきたでしょう。女の子同士じゃ一番疼く部分が埋められないもの」

奈那実は右手に棒のようなものを持っていた。それは男根の形をした張形だった。血管まで浮いていてリアルだ。

「だめよっ、そんなもの入れないで」

「へえー、入れるって知ってるのね。堅物の亜衣がこれを知ってるとは意外だわ。じゃあ、どこに入れるかも知ってるわね」

「いやよ、やめて、奈那実」

「そうよ、そこよ、わかってるじゃない」

股間を隠そうとする亜衣に、無邪気な笑みをみせて奈那実は近づいた。美由衣と冴美が亜衣の両腕をがっちりと押さえつける。

張形が肉花を割って挿入された。

「ふふっ、結構すんなり入っちゃった」

「だめっ、お願い抜いて」

「この分ならすぐに馴染むわ。疼くんでしょう、ここが」

奈那実は浅瀬で抜き差しした。亜衣のそこは同性の舌ですっかりほぐれていた。本物同様のカリ首で肉襞をめくられるたびに快感が亜衣を通り抜けた。

奈那実は手応えを感じたのか、一気に張形を奥へと送り込んだ。

「あんっ……ううっ……」

亜衣の体に甘美な電流が走った。それは全身をビクンとさせてしまうほど強烈だった。

（あの護符が……まだあそこのなかに……いけない、あんなものがあつては……）

快幻坊の秘術によつて淫ら符と化した梅花がまだ膣の中に入っている。巫女の聖域を護っていた符はその属性が正反対になつてしまった。淫らの符と認めても、元は姉妹のにあつた花びらだ。怖ろしいほど膣壁に馴染む。愛しい麻衣の護符だったのだからなおのことだ。そこを張形で押されるたびに墮落の誘惑に満ちた淫撃を膣壁の奥深くまで浸透させてくる。

「奈那実、許して……そこをそれ以上したら……」

「亜衣が奥が好きだなんて知らなかった。ほらほらもつと突いてあげる」

「そんなに……いやっ……ああんっ……」

ビクビクして先輩いやらしいです、さくらが率直な感想を述べる。本当にねえ、いやらしすぎるわ亜衣さん、冴美も相槌を打った。

友人たちに品評されながら感じてしまうのが恥ずかしくてたまらない。だが視線を意識すればますます官能のボルテージが上がってしまうのだ。

「どうなの亜衣？　こうされるとどうなるの？　さあ教えてよ、ねえったら」

「わたし……ああっ……ああっ……んんうっ……」

亜衣はたまらず昇り詰めた。

満足げに笑みを浮かべる奈那実から美由衣へ張形は渡された。

「亜衣ちゃん、わたしのことをお姉様つていえるまでしつけてあげる」

バトンタッチを受けた美由衣は楽しそうに言った。

女たちの宴は当分終わりそうにない。

呪印がピンク色に輝き、女体を照らす。

その少女——麻衣は上衣も剥がされ、指出しの紅い長手袋しか身にまとってはいない。

ライトアップされた桃色淫景。

巨大な舞台装置を思わせる円形に隆起した石舞台の上で麻衣は牝犬の姿勢で犯されていた。

丸みを残した愛らしい顔も朱に染め、桃色の吐息を漏らしてすすり泣いている。

「随分と感じてるようすなあ、麻衣様」

「はあ……ああ……違う、感じてなんかない」

「ほっほう、麻衣様は素直と聞いておりましたが、なかなかどうして、亜衣様に似て強情ですな」

「ううっ……うんっ……いやっ強くしないで」

怪僧の責めが激しさを増した。

麻衣はよく耐えた。が、執拗な猛攻に腰を振るわせた。

「はあっ……はあっ……違う……違うの……」

うわごとのように麻衣は呟いた。

あごの先からぽたりぽたりと汗が滴る。汗の流れ落ちた先、石畳の表面で群生している苔が変色していた。天女の汗を被り石苔は色が薄くなっていた。白く輝くような色となった苔はさらにほんのりと赤く色づく桜色へと変わっていった。

変色部分はもう一箇所、麻衣の下腹部の下でも拡がっていた。汗に加えて華蜜までもが降り注ぐそこは変色のスピードが速い。すでに麻衣の体の幅以上に丸く桜色に染まっている。天女の淫汁は魔界の苔にとって最適な養分なのだろう。ふさふさと成長している。天然のボアシートは妹巫女の膝小僧や手の平がすりむけるのを防いでいた。

「本日は亜衣様と麻衣様が仲睦まじく結ばれためでたき日。祝いの酒を用意してございます」

ガラスの杯が二つ、麻衣の体の下へと滑ってきた。杯は透明な液体でなみなみと満たされている。麻衣の乳房の下でピタリと杯は停止した。

「この酒は《淫ら沼》といひましてな、滅多に手に入らぬ代物に御座います」
酒精の匂いが鼻をつく。得体の知らぬ淫魔の酒だ。飲んでではならぬと麻衣は固く口を閉ざした。

杯から水柱が立ち上がった。その向かう先は彼女の唇ではなかった。すると伸びて麻衣の乳首を捉える。なぜ杯がふたつだったのか麻衣は理解させられた。

「やだっ、乳首、飲み込まれて……」

「この酒はこうして体で浴びて飲むのです。それもう一杯」

またひとつ杯が滑り流れた。

「だめ、そこは……ううむうっ……やんっ」

杯は下腹部へと滑り、そこで水柱を立ち昇らせた。怪僧と繋がり合ったままの陰部。その入り口で尖る淫核を水柱が包み込んだ。魔酒はそこを包む薄皮を剥いてやわやわと揉みたてている。

「麻衣様、この酒を味わう流儀はまだこれからにございます。杯をご覧下され」

平べったい器の底に金色の文字が書かれている。梵字にも似たそれから魔

の力が感じられた。その文字が妖しく輝きだした。

水柱に飲み込まれた乳頭が杯へと引つ張られる。そうはさせまいと麻衣は踏ん張ったが、水流による乳首責めは悪魔的な優しさがあつた。乳首を揉みほぐされて力が抜けてしまう。杯に乳頭が飲み込まれてしまった。

そこへ快幻坊の腕が伸びてきて乳首を摘まむ。怪僧の指先に導かれ、麻衣の薄桃色の乳首は杯の文字をなぞつた。

「くうっ」

麻衣は呻いた。一面なぞるごとに総毛立つような刺激が走る。文字を書き終えると後は勝手に乳首が動き出した。ただでさえ勃起した乳首はさらに伸びきり、書筆の代わりとなつて、繰り返し金色の文字を追う。

乳首が杯の底面で右に左にグニヤリと曲がり、とめでは押し潰される。はらいでは乳首の先端がかすれる感触がなんとも切ない。

「拙僧が百年にわたり討究し、転迷開悟てんめいかいごに至った『快悦文字』にござります」

快悦文字を書くごとに、乳房の表面がぞわりとして、毛根から魔酒が染みこんでくる。そのたびにアルコール特有のひんやりした感覚とその直後に来る異様な熱に麻衣は苦悩した。さらには乳管にまで魔酒が浸透し、乳房全体

へと魔酒が染み渡っていく。

「こんなのやめて」

「フフフッ、こちらでも味わえば麻衣様のお考えも変わるでしょう」

快幻坊は下腹部の下に置かれた杯を持ち上げ、麻衣の入り口へとぴったりとあてがつた。

そこも乳首と同じように――。

水柱に限界まで伸ばされた淫核が快悦文字をなぞる。魔酒がその小さな肉突起を形成する細胞のひとつひとつまで染みこみ、耐えがたい熱を生んだ。

そして淫核がそのように動けば当然のこととして――。

「やんッ、腰が動いちやう」

快幻坊は自らの腰の動きを止めて、快悦文字をなぞるごとに大きくなる麻衣の腰遣いを眺めている。麻衣は前後の動きだけでなく、左の肉壁にカリ首を押し当てたり、膣上壁のざらついた部分を捉えたり、上下左右の動きを加え、立体的に腰を動かしている。

「快悦文字は悦楽のツボを体现する文字。人によりその位置は違えども、その全てがこの文字の中にあるのです。さあ、麻衣様、ご自分のツボをお探し

なさい」

「いやんっ」

麻衣はそう啼いては、自分が嫌がる部分をその言葉とは裏腹に力を込めて剛直になすりつけてしまう。快悦文字をなぞった反復運動は淫らになるばかりだ。

「もうっ……いやです。止まって……こんなあ……いやなのに……ああんっ……」

麻衣が嘆いたところで、自分自身の制御を離れた腰の動きは止まらない。それどころかよりの確に官能のポイントを捉えてしまう。それが強制されているのか、自らが望んでいたことなのか麻衣にはわからなくなっていた。「次はどこで飲みましょうか？」言いながら、快幻坊は自分の直下を見た。双臀の奥深くでヒクヒクと震えている箇所がある。

「ほう、ここでございますか」

「そんなところ……だめえっっ」

麻衣の尻の割れ目を冷ややかな液体が流れている。快幻坊がそこに一升瓶を傾けていた。重力など無視して窄まりに魔の液体が留まっている。

不浄の穴を閉ざしても、維持できない。動き続ける自分の腰遣いで、麻衣の体に快感が走るときつく締めたあとに緩んでしまう。肛門が緩むのに合わせて、魔酒が流れ込んでくる。

「だめっ、だめっ、入ってきちゃうっ。くうっ……お尻灼けちゃうよっ……」

直腸が魔酒浸しになると、その感覚は熱さばかりに取って代わられる。肛門にお灸でもすえられているかのような熱量に麻衣は半狂乱となった。括約筋は麻酔を打たれたように収縮させることがままなくなる。怪僧はちびりちびりとそこへ魔酒を注ぎ足すのだ。

そろそろ頃合いと、快幻坊が麻衣にのし掛かる。麻衣の動きにピストン運動を同期させ、巧みな竿遣いで官能のポイントでの摩擦時間が長くなるようにする。うつすら紅く染まった乳房を握りしめ、びんびんに勃起した乳首を揉み潰す。股間に手を伸ばして、淫酒の水柱に囚われたままの淫核を転がす。さらには魔酒で濡らした指で菊花をぐりぐりと弄った。あげくは膣奥に張り付いた護符の刻印まで呼応し、亀頭で打つたびに淫らの波動を放った。

狂乱の度合いを増す麻衣に、強く酒精の匂いを放ちながら怪僧は顔を近づけた。乱暴に髪を掴むと麻衣の頭をねじ曲げて口を塞いだ。麻衣の口か

ら液体がこぼれる。

魔酒を無理矢理飲まされているのだ。膣奥に圧力を掛けながら、怪僧の長い舌が喉奥までねじこまれると、麻衣は吐き出すこともできず、喉を動かして魔酒を飲んだ。

「なかなかの飲みっぷりですなあ」

「はあっ……はあっ……はあん……ああっ」

「《淫ら沼》の酔いが回っているようですぞ。ほれ、ここは底なし沼のように。ねつとりと絡みついて奥へ奥へと誘いこんでいるではありませんか」
「ああんっ……だめっ……アタマもカラダも熱い。ああっ……だめになっちゃうっ」

「よいのです。よいのです。これが大人の酒の嗜たしなみ方というもの。存分に快悦に酔いなさい」

「あうっ……いつ……いつ……はうっ……」

麻衣は達した。絶頂特有の痙攣けいれんを繰り返している麻衣に怪僧は精を放った。穢けされてはならない聖なる子宮で魔精をたっぷりと飲まされているのだ。

「実によい交合でしたぞ」

「はあっ……はあっ……」

「麻衣様は慈愛の方にございます。下賤なわたくしめの魔羅を慈しむようにねつとりと肉を絡ませ、根元まで麻衣様の大きな愛で包んで下さいました。拙僧は感動しているのでございます」

怪僧が麻衣をそう品評した。麻衣は苦渋の表情でそれを聞いた。

精を放つても衰えることのない剛直が余韻を愉しむようにゆつくりと打ち込まれる。

「……お姉ちゃんはどうしたの？」

「ほう、ご自分より姉上様が気になりますか。麻衣様は本当に心根の優しい方にございますな」

いつの間にか濃厚なもやが立ち込め、周囲が見渡せなくなっている。

「願うのです。亜衣様に会いたいと願うのです。ここに敷いたは『誓願の法陣』。心の底から願えばどんな願いでも叶うのです」

「お姉ちゃん……」

快幻坊の言うことを信じたわけではないが、麻衣は姉を呼んだ。

石舞台が左に九十度回転した。

もやが少し晴れ、辺りが見渡せるようになる。ほんの数メートル先に亜衣はいた。

顔をこちらに向けて横向きに寝っ転がった亜衣は四人の女たちにまとわりつかれていた。体中を舐めまわされたらしく、亜衣の全身が濡れ光っていた。

「お姉ちゃん、目を覚まして！」

麻衣の声に亜衣は反応を示さなかった。四人の女たちだけが一瞬こちらをみた。彼女たちは皆、目を輝かせて至福の顔をしていた。麻衣の見知った少女たちだった。

高持冴子の妹、冴美が亜衣の乳房を愛撫しながら脇の下を執拗に吸いたてている。教育実習生の美由衣が何やら囁きながら、耳たぶから首筋を舐めている。新聞部のさくらが、亜衣の脚を天井に向かって上げさせ、太ももにかぶりついている。下腹部に覆い被さっているのはクラスメイトの奈那実だった。

奈那実が体をすこしずらした。すると奈那実の体によって隠れていた恐るべきことが露見した。亜衣の陰部に棒状の淫具が抜き差しされていたのだ。

亜衣は蜜部に埋めこまれるタイミングに合わせ大きくあえいでいた。

違和感あった。何かがおかしい。棒状の物体には太いケーブルのようなものが垂れている。それは石舞台まで伸びていた。正しく言うなら石舞台から伸びていたと言うべきであろう。粘液で濡れ光り脈動するそれは明らかに生物のもの。快幻坊の腰から生えた触手だった。

亜衣がびくつかせた。

触手の表面で不気味な筋を立てている血管がピンクの蛍光色に染まる。亜衣から淫汁を吸い立てているのだ。

「あのおなごたちはわたくしが選り抜いた誓願の巫女にござります。穢れなき乙女が処女血を捧げてまでも願った想い。亜衣様はそれに応えて、ああして愛を育んでいらつしやるのです」

怪僧の言葉通り亜衣は女たちの愛情を受け入れているようだった。美由衣になにやら頷いては舌を溶かしあうようなキスを交わし、腋窩えきかをなめる冴美の頭に腕を巻き付かせている。おぞましい触手にさえ体を開いているようにで

あつた。

それを裏付けるように触手から愛情の証しを吸い立てている怪僧が言った。

「この濁りなき蜜。どなたに対しても分け隔てなく深い愛情が向けられています。亜衣様は博愛の方にございますな」

「そんな……お姉ちゃんまで」

淫鬼の仕掛けた淫術のからくりが麻衣にも少しだけわかった。

四人の女たちの気持ちは麻衣も知っている。純粋な思慕の念が淫術により歪められた形で思いを遂げさせている。女たちの気持ちは紛れもない真実。真実の恋慕の気持ちだからこそ姉は拒もうとしないのだ。

亜衣を抱き合ったときのことを思い返した。姉妹の気持ちがひとつになった至福のひととき。姉とひとつになることを願ったあの思いは自然に湧き起こったものだと思っていた。でもそれは違っていた。怪僧に純粋な姉妹愛を辱められたのだ。ほんの少し淫らな方向に後押しすること——。

「耳をおすまし下さい。こちらが気恥ずかしくなるような青春の激情ですぞ」
女たちの声が聞こえてきた。

『おもちゃ、いいでしょう、亜衣ちゃん。女の子同士ですときの必須アイテムなんだから』

『ああんっ……もうっ……。……抜いて。道具を使うなんて普通じゃないわ』

『亜衣さん、いい加減素直になりなさい。たらたら脇汗流して感じているじゃない。憎らしいぐらい美味しいんだから』

『先輩のお尻もとっても美味しいです』

『さくらちゃん、後ろっ……。……そんなに舐めちゃいやっ……。』

『亜衣ちゃん答えなさい。お尻とおもちやとどっちが嫌なの？』

『お尻、いやっ……。……どっちもいやよ！』

『慌てて付け加えてもだめよ。亜衣、おもちや気にいったのでしよう？』

『あんっ……。……おもちゃ、これ以上動かさないで……。……でないと……。……またっ……。……ああんっ』

『動かしたらどうなの？ もつとずぼずぼしてあげるから教えて』

『ああんっ……。……奈那実。言うからやめて。いやっ……。……いやんっ……。……いつちゃうっ。おもちゃでいかされちゃう』

『いっちゃうときの亜衣の顔、とつてもかわいいわ！ 亜衣のことが大好きだから気持ちよくなつて欲しいの。わたしの気持ち伝わったでしょう』

『はあっ……はあっ……。奈那実、好きよ』



触手が明滅し、亜衣の愛液を貪っている。

亜衣は触手を性玩具としか認識していないようだ。誓願の巫女たちの愛撫により体を蕩けさせ、聖なる女宮に忌むべき淫鬼の触手を迎え入れている。完全に無防備になった秘宮に女たちの思うがままに突き入れられ、怪僧の言うとおりに触手に対してさえ愛情たつぷりの愛液を供している。

姉が淫欲に強い抵抗を示すのは淫らを憎む強い精神力あつてこそ。触手に犯されていることさえ自覚せずに無防備な女陰を熱烈に責め立てられれば、遠からず姉は快樂の虜となつてしまうだろう。

愛情のベクトルをほんの少し向きを変えるだけでこんなにも肉欲にまみれたものになつてしまうものなのか。

亜衣と女たちは淫らに絡み合う。「わたしのほうがもつと感じさせてあげ

る」そんな面持ちの美由衣へと張形触手の責め手が変わった。快樂の深さを愛情の深さと勘違いしているようだ。美由衣は張形触手だけでなく、口や指先も駆使してねつとりと愛撫している。

「こんなことやめさせて。お姉ちゃんを解放して」

「嫉妬ですか。女の嫉妬は淫乱地獄へ墜ちますぞ」

にたりと笑って怪僧は忠告した。麻衣の内部の微妙な変化を探るようにゆつくり深々と肉棒を突き込む。

「せめて触手だけはやめて。わたしが相手します」

「お忘れか。願うのです。この『誓願の法陣』が願いを叶えまする」
意を決した麻衣は言った。

「お姉ちゃんの体から離れて。わたしのそばに来て」

触手が胴体を揺らし、麻衣のそばへとにじり寄った。触手は鎌首をもたげ亜衣の顔面へと先端を突きつけた。男根そっくりの魔羅触手は亜衣の蜜液にまみれてぬるぬるになっている。

触手の無言の要求を理解したのか、それとも姉の愛液まみれになった触手をそのままにはしておけぬと思ったのか、麻衣は亀頭部分に舌を伸ばした。

「麻衣様は実に礼儀正しい。男女の仕儀というものを心得ていらつしやる。僭越ながら愚僧が素晴らしき女へと開花できるよう指南いたそう。亜衣様もきつとお喜びになれまする」

快幻坊は手にした一升瓶を掲げた。魔酒が麻衣の背中へと降り注ぐ。男根触手が麻衣の朱唇を割った。

魔酒を浴びる麻衣の肢体は触手に、肉棒に、前後から揺さぶられた。

第三章 耐え忍ぶ愛

16

麻衣は両手両足を触手によつて前方でひとつにまとめられていた。その背にぴったりと張り付いた怪僧が腰を遣っている。蚯蚓みみずか蛭ひるを連想させる暗紫色の長い舌が麻衣の乳房に巻き付いていた。

「そんなに吸っちゃ、いやよっ」

「美味しゅうございますな。麻衣様の乳酒はまろやかなコクと風味が極上にございまする」

人の理から逸脱した化け物は舌を伸ばしたまま喋った。舌先に生じた膨らみが長い舌を辿って怪僧の口内へと上昇していく。乳房に吸わせた魔酒を“乳酒”として回収しているのだ。麻衣の鼻腔にも酒精と甘いミルクの匂いが届いた。

前屈姿勢のような格好では辱めを受ける自分の体と否応なく対峙させられてしまう。舌先についた環状の口が乳頭をぱつくりと啜っていた。乳酒を味

わう怪僧の舌はそれ自体が独立した生き物の様にジュルジュルと音を立てて搾っている。

魔酒を染みこませ、乳の匂いが移るまで揉み扱き、乳酒になったところで吸い立てる。その繰り返しで可憐な乳輪までぷつくりと膨れあがっていた。乳首はおろか乳管から乳腺に至る経路が熱さにひりつく。乳房が照り輝いているのは唾液のためばかりではなく、魔酒の効果でもあるのであろう。天女の末裔、羽衣戦士の神通力の根源たる彼女の神気までも乳房の中での醸成過程で吸収しているのだ。その証左に乳酒が染み出すと乳房はひとときわ輝いた。麻衣という女性そのものを体現するような美乳の匂いを漂わせ神気を帯びた御酒。快幻坊が舌鼓を打つのも道理である。

体節の隙間から伸びた糸状の触手が麻衣の柔肌を隈無くなぞっている。肌という肌を開発しているようだった。おぞましい刺激に屈して麻衣は鳥肌が立ちっぱなしだった。

そして乳房の谷間の先、麻衣の陰部では黒紫色の長細い肉棒が我が物顔で出入りしている。弾け飛ぶ蜜液は麻衣の顔面まで濡らしていた。また忍耐の限界が訪れようとしている。速度を速める淫茎の律動で麻衣は思い知らされ

た。

「はんっ……あんっあんっ……だめっ……またきちやうッ」

「これで八度目ですぞ。我が秘術もいよいよ完成が近づいております」

「あうっ……ああっ……んんむっ、ダメなのにいイ」

快幻坊が麻衣に講釈してみせた淫術。その成就が迫っている。絶望的な状況さえも麻衣は妖しく気持ちを昂ぶらせてしまう。気持ちよさがつらくて堪らないといった苦悶の表情を浮かべ麻衣は総身をびくつかせた。

息も絶え絶えの麻衣に男根触手が突き出された。

麻衣は触手を口に含み健気にも奉仕した。

そうして口腔奉仕してもなんにもならない。それがわかっていても麻衣は口での行為を続けた。

逞しいカリ首に唇を滑らせ、きゅつきゅつと扱くと男根触手が牡汁を吐き出した。それを飲み干しながら麻衣は前方を眺めた。

麻衣の視線の先には亜衣がいた。

亜衣は冴美の股間に美貌を埋めていた。姉も妹とは違う形で、口で奉仕していた。亜衣は猫のように同性の秘部を舐め、冴美はだらしなくよだれを垂

らしながら、もつと、もつとと叫んでいる。だが問題なのはそんなことではない。

姉の秘花は触手に貫かれていた。

もちろん麻衣はやめてと懇願した。それを快幻坊は亜衣様自身の願いなのです、と一笑に付した。

明瞭に姉の声が聞こえた。

「ああっ……このおもちゃ、ぼこしてすごいつ。イボイボに気持ちいいところ削られちゃうっ」

亜衣が昇り詰めたのが麻衣にもわかった。さくらが触手を引き抜いた。無数の瘤起を持つイボイボ触手が胴体を濡らして姿を現した。それと入れ替わりにヒダ付きの触手が女体の中へと押し入った。

「こんどのおもちゃはどうですか？」

「膣の中に吸い付かれて。んはあっ……おっ……おつゆが吸われちゃう。んっ……」

さくらの問いかけに背を仰け反らせながら亜衣は答えた。

触手が侵犯する様を凝視していた奈那実が尻穴に口を付ける。美由衣が乳

房を握りしめながら優美にくねる亜衣の背中に舌を滑らせる。

一縷の望みを託した姉は今も変わらず女たちの淫戯と新たなおもちゃに酔いしれていた。



麻衣の眼前に今度はイボイボ触手が鎌首をもたげた。亜衣を絶頂へと押し上げ、猛りきった触手をあやすように麻衣は舌を這わす。舌が灼けてしまいそうな酷烈な淫気に顔をしかめた。姉はこんなものをいまだにおもちゃだと信じているのか。

麻衣の小さな口を押し広げ、イボイボ触手がねじ込まれる。

亜衣を昇天させ、麻衣の口中で出し、亜衣の後方で待機する。悪夢のようなループだがそれでも亜衣のなかで射精させてはならないと麻衣は奉仕した。

「麻衣様は姉上様の艶姿がお好きなようですね。女陰がまたもひくついて

おりまする」

首を左右に振つて麻衣は否定した。しかしそれはあまりにも弱々しい。

麻衣はこのとき膣内が蠕動運動ぜんどうを始めたことを自覚していた。姉が女たちに狂わされる姿から目を離せない。見ているうちに体は熱くなり、怪僧の思うがまま秘奥を打ち抜かれてしまう。

「我が秘術はいまして少しで完遂いたしますぞ。あれほど嫌がつていたのに姉上様に助けを求めなくてよろしいのかな」

姉にはこれまで何度も呼びかけた。だがその叫びは届くことがなかった。怪僧がそう言うからには今度こそ麻衣の声は姉に届くのだろう。でもそれは姉にも自分と同じ淫術をかける下準備が整ったからだ。麻衣に仕掛けようとしている淫術を知ったなら――。女の淫技に蕩けさせ戦う術を失った姉が、他人のために自らを犠牲にすることを厭わない姉が、取る行動はただひとつしかない。それは麻衣が最も恐れていることだ。

心の葛藤さえ淫欲へと転化されてしまうのだろうか。体奥の熱が上がる。そこを逃さず怪僧はつけ込んだ。護符の貼られた子宮口を亀頭で殴打される。

「んんんむっ……くはっう」

アクメを貪る麻衣に、息もつかせずイボイボ触手が追い討ちを掛ける。丸みを残した愛らしい顔が白濁液で汚された。

怪僧が新たな律動を刻む中、麻衣は見た。

傍らの美由衣が亜衣にささやき、そして亜衣がこちらに顔を向けるのを。驚愕の面持ちをした亜衣がのそのそとこちらに這い寄ってくる。妹の危急にも関わらず、快悦に支配された体は思うように動かないのだろう。緩慢と動く亜衣を奈那実と冴美が支え、麻衣のいる石舞台へと進み出た。

「貴様……麻衣に何をした」

ふらふらの亜衣はそれでも毅然に問い質した。

「ならば見て頂きましょう」

石舞台のふちに腰掛けた快幻坊が指を振った。麻衣の手足を拘束する触手が右手と右脚、左手と左脚に握り直して魚の開き干しのように割り開いた。陵辱の跡を残し、いまもなおそれを何重にも上書きされている麻衣の全てがあからさまになった。

汚辱の粘液まみれの顔面も、体中に刻まれた接吻痕も、体の中心に深々と突き刺さった陰茎も。

「見ないでえ！ お姉ちゃん」

「亜衣様に教えて上げなされ。今何をなさっているのかを」

肢体を左右に伸ばされた麻衣はゴム紐を弾くように上下させられた。

暴虐の嵐の中、麻衣はむせび啼いた。麻衣は何度も達した。

麻衣の腰が押さえつけられる。

何度もそうしたようにまた出されるのだ。怪僧は麻衣を繰り返し絶頂へと導き、忘我の状態としてから射精する。秘奥に熱い迸りを感じた。亀頭を子宮口へめり込むように押しつけ、一滴残らず搾り取らせる。

「麻衣様には『塗精十吐』の秘儀を施させて頂いております。この術は男女の気が合一となつて初めて成し得るもの。つまりは麻衣様もご同意の上という事でございます」

そこまで言ってから快幻坊は麻衣を振り向かせた。人間離れた長い舌が伸びて、麻衣の舌を包み込んだ。亜衣に見せつけるように舌を吸っている。

絶頂後のけだるさの中、麻衣は姉の眼前で為すがままにされた。

「麻衣にいかがわしい淫術をかけることは決して許さぬ！」

どこに残っていたのか渾身の気迫を籠めて亜衣は怒りを露わにする。

「亜衣様、ご心配ご無用にございます。この術は大切な護符が剥がれぬように貼り付けるためのもの。護符は御身を護ると同時にお二人が結ばれるためになくってはならぬものなのです。思いを重ねることすでに九度。いよいよ秘儀は成ります。亜衣様どうか見届けて下さいませ」

口を吸ったままこの口で喋ったのか怪僧は言った。

怪僧が回すように腰を遣った。麻衣はいけないと知りつつその動きに巻き込まれる。怪僧に合わせて左右に腰を揺らめかせていた。

（いけない……こんなことをしてはお姉ちゃんが……）

案の定、亜衣は逡巡しているようだった。先ほどの怒気は虚勢に過ぎなかったのだろう。戦う力の残されていない今、何ができるのか——心の通じ合った双子の妹には姉が何を考えているのかわかった。

「麻衣のピンチよ。このままじゃ御坊様の女にされちゃうわ。それでいいの、亜衣？」

後押しするように奈那実が言った。

石舞台の下に跪くと、亜衣は上目遣いで、高潔な姉らしくもなく媚びるように懇願した。

「お願いこれを抜いて。わたしに御坊様の……魔羅を奉仕させて」

麻衣の陰唇を割って突き刺さったままの怒張をそれでも構わず亜衣は唇を寄せた。怒張の根元にはそら豆に似た薄緑色の粒が三十ばかりみつしりと並んでいた。この異様な形状の器官が快幻坊の陰囊なのだろう。旺盛な性欲を体現し、絶えず生産される精液が納まりきらず表面にまでにじみ出ていた。汚らしい粘液に覆われた異形のふぐりに亜衣は口づけしてちゅうつと吸った。

麻衣の膣口からはみ出た陰茎に顔を近づけ、その数センチの部分に何度も舌を往復させた。陰囊にたつぷりとまぶした唾液を舌尖で伸ばしながら亜衣は奉仕した。

亜衣の丁寧な口唇奉仕に流石の怪僧も相好を崩す。

「ここまでしていただいては亜衣様の願いを叶えぬわけにはいきませぬな」
麻衣の肉花から魔羅を抜き取った。栓を外された陰部からおびただしい粘液が流れ出る。

「……見ないで」

弱々しく麻衣は嗚咽を漏らした。さながら小便のように精液が垂れ流れる。

少女の無垢な心はずたずたになった。

怪僧と妹の体液にまみれた怒張に亜衣はすぐさま口唇奉仕を開始する。

「稚拙ながらもまごころが込められておりますな」

「お姉ちゃん、だめよ、そんなことしちやだめえ」

勘所がよいのだろう。当初はぎこちなかったのに自然に頭を沈み込ませている。規則正しく往復させるだけでなく、肉棒の反応を感じ取ってリズムを変える。鈴口から垂れる先走りの粘液を吸ったかと思うと口に含んだまま舌を動かす。

亜衣は速修ぶりと同時に、腰つきも妖しくなった。フェラチオの動きと合わせて蜂腰をゆらゆらとくねらせている。快幻坊の魔羅に幾度も狂わされた麻衣にはわかる。姉は奉仕をするうちに怒張が発する魔的な誘惑に飲み込まれようとしているのだ。麻衣を助けるために献身的に、情熱的におしゃぶりをしているのだから抗しきれはるはずもない。

亜衣から存分に口唇奉仕を受けると、怪僧は姉妹を向かい合わせにした。緩んだ表情の亜衣が、それでも悲しげな顔を取り戻しながら言った。

「忘れないで。あなたを愛してる」

姉の短い言葉に麻衣は悲壮なまでの覚悟を知った。「わたしだって」そう答えた麻衣の返事が伝わったどうか。言い終わらぬうちに亜衣はすぐさま自分の唇で麻衣の唇を塞いだ。

清廉な姉に取っては死地に等しい恥辱の渦に神々しい裸身を投げ出そうと
していた。

17

「うなずくだけでよろしいのです。愚僧の魔羅を入れてもよいのでござい
ますか？」

ためらいつつも亜衣は首肯した。

ようやく触手から解放された妹と亜衣は抱きしめ合って口づけを交わして
いる。姉妹の横に立った怪僧が亜衣の尻を撫で回しながら秘部を悪戯してい
た。

人間離れした長い指が膣肉を搔き分け奥を探る。快幻坊は亜衣をすぐには

犯さずに女肉をじっくりと検分していた。

悪辣な怪僧は亜衣をとことん辱めるつもりなのだ。

卑劣な行為に怒りを覚えても、覚悟を決めてしまった体はあまりに脆い。内部に埋めこまれた指先をほんの少し動かされただけで、どうせするのなら早くしろと腰を後ろに突き出してしまおう。

自分だけが責めを受けるなら耐えられましょう。目視せずとも腰に添えた手でわかる。最愛の妹も同じ姿勢を取らされている。

上半身はきつく抱きしめ合い、下半身は後ろに突き出す。お互いの体を支え合う「人」の字形で姉妹共々恥辱を受けていた。姉妹の腰を怪僧が撫で回す。腰の角度を比べているのだ。

亜衣と麻衣は両天秤に掛けられていた。

「ぴつたりと護符が張り付くまで、秘めたる肉がずぶずぶになるまで突き込んででもよろしいか？」

亜衣がうなずくと麻衣はだめだと横に唇を振る。上下と左右、互いに異なる動きをしてもふたりの唇は離れない。

——ずつとこうしたかった。誓願の巫女と淫戯を重ねれば重ねるほど、妹

への恋しさが募った。それも間もなく犯されてしまう。時間を惜しむように舌をせわしなく絡めてしまう。熱烈にディープキスに耽ると体中に歓喜が駆け巡る。そして次のステップの準備が整ってしまう。怪僧の狙いはわかつていてもキスに夢中になった。

快幻坊は膣奥に貼り付けられた梅の花びらのよれた部分を指先で伸ばす。肉花の潤いに満足して怪僧は言った。

「そろそろお言葉を賜りたいものですな。さあ声を出して」

「……わたしがお相手致します」

秘部に指とは違う太幹を感じた。背後に回った快幻坊が肉棒をなすりつけているのだ。

亜衣は目をつむった。

——ついに。怪僧が蜜部を貫いた。

「おお、なんという締めまり具合。人間の男ではみこすり半どころか入れただけで漏らしてしまうでしょう」

（どうして……こんな奴に犯されているのに……）

まだ始まったばかりだというのに……。浅瀬で抜き差しされるだけでも驚

くほど感じてしまう。亜衣の想像以上に媚肉が蕩けているのだ。こんな有様では……。

一寸刻みで深くなる抽挿は恐れていた奥底を脅かした。

「あうんっ」

目も眩むような衝撃とはこのことを言うのだろう。亜衣は高みへと押し上げられた。

麻衣がこちらを見ている。横から唇を掠め取った冴美と口づけを交わしながら麻衣はつらそうに視線を送っていた。

（こんなわたしを見ないで……麻衣）

亀頭が護符を圧着するたびに亜衣の頭に閃光が瞬く。

「いやっいやっいやッッッ」

「麻衣様に代わっていただきますかな？　このまま続けてもよろしいかな？」

怪僧は尋ねながら最奥に届くごとに奥地をこねくり回す。いやっ、と言いつつ亜衣は何度も頷いた。

あやふやな返事をしながら亜衣はおとこを拒めなくなっていた。

男性自身が膣内で膨れあがった。

「ううっん……いやよ……」

「おお、愚僧の魔羅をしつかりと締め付けて搾り取るではありませんか。手を焼くものかと案じておりましたが、亜衣様も存外素直でいらっしやいますな。塗精十吐、最初の一回が成りましたぞ」

邪淫の魔精が亜衣を打ちのめす。初めて犯されたときとは根本的に何かが違う。堅牢に守ってきた穢れなき体を打ち碎かれた重い衝撃。魔精を吐き尽くされ、体奥がなおも汚される。



萎えることを知らない快幻坊の男根がまた動き出した。

「いやっあ、動くな」

「おや？ たった一度でねを上げますかな？ つらいのなら麻衣様がきつと手を差し伸べ下さいましょう」

「………」

麻衣は早くも女たちの淫戯に溺れかけている。冴美とさくらが代わる代わる妹の朱唇を奪っている。身を乗り出した美由衣と奈那実が秘芯を吸い上げ

ながら、女陰の内にいまだ残っているザーメンをほじくり返し美味しそうにしゃぶっている。

レズ地獄を経験済みの亜衣にはよくわかる。女の舌はどこまでも優しく拒むことを許さない。落花寸前まで穢された体を女たちが癒やしてくれるような気がして体を委ねてしまう。ましてや禁断の姉妹レズで、女同士で交わす快楽に開眼してしまったのだ。

「中断してしまいましたので塗精十吐の秘術は一からやりなおしですが……。
なに、あの様子ならすぐにでも秘術は成りましたよう」

快幻坊の言葉を断ち切るように亜衣は言った。

「もう一度、わたしとしてください」

「げに美しき姉妹愛ですなあ」

「ううっ……ううんっ……はあっ……深いっ」

二度目は容赦なく奥突きを見舞う。護符を貼り付けるのだという邪悪な意思表明のように。

奇怪な化け物に体を与える亜衣の苦悩は察して余りあるが齒を食いしばって彼女は耐えた。

「拙僧は存じておるのですよ」

「……………」

快幻坊は語り続けた。

「あなた様は自ら快樂に溺れた。麻衣様を助けようともせず」

「何を言うか！」

「思い出してみなされ……………」

亜衣の脳裏に女たちと戯れたときの光景が走馬燈のように流れた

——耳をしつこく舐められているときも。

——張形でねちねちと責められたときも。

——女たちに愛撫を仕返したときも。

快感に霞む視界の片隅にはいつも麻衣が映っていた。化け物に辱められている妹の姿が。

「麻衣様が拙僧に手籠めにされているのを知りながら、亜衣様は傍観していたのでございます」

「違う！ そんなことあるはずがない」

「そうでしょうか？ 勘のよい亜衣様が妹様の窮地に気づかぬと？」

——麻衣が必至に呼びかけている。聞こえなかった声が今はつきりと知覚でき、頭の中の映像と重なった。

『お姉ちゃん、目を覚まして』

自らは犯されながら妹は声を張り上げて何度も呼びかけていた。

懸命な妹の声を聞きながら、自分は女たちとの恥戯に溺れていたのだ。

違う。そんなの違う。亜衣はかぶりを振って脳裏の幻影を振り払おうとした。こんなものは怪僧の籠絡術に過ぎない。心の空隙につけ込もうとしているのだ。耳を傾けてはいけない。

そうは思っても脳裏に浮かぶ麻衣の姿はあまりにリアリティーに溢れていた。

それに……。さほど広くない部屋の中央、石舞台の上で犯される麻衣の姿に気づかぬ事があるか。疑問を持ってしまうと亜衣の心はみるみるぐらついてしまう。

快幻坊の腰上で亜衣は揺さぶられた。秘奥を突くたび亜衣の鋼の精神にひびが割れていく。

「これをご覧なさい」

亜衣の眼前で触手が鎌首をもたげた。

逞しいカリ首をもつ男根触手、黒と茶色のまだら模様が見た目にも醜いイ
ボイボ触手、無数の襷がついた吸引触手。

おもちゃだという女たちの虚言を信じ、亜衣の女壺をかき回していた触手
である。

これらを突き入られて漏らした自らの言葉が思い返される。

『カリが擦れてたまらない』

『イボイボで頭の中まで削られそう』

『わたしの中身全部吸われちゃう』

嬉々として亜衣は触手を受け入れた。嫌がつていたようで心底拒んでいた
かと言われれば――。事實は他でもない自分がわかつている。

触手から立ち昇る淫気がもうもうと揺らめいている。こんな濃厚な淫気を
放出するおぞましい触手を本気で性玩具などと思っていたのだろうか。もう
亜衣は自分を信じられなくなっていた。

清く正しく貞淑を信条としてきたはずなのに。愚直なまでに潔癖な彼女だ
けに張り裂けんばかりの心痛を感じていた。

頭の中で再生される己の姿が触手に対して尻を突き出すまでに至ると亜衣は完全に自分を見失っていた。

「ご自分から望んで……全てをご承知の上であなは肉の愉悦に溺れていたのだ。麻衣様のことなど忘れて」

——違う。

その言葉は消え入るように弱々しい。

「真実がどちらにあるかわかったようですなあ」

「わたしは……わたしは……」

「さあ、答えなさい」

「妹を見殺しにした罪深き女です」

「そうです。もつと……何もかも答えるのです」

「犯されて当然のいやらしい女です」

亜衣は己の罪深さを白状しながら乱れに乱れた。怪僧がかさに掛かって責め立てる。

（こんなこと言われて、どうして……どうしてこんなに感じちゃうの？）
取り返しのつかない罪過に背徳感に包まれながら、全身が快感で痺れてし

まう。鳥肌を立てた肌をブルブルと震わせ、いつのまにか出していたよがり声が止まらない。

「あんっ……はあんっ……わたし……ああっ……許して麻衣」

妹の名を叫びながら亜衣はよがり狂った。

「参りますぞ、突き出さない」

嵐のような法悦の中、わけも分からず亜衣は尻を後ろに突きだした。

子宮口をぴったりと塞がれて魔精が流れ込んでいく。

絶頂に妖しく総身を痙攣させながら亜衣は汚辱の汁を受け止めた。

18

「すこし休ませて」

「この程度で泣き言とは、麻衣様に笑われてしまいますぞ」

快幻坊は亜衣をたしなめた。

——この身を麻衣の盾とする。亜衣はそう決意した。

必死に耐えればいい。そう考えていた彼女だが、麻衣とのキスで植えられ、女たちの愛撫で育まれた快楽の種子が、快幻坊のダイナミックでそれでいて緩急のツボをおさえた竿遣いによって芽吹いていく。自分の口から出したこともないやらしい声が引き出されてしまうのをとどめられない。

いや、体はどれだけ穢されても、どれほどの恥を搔くことになってもその覚悟はできているはずだった。まさか心理的な急所をえぐられ、罪悪感を抱きながら絶頂を迎えることになるうとは……。心まで犯されていることを自覚せずにはいられなかった。

あの異様な熱は容易に醒めず、先ほども快幻坊に言葉でなじられ、闇のエクスタシーを迎えたばかりなのだ。

順調に秘術が捗っていることに気をよくしてか、淫僧は腰の動きを止めた。長い腕を伸ばすと女たちと戯れていた麻衣を引き寄せた。

「麻衣、ごめんなさい」

罪の意識にさいなまれる亜衣が自らの不明を詫びた。

「お姉ちゃんは悪くない」

自分と瓜二つの顔が近づいてくる。亜衣は双子の妹と唇を重ねた。

なんて甘い口なんだろう。辱めを受けているから余計にそう感じるのかもしれない。舌と舌を姉妹は息を合わせて擦りあう。

亜衣にとって麻衣との口づけはなによりのご褒美となっていた。

——いけない。そう思ったときには歯止めが掛からないほど夢中になっていた。麻衣が乳房を持ち上げるように握りしめると亜衣も同じように妹の双乳を握りしめた。手放したくない柔らかさ。妹のおっぱいはなんて素敵なんだろう。

乳房と乳房をすり寄せながらキスを交わしていると、怪僧に腰を撫でられた。それでやっと自分の腰が揺れていることに気がついた。背中から腰、そして尻へと続く優美なS字曲線がくねくねと揺らめいている。紛れもなく亜衣自ら腰を振っていた。

「やんっ」己の浅ましさに亜衣は短く悲鳴を上げた。その唇を背後の快幻坊が奪った。長い舌がたちどころに巻き付き、引き離せない。

亜衣の中で生まれてしまった劣情をゆっくりと育むように巧みに腰を遣われる。心を許してはならぬ魔物に背中を預け、腰をゆらゆらと揺らしながら、背徳のキスを交わす。

——麻衣に見られてる。こんなやつのツバを飲まされてるところ見られちゃつてる。

顔が火照り、体の奥が熱くなる。いやらしい腰つきは止まるどころかますます男を求めて大胆になっていく。汚らしい唾液をたつぷりと飲まされて、やつと亜衣の朱唇は解放された。

快幻坊はアゴをしゃくり亜衣に促した。

「まだ……わたしにお相手を務めさせて下さい」

「亜衣様にそう言つて頂けるとは光榮の至り」

快樂地獄への片道切符を切つた亜衣を快幻坊は一氣呵成に責め立てる。

「麻衣様の女陰にはどこまでも優しく包み込んでいただきましたが、亜衣様はキツキツですなあ。麻衣様がミ、ミズ千匹なら、亜衣様は男泣かせの三段締め。どちらも甲乙付け難い名器でございます」

「くうっ……調子に乗つて」

「双子とは不思議なもの。感極まるとただ締め付けるばかりではなくねつとりと絡みつかせてくるではありませんか。愚息を食いちぎらんばかりの締め付けに織り交ぜて、麻衣様のように愛しげに絡みついてこられては拙僧とて

堪りませぬ」

違うようで似ていて、似ているようで違う。そんな双子姉妹の女肉を怪僧は余すことなく堪能する。

姉妹の秘肉を味比べされる。耐えがたい屈辱を闘志に変えようとしても間断なく続く快悦がそれを許さない。護符の貼られた最奥を突かれると膺道は男の魂まで蕩けさせる濃密な収縮してしまう。

「あうっ……あうっ……ああっ」

（ごめんね、麻衣。時間稼ぎもできそうにない）

亜衣はもう一度、妹に謝罪した。

こんな怖ろしい淫ら責めを麻衣は九度も耐えたのに――。己の情けなさに亜衣は心の中で憤慨する。でも狂ってしまった歯車はもうどうにもならない。さくらと口づけを交わす麻衣がこちらを横目で見つめている。その瞳はとも哀しげだった。

対面座位へと体位を変え、亜衣はナナフシの化け物と交わっていた。

亜衣の肢体が巨大なナナフシの膝上で上下する。触手によってひとまとめにされた手首を掴み、陰茎が抜けるギリギリまで引き上げてから落とされる。肉槍に行き止まりまで貫かれ、亜衣はそのたびに悲鳴とも喘ぎともつかぬ声を発した。

桜色の可憐な乳首を摘ままれ、指先で押し潰される。激しく上下する肢体と相まって、引き延ばされた乳首に痛みが走る。――否。痛かったのは最初だけ。いま体に流れているのは悦びの電流だ。

（ちぎれそうなくらいに引つ張られているのに……）

「ああつ……乳首痺れちゃう」

「こちらはどうです？」

「お尻そんなにほじくつちやツ、いやツ。おかしくなってしまうツ、ンンツ」
昆虫らしい節くれだった指が亜衣の裏門を穿っている。どんな辱めにも堪えてきた亜衣の鋼鉄の精神力は見る影もない。ゴツゴツとした異様な感覚さ

え、綻びきった亜衣の意思を突き崩す。二本の指で交互に奥へ奥へと掘り進められ、巫女少女の愛らしいヒップが羞恥に震えた。

乳房や尻穴から発生した快悦の電流は亜衣の体中を走り抜けて下腹部の奥へと到達する。それをぴったりと子宮口に張り付いた快感神経の元締めのようにになった護符が受け止め、全身にフィードバックさせる。体が震え、声までも振るわせ、殊更に膣肉がひくつく。

「体中の気持ちいいところがつなぐちゃう……いつ……イイツ」

すつかりと出来上がってしまった体が、膣奥を叩く鈴口から噴出する濃い淫気に射精の気配を感じ取るとぎゅうぎゅうに陰茎を締め付け催促してしまう。

「浅ましいですな、次で何回目ですか？」

「十二度目です。十二回も穢されて……ああ……来ちゃう」

“塗精十吐”の秘術は既に完成していた。

亜衣にとってどんなことがあっても忌避すべき相手との、それも十度に及ぶ辱めは地獄だった。だが、塗精十吐が成ったあとの交合はそれすら凌駕する煉獄であった。聖と淫、決して交わることのない相反するふたつの魂が腰

を振り合い、淫らな共同作業の果てに絶頂を迎える。性の虜へと作り替えんとする快樂の業火に亜衣は自ら飛び込んでしまう。

属性を反転させた梅の護符の花びらは肉の一部と言って良いほどに女肉と一体化している。硬い亀頭で殴打に次ぐ殴打を受け続けて子宮口にめり込んでいた。そこは新たな快樂器官となっていた。クリトリスが膣奥にもあるようなものだ。それさえも控えめな表現で実際にはもつとたちが悪い。

「精子出されてる。わたしの子宮汚されちゃうッ」

体の奥深くまで流し込まれる怪僧の精液。鋭敏な新たな感覚器官は流し込まれる粘液のどろりとした触感も、生温かい熱も、匂いも、味も感じ取り、秘肉の動きさえも鮮明に理解できてしまう。膣が活発に動き、魔精を貪欲に搾り取っている。子宮頸管が吸い上げ聖なる子宮へと送り込んでいる。亜衣は胎内の様子を幻視した。聖巫女は五感の全てでなか出しされた邪精に酔いしれていた。

搾^{さく}精^{せい}器官に成り下がった自分のイメージに打ちのめされながら亜衣は異様な昂ぶりを覚える。亜衣は怪僧に腰を押しつけていた。

「まだ、イクっ……いき続けてる。気持ちいいのが止まらない」

行きはよいよい帰りはこわい……。

膣奥に張り付いた護符は精液を素通りさせるわりに逆流を許さない。子宮口まで閉じてしまい、吐き出された魔精は恐るべき淫力を十二分に発揮して子宮を灼き続ける。ゆつくりとにじみ出るまで人間の交合ではあり得ぬほど長時間のアクメをもたらすのだ。

ブルブルと肢体を振るわせている巫女戦士を快幻坊は冷徹に観察する。あたかもその目は捕食者のようであつた。

20

長い長い絶頂の発作が治まり、ほんの少し理性の欠片らしきものを取り戻したのか亜衣は言った。

「もう外して……」

「ならばお試しなさるといい」

陰茎の変化を膣奥はすぐに感じ取った。亀頭の先端で鈴口を挟むように二、

つの爪のような突起が隆起した。

護符を引つ掛ければ剥がれるかも知れない。でもそこに落とし穴があるのかも……。

「今なら麻衣様もこちらを見てはおりませぬ」

亜衣の後方から麻衣の声が聞こえた。姿は見えぬが麻衣は女たちに絡みつかれ蕩けた声を出していた。亜衣を気にする余裕はなさそうだ。

もう失う誇りもない。亜衣は少しでも行動することを選んだ。

亜衣は腰を動かした。

魔羅突起が肉に鋭く食い込んだ。痛みを堪え、腰を左右に振る。

（剥がれて、お願い）

手応えはある。が、花びらは揺らめくだけで外れはしない。

もう一度。腰を押しつけ膣奥に魔羅突起を食い込ませる。今度はもつと大胆に。亀頭に子宮口を擦りつけ、さらに回転を加える。

（もうちよつとなのに……）

——あと少し。奮闘する亜衣だがもう一步のところで護符は子宮口に踏みとどまっている。

護符を引つ掛けようと懸命に試みるうちに亜衣のそこは疼き出していた。膾内の様子を注意深く、鋭敏になったそこに神経を研ぎ澄ませていたのだから自明の結果だ。

（やつぱり罠だったのよ）

ふとした拍子に打ち付けた護符から、じゅんつと魔精が染み出した。ほんの粟粒程度の量に過ぎない。それでも亜衣に刻まれた魔悦の絶頂を思い出させるのに十分だった。梅の花弁からなる護符は魔精を吸い上げる。精液を吸い取るのは陵辱者に穢されることを防ぐための本来の正しい霊験でもある。だがそれとても亜衣にとっては悪魔の働きとなった。護符を押し潰し、魔精を吐き出させ、また護符が吸い取れば、再び押し潰し魔精を味わう。護符を剥がそうとしていたはずの亜衣の試みは、いつの間にやら貼りつける動きへと変わっていた。

「またもその気になりましたかな。拙僧と気を合一させておりますぞ」

「やめて。もう出さないで」

「これ程甘美に締め付けながら出すなおつしやいますか。亜衣様も酷なことをおつしやいます」

「こんなに出されたら、わたしもう……」

「委細承知。亜衣様の御為なら辛抱致しましょう。亜衣様はわたくしに構わずご存分に逝きなされ」

無駄な試みを行ううちに新たに覚えた腰遣いで聖巫女は淫らなダンスを踊った。

（だめ、もう止まらない……）

膣奥を数え切れないほど打ちつけられて、すっかりポルチオ性感帯が開発されてしまっている。亜衣は膣奥から湧き起こる深い快感の虜になっていた。亜衣の動くままに任せていた怪僧がピストン運動を再開すると、ズンズンとお腹の奥底で太鼓を打ち鳴らされているような衝撃に見舞われた。亜衣は堪えきれず達した。

「許して、これ以上いかされたら……」

「何のこれしき！ 拙僧はまだまだ耐えてみせますぞ」

ぐいぐいと亜衣の華奢な体が揺さぶられる。快幻坊の亀頭は完全に性感のツボを捉えたとみえて亜衣は立て続けに昇り詰めた。

くせがついてしまったようにイキ狂う亜衣。彼女の中で何かが変化しはじ

めていた。

快幻坊の目が笑っているように見えた。視線にはどこか違和感がある。その正体に気がつく前に亜衣は体内からの悲鳴を聞いた。怪僧は腰の動きを止めていた。

キリキリと締め付けられる鈍痛にも似た感覚がお腹の奥底で芽生えていた。頭の中で理性がきしむ音が聞こえる。両腕が拘束されていなければ頭をかきむしっただろう。それほどに亜衣は悩乱していた。無意識のうちにゆらりゆらりと細腰がくねる。

「ささ、麻衣様に気づかれぬうちに、今のうちですぞ」

「もう……もう……こんなこといやなのに……」

怪僧はおもむろに舌を伸ばした。暗紫色の舌がするりと半開きの亜衣の口中へと入り込み、一滴の雫をこぼした。

——ドロリッ。

亜衣はカッと目を見開いた。舌の上で広がる濃厚な味が彼女にそうさせたのだ。

快幻坊が舌を突き出す。赤紫色の舌は白い粘液にまみれていた。口外に十

センチばかり飛び出た舌を亜衣は口を開いて受けいれてしまう。大きな粘液の塊が流し込まれた。女を犯すためだけ存在している淫鬼なのだから唾液の成分が人間とは違うのは道理であろう。唾液なのかそれ以外のなにかなのかそんなことは無意味である。ともかく流し込まれた粘液からは強烈な牡臭がした。女を牝へと変えてしまう墮落の味がした。

（吐き出すのよ……まだ間に合う……）

思考とは真逆に亜衣はワインでも味わうように口のなかで転がしてしまふ。忌まわしき陵辱の記憶が蘇るのに、どこか亜衣はうつとりとしてしまふ。亜衣は魔精を嚥下した。酒でも飲んだようにお腹のなかがかッと熱くなり体の隅々まで広がっていく。

「……わたしの負けよ。だから、もう……」

栗花の匂いのため息をついて、亜衣は敗北を認めた。
触手による縛めが解かれた。

亜衣は怪僧の肩に手に置いて、恭順の意を示すように裸身を動かした。腰を自ら動かして、奥深くへ迎えるたびに亀頭に子宮口を圧着させて、もう二度と剥がそうとはしないという意味表明のように護符を貼り付ける。濡れた

唇を寄せて異形の舌を舐めしやぶり、精子の味がする唾液を飲み干した。

敗北を認めてしまえばもろいもので、競うように、淫らに、より淫らに腰が動く。

（乾いてる……からからに乾いちやつてる）

護符に染みこんでいた精液は潰しても潰しても、もう染み出すことはない。熱い蜜液があとからあとから溢れて、膣の中は潤いきっているのに干からびた荒野のように亜衣には感じられた。

精子味の唾液を何度飲もうが、体の中で一番欲している部分には行き渡らない。子宮が本来の機能を満たして欲しいと悲鳴を上げている。

「答えて頂こう。どのような願いも叶える誓願の結界なれど、誠意を持って願わねば叶う望みも叶いませぬ」

「……精子を出して。我慢しないで……私のなかに……」

「辛抱できぬのは亜衣様でございましょうに」

快幻坊の手の平に水ぶくれが発生した。たちまちそれは膨らみ水風船となった。手を亜衣の顔の上へと運ぶと、己の手の皮から生まれた水風船を怪僧は握りつぶした。白濁した粘液が亜衣の顔面へとぶちまけられる。美貌をネ

トネットに汚されながらも亜衣は口の周りの粘液を舐め取って口の中へと運んでいった。白濁液にまみれた快幻坊の指先が天井を見上げた亜衣の口を割って沈んでいく。長大な指で口を犯されながら、舌を伸ばして最後の一滴まで舐め取ろうとしている。

（なんて粘っこいの……ああ、喉に絡みつく……）

快幻坊はそんな亜衣の様子をじっと凝視している。

亜衣は快幻坊の視線が放つ違和感の正体によく気がついた。

（見られてる……）

快幻坊は亜衣を見ているのみならず——。その後方にも視線を配っていたのだ。そして後方にいる人物はじつと亜衣を見ている。

一番見られたくない相手に浅ましい姿を見られている。気がついた途端すでに紅潮していた頬がさらに赤くなった。顔面から火が噴いたような恥ずかしさを感じた。

直感力に優れた彼女だけにその視線の動きをつぶさに感じ取った。

熱線銃で撃たれたかのようにオレンジ色の光跡が背中に刻まれている。亜衣はそう感じた。揺れ動くお尻、淫汗が流れる背中、得体の知れない粘液を

流し込まれている首筋。光跡からは膨大な熱量が生まれ、亜衣は溶けてしま
いそうであつた。

（こんな姿を見られたくない）

そう思ったところでもう止まらない。上下運動に加え左右にうねる蜂腰は
剛直から逃れようとしているようにも見えるし、より深くくわえこもうとし
ているようにも見える。頭部をゆらめかせながら、顔は天を仰いだままで滴
る粘液を受け止め、口の中に挿し込まれた魔僧の指先は喉奥にまで達してい
た。

妖しい感情が亜衣の中で生まれていた。背後からの視線を浴びるたび背筋
にゾクゾクとしたものが走る。亜衣ははつきりと見られて感じていると自覚
した。

魔精を欲しがっているカラダと拒絶しようという理性。二律背反に亜衣は
引き裂かれそうであつた。

だが、勝負は決しているのだ。すでに敗北を認めた彼女に逃れるすべはな
い。

一瞬の逡巡は踏み切り板のように亜衣を高く飛ばしたただけだつた。

「くううつ……あううつ……ひいいいつ……イクツイクツイクウ！」



間違いなくこれまでの中で最高の絶頂だった。

真っ白に包まれた時間が過ぎ、はあっ、はあっと亜衣はまだ荒く息をついた。

快悦に支配されていた亜衣にはいつ移動してきたのかわからなかった。背後からの視線の持ち主——すなわち麻衣がとなりにいた。

麻衣は上下の口を触手に犯されていた。巨大な毛虫のような触手が膣口に出入りしている。赤と黄色の体色が毒々しい。胴体に並んだ赤い目玉模様の中心から黒く太い鋼線のような毛が生え、そのあいだを縫うように短く揃った歯ブラシのような毛が並んでいる。段々腹の触手は伸び縮みしつつ女性器の内部深くへと入り込み、体毛で肉壁を隈無く刺激し、愛液を掻き出していた。

口には咥えているのは白い粘液に覆われた棒状の触手。麻衣の舌が粘液を舐め取ると透明な表面が現れた。氷柱のような姿が亜衣の記憶の片隅に残つ

ている。冷たくすつきりとした甘露を滴らせていた氷柱。けれども氷柱に滴っているのは透明な雫ではなく、薄く黄みがかった白濁液だ。麻衣が舐めている液体の正体がいまならよくわかる。精液だ。人外の化け物が魔羅だけでは吐き出しきれず、触手から噴出した欲望のエキスだ。そんな汚らわしい粘液を麻衣は舌を這わせ唇を滑らせ、夢中になつて飲んでいた。

「麻衣様は亜衣様と同じように玩具をお望みになりました。この触手は麻衣様の願望のかたちにございます」

「お願いよ……麻衣には……」

「はて？ 亜衣様の願いはそれではないかと」

怪僧がそう言つて亜衣の腰を掴むと活を入れた。気合いと共に注入したのは淫らの気である。亜衣の中でくすぶり続ける火種はまたたく間に燃え上がり、同時に魔精への渴望もまた再燃した。

（あんなに激しく逝つたのにまた……）

亜衣に邪術を施しながら、麻衣を休ませることなく責め立てていた憎むべき淫僧の魔羅に、己の粘膜がじわつと絡みつこうとしている。胎内の疼きがどうにもそれを与えられなければ終わることがないのを再認識させられた。

亜衣の眼前に二本の触手がつきつけられる。

どちらにも亜衣は見覚えがあつた。いや体が覚えているといったほうが適切か。吸い寄せられるようにゆらゆらと鎌首を持ち上げた触手に舌を伸ばす。まずは胃袋を裏返しにしたような粘膜状の表面に幾つもの吸盤を隠し持った触手。そうするのが義務であるかのようにねっとりとした奉仕へと変わっていく。

「愛する妹様に隠し立てはなりませぬ。内に秘めた欲望の全てをさらけ出しなさい」

触手が吐き出す汚粘液を飲み干すと、亜衣は淫欲に飲み込まれた。

自ら進んで今度はイボ触手にくわえこんだ。

二本の触手を相手にしながらも腰の動きを休めることはない。

（麻衣がそばにいるのよ……）

亜衣は自分にいい聞かせた。

そうしたところで身を焦がす快樂の炎は鎮まるところか、別のところまで延焼してしまうようだった。

女たちにもてあそばれながらも麻衣は姉のこと心配そうに見つめている。

妹に見守られながら恋人とするかのような腰振りを披露してしまふ。

「妹君に見られて感じているのでしよう？」

「麻衣に見られてると思うと体が熱くなつて……はあっ、はあっ……んんう
っ」

「そうです。それでいい。切なる願い。叶うときが近づいてますぞ」

「もう……もう……精子だして。亜衣のなかに出して」

「承知しましたぞ」

猛烈なピストン運動を受けて亜衣が揺さぶられる。触手を手放すと亜衣は快幻坊の体に細腕を回して抱きしめた。

「いんっ……いいっ……すごい……いいの」

「これがそんなに欲しいのですか」

「欲しい、欲しいのっ、もっについて」

——何がどうなつてもいい。そんな快楽の暴風雨の中に亜衣はいた。

妹のことさえ忘れてよがり狂った。

「むんっ」

快幻坊の射精が始まった。亜衣は腰をすりあわせて、念願の魔精を受け止

める。

（気持ちいい、気持ちよすぎる。わたしはもう……もう……）

熱いしぶきの奔流が女の聖地を直撃する。胎内で淫らの粒子が弾け飛んでいる。後戻りができないほど体を穢されているのに、そこにあるのは経験のない充足感と脳髓を痺れさせる多幸感であつた。

待望の瞬間に表情を緩ませた亜衣ではあつたが、怪僧が腰を再び動かし始めると顔を曇らせた。

「またつ……でてる」

「男を辛抱させるとはこういうこと。さあもう一発」

「だめっ、そんなに入らない。破裂しちゃうわ」

すでに満杯になつた小さな子壺に、邪淫の精がさらになだれこんでいった。快幻坊の三連弾を受けて姉巫女の子宮は外見からもわかるほどにパンパンに膨らんでしまった。

貼り付けられた護符が子宮口を封じている。

女性の子宮は容積数ミリリットルしかない小さな器官である。妊娠時のそれはホルモンが分泌され何ヶ月もかけて拡張するのであつて、ソフトボール

大ていどとは言え、ごくわずかの時間に無理矢理抔げられた異様さは想像を絶する。妊婦の神秘的な形とは全く趣を異にするもので、亜衣の下腹の膨らみ具合はいびつであつた。

淫棒で小突かれて子宮が振動する。衝撃は頭頂にまで達して亜衣をびくつかせた。

子宮が水風船と化していた。

ブルブルとした震えがすみずみまで伝わり、亜衣は全身で淫悦を味わつた。精液で膨らまされた水風船に、亀頭を軽くめり込まされだけでも亜衣は達した。

「おもちゃにしないで……ヒイイイイイ」

「女の悦びに目覚めた姿を妹様にご覧いただくのです。ほうれ、ほうれ」

ポニーテールを振り乱して亜衣はよがり泣いた。亜衣は恨みっぽく快幻坊にらみ、肩に爪を突き立てた。が、怪僧はまるで意に介さない。残忍にも快幻坊は四本の腕で体をよじらせて暴れ狂う亜衣を抑えつけた。がっちりと固定し、子宮を弾ませて悪魔の衝撃を与え続けた。

カクン、カクンとさせ、よだれを飛ばしながら、亜衣は意味の明瞭になら

ない言葉を叫んだ。

裸身を大きくのけぞらせてまた達した。

「麻衣に見られて……見られて……イクッ……いくッのッ」

イキ人形となった姉巫女が達した回数は二十数度に渡った。

連続アクメを貪った亜衣の股座からトロトロと魔精が垂れた。いびつに膨張していた下腹部がへこんでいく。精も根も尽き果てた彼女は怪僧にしがみついたままだ。

快幻坊の視線が妹巫女へと向けられる。快楽の虜となった姉を目の当たりにして麻衣は啞然としていた。



「お姉ちゃんを解放して、なぶりものにするのは私にして」

触手を口から外された麻衣が懇願した。

そこにさくらが割って入る。

「亜衣先輩に教えてあげて、麻衣先輩の性癖を」

「答えなきやずつとこのままよ」

「はンっつ……」

麻衣の膺道は触手に占拠されたままだった。親友の手によつて触手が前後に動かされる。

「……言うから。お姉ちゃんのいやらしい姿をみているとカラダが熱くなつてしまうの」

「ここが熱いんでしょう。窃視癖の麻衣さん」

「見られて感じる亜衣と、見て感じる麻衣。あなたたち最高の姉妹だわ」
女たちが麻衣を嘲笑する。

快幻坊に身を預け、がつくりとうなだれたままの亜衣がその会話を聞いて意識を覚醒させる。

「もう一度わたしとしてください」

異形の怪物を抱きしめ直して亜衣は訴えた。

「見上げた心意気ですな。ですが今度はどうなさいます？　拙僧は堪えた方がよろしいのですかな？」

「我慢なさらないで。お好きなときに出してください」

「出したいときに出し、逝きたいときに逝く。それこそが男女のことわり。」

いざ欲望のままに」

亜衣が誘うように腰をくねらせ、快幻坊がそれに答えた。

「ようやく亜衣様と本気で交われそうですねあ」

「いやっ……こんな浅ましいの」

これまでは何度も昇り詰められ、どうにもならなくなってから亜衣は激情に任せた。のっけから亜衣が積極的が肢体を動かしたのはこれが初めてだった。

亜衣は脚までも快幻坊に絡ませる。対面座位でピッタリと肌を寄せた。

淫熱でのぼせ上がりながら、亜衣は背筋に冷ややかなものが流れるのを感じた。

（いったいどこまで狂わせれば気が済むの……）

肌が粟立つのは快感のせいばかりではない。彼女が感じたのはいきよの
ない恐怖だった。

石室に降り立ったときからなのか、戦闘のときなのか、それともずっと前から呪印が学園に効果を及ぼしていたのか――。勘の鋭い亜衣を持ってしてもいつ罠に掛けられたのかさえわからない。恐るべき淫術の使い手、この身

を穢し尽くしてもなお飽き足らない快幻坊を心底怖ろしいと思う。深い深い底のない闇へと墮とされていく。その先に想像を絶する真の破滅が待っている気がするのだ。

「あんっ」

鋭く膺奥を突かれて亜衣の思考は途切れた。

続けざまにマシンガンのような突きを見舞われて、亜衣は力なくよろけた。いけない、そう思った亜衣が体制を戻そうとするが、後ろについた腕に触手が絡みつく。

「見てはだめっ！」

亜衣が絶叫したときには腰が浮かされていた。がに股を開いた姿勢で両手両足をついた姿勢はブリッジというより裏返しになったアメンボといったほうが相応しい。

麻衣の顔が近づいてきた。しつとりと潤んだ瞳に、顔色を朱に染め、横髪が汗で頬にへばりついた姿は間違えようもなく発情しきったおんなの顔だった。

欲望にぎらついた目で一点を注視している。もはや妹は亜衣の顔を見よう

ともせずそこにしか関心がないようだった。

（麻衣イ……そんな目で……そんな目で……）

腰を浮かされたことで肉棒が膣の表側を擦り上げている。亜衣には下腹部が内側から持ち上げられているのがはつきりと理解できた。そうなれば――。亜衣の秘処から茂みを貫くように肌が盛り上がっている。肉の道とでもいうべき隆起はへそのすぐしたまで続いていた。

麻衣の視線を虜にしているのはそんな淫らな姿であつた。パツクリと開いた肉花から内臓を揺さぶられる様までねつとりと視線を這わせている。

「見ないでつたら」

ぐくりと麻衣がつばを飲み込む音まで聞こえた。恥ずかしくてたまらないのに、亜衣は秘奥から熱いの樹液が流れるのを感じた。

「麻衣様、とくにご覧になるがよい。これが亜衣様のおんなのかたちでございます」

怪僧が腰の動きを緩やかなリズムに変える。

「動いてる」

何かに取り憑かれてしまった様子の麻衣がぼそつと言った。

肉棒の抜き差しに合わせて移動する隆起だけでなく、さらには膣の収縮までも――。間近に顔を近づけた麻衣は見通しているに違いなかった。

「そんなに見たらだめよ。はあんっ……あんっ」

ずぼずぼと摩擦をされる粘膜だけでなく、妹に視姦されている肌からまで快楽が生まれていく。淫蜜があとからあとから湧きだしている。膣口から流れる粘着音が石室内に鳴り響いた。

（うそつきだ。わたしうそつきなんだわ……）

見ないで――。そう願うだけで妖しい電流が背筋を駆け上り、背徳の魔悦に脳髓を支配された。

いつの間にか亜衣も腰を動かしていた。不格好な姿勢を取らされながらも、淫僧と息をピッタリと合わせていた。

「見ないで……」亜衣にとってはその言葉は快楽の呪文となってしまうたようだ。言葉にすればするほど妹はそこを凝視する。

くりかえし、口にしてはよがり声さえ抑えることもなくまき散らす。

潜んでいた牝性を暴かれ、最愛の妹に知られてしまつては、もう狂うしかなかった。

亜衣は四肢を肉触手に絡め取られ大の字に拘束されていた。彼女の腕に、脚に幾重にも赤い肉触手が巻き付き、手首も足首も、それどころか前腕も向こうずねまでも触手の中に埋まってしまった。さながらこの世ならざる怪魔の肉に喰いつかれていた。彼女の妹、麻衣は膝立ちになり、姉の腰にしがみついていた。

ヌタリヌタリ――。

ピチャピチャと水音を立てて舌が出入りしている。

（こんなの……もう見たくない）

心とは裏腹に麻衣は眼前で繰り広げられる情景に目が釘付けになっていた。

誓願の巫女に任ぜられた女たちが入れ替わり立ち替わり、身動きの取れない姉のあちらこちらを舐めまわしている。とりわけ脚の合間への執着ぶりはずさまじい。いまはさくらの番であった。左右の内腿をたつぷりと舌で磨きあげ唾液で照りひからせると、肛門を舌でえぐり亜衣の嫌悪の声を誘う。さ

くらは先輩と慕う少女の乱れようが嬉しいのか徹底的にそこを責め立てた。これでもかと狂乱の声を上げさせたのち、脚の付け根へと舌を移す。

二枚貝にも似た肉裂を割って赤い舌がのたうち回っている。姉の裂け目から垣間見える桃色の粘膜は汁気でしどに潤んでいてまさに貝肉のようであり、そこだけを目に向ければ海洋生物同士の交じり合いのようにも見える。

さくらは日頃から盗撮まがいのことをしては茶目つ気たつぷりに舌嚙みのポーズでごまかしていたが、その小さく可憐な舌が海魔のように思えてきた。

麻衣は色欲に取り憑かれるということの恐ろしさをまざまざと知った。

姉は妹の視線から少しでも逃れようとしているのか、それとも女の最も感じやすいそこをもつと責め立てて欲しいのか腰を後ろへと向けている。麻衣は前者だと信じたかった。けれども、そんなことをしたところで腰にしがみついた麻衣の視線からは数センチも距離は変わらない。秘処にぴったりと唇を合わせたさくらが媚肉を味わう姿をまざまざと見せつけられていた。

（お姉ちゃん……いやらしすぎるよ）

麻衣はつらくてつらくて仕方がない。

目を閉じてでも無駄だった。感覚器官のひとつを塞ぐことで音はより鮮明に

聞こえ、網膜に焼き付いた姉の潤みきつた陰部は写像を残したまま頭のなかから消えることがない。

まっすぐ上を見上げたさくらの喉が動く。泉の如くこんこんと湧き出る姉の愛液をさくらが嚥下しているのだ。

頭上からも亜衣と女が交わすレズビアン特有のしつこすぎるキス音が聞こえてきた。唾液を吸われているのか飲まされているのか……。うつつうんつ、と姉は声を漏らしている。とうに抵抗の意思をなくしているのであろう。姉はされるがままにレズキスを受け入れている。

「離れて……。お姉ちゃんわたしのもんだから」

麻衣は呟いた。無論、女たちがそんな言葉に耳を傾けるわけもない。赤い舌はよどみなく蠢き続ける。

心痛に顔を歪ませる麻衣を背後から快幻坊が犯していた。

「女どもが姉上様を欲しいままにしているのが妬ましいのでしょうか。もつと嫉妬なさいませ。嫉妬し墜ちる淫乱地獄。その先にこそ極楽浄土があるのです」

表情からは何を考えているのか読めぬ怪僧ではあるが、声から心躍らせて

いるのがわかる。

さもありなん。姉の痴態を嫌というほど見続けた麻衣の膾内はどろどろに蕩けているのだ。

怪僧にゆつくりと抜き差しされ、麻衣は喜悅の声を上げていた。

「あんっ……あんっ……ああっ」

「次で十五度目。これほどにより狂つて、よろしいのですかな？」

肉悦に耽溺しきつた麻衣に快幻坊が問いかけた。

十五度——。

これは亜衣の懇願により麻衣への術法が中断され、仕切り直しをしてからの数字である。改めて十五度も魔精を浴びた麻衣もとつくに“塗精十吐”の術が成就していた。

この快幻坊は心がひとつとなるまで時間を掛けてしつくしつく責め立てる。女がどうにもならなくなつてからようやく果てるのだ。とことん時間をかけて交わり続けて責め抜かれ。麻衣が達した回数はゆうに百を超えている。

それでも飽き足らず——。

秘術の出来映えを試すように犯し、完成度に満足しては犯し、魔僧は延々と犯し続けている。

ぴったりと秘奥に貼り付いた護符が魔精の匂いを嗅ぎつけ、射精が近いことを教える。

「だめッ……だめえッ」

拒絶の言葉を発したのは、生まれつきの巫女としての矜持か、戦士としての使命が未だ彼女の理性を支えているためか。それとて彼女の肢体は快悦に支配されたまま。キュートなヒップを突き出して受け止める体制が整っている。

麻衣が掴んでいる姉の腰が震えた。あとを追わせるように快幻坊は腰を繰り出し、肉の一部と化した護符が子宮口にさらにめり込んだ。姉よりもさらに大きく腰を振るわせて麻衣は達した。



姉を追いつくと同時に自らも絶頂を味わったのだろう。喜びを共にした幸福に恍惚とした表情のさくらは触手を握りしめて亜衣の秘穴にねじこんだ。

女たちは舌でいかせると止めを刺すように姉を激しくいたぶるのだ。

さくらが選んだ触手は麻衣をいたぶっていた毛虫状の触手である。黒々と光る鋼線のごとき剛毛とブラシのような短い毛を生やした段々腹の触手だ。何本もの毛をより合わせた毛の表面はささくれ立ち、女蜜を絡め取ると同時に肉襖に潜り込んで想像以上の刺激をもたらす。

両手で掴んだ毛虫触手を小さな体を伸び縮みさせながらさくらは突き上げた。姉の肢体がぐくぐくと揺れる。力一杯に触手を繰り出すさくらに麻衣は我がことのように顔をしかめた。

「さくらちゃんやめて！ お姉ちゃんが壊れちゃう！」

さくらは無邪気な笑みさえ浮かべ、掴んだ触手を上下させていた。情け容赦の無いさくらの手がふと止まった。触手の腹が震えている。それが伝染したかのように亜衣の股間も震えた。毛虫触手が毒液をまき散らしたのだ。触手を伝わり青白い粘液がさくらの手を汚す。さくらの手が止まったのはつかの間のことで今度はゆつくりとときに回転を加えて練り込むように触手を操った。

亜衣の女陰から粘液が泡立っている。

グチャグチャ、ニチャニチャ――。
ネチャネチャ、ヌチャヌチャ――。

敬愛する姉の女性器が奏でる音はますます聞くに堪えないものとなつていた。

（だめだよ。お姉ちゃん）

そう思いながら麻衣には何が駄目なのかわからなくなっていた。淫靡な音をたてることか。触手の餌食になることか。

姉の大陰唇が歪んでいる。内部に侵犯する触手の野太さをありありとめすように肉土手がぷつくりと盛り上がっている。無垢だったはずの花弁は真っ赤に充血し、触手との隙間から白いあぶくがいくつも浮かんでは消えていく。姉の愛液、さくらの唾液、触手の毒液、いやらしいものがいくつも混ざりあつた下劣な粘着音が麻衣を懊悩させた。

同じ音が麻衣の股間からも奏でられていた。

繰り返しなかに出されながら、魔羅を抜くことなく犯され続けているのだから当然である。姉の痴態を目にして発情しきつた体奥からはじつとしていただけでもあとからあとから蜜が湧き出ているのに、休むことなく拒絶しがた

い甘美な刺激を受け続けている。麻衣の音色がどのようなものであるか容易に想像できよう。

「ああっ……わたしおかしくなっちゃう」

「姉上様にも負けず劣らず美しき調べでございます。澄ました顔をしながら内にはこの様な淫乱の本性を隠していたとは、天女の末裔といえどご姉妹も人の子でございますな」

快幻坊は淫音を立てる姉妹を何度もなじる。その度に麻衣の「ああんっ」と放つ声には絶望のうめきが混ざっていった。

言葉でも^{なぶ}捌られ、麻衣のよがり声はいつそう大きくなり昇り詰めた。

がつくりと頭を垂れようとする麻衣を、そうとは許さず快幻坊が頭髮を掴んだ。

さくらの腕の動きが激しくなっている。ぐいぐいと容赦なく毛虫触手を送り込むと、空気の混じった卑猥な音が眼前の姉の女穴から鳴り響く。

毛虫触手から伸びた黒く長い毛が紫色の光を帯びて明滅している。肉襞に埋まった黒光りする毛は触手を引いたときでも膣内に残り絶えず刺激を送るばかりか、妖しげな淫らの気を発して墮落へのレールを敷く。むずかゆくな

った膺壁を絶妙に配置された短く揃った纖毛がこそぎあげるのだ。その恐ろしさは徹底的に刪られた麻衣も身を持つて知っている。

シュツシュツと音を立ててブラシをかけるような音を立てて膺口から触手が出入りする。弾け飛んだ愛液の霧雨を受けて麻衣の顔はびしょ濡れになっていた。

——つらい。胸が張り裂けんばかりにつらいのに……。理性はまたも劣情に負けて熱い樹液を魔羅に垂らしている。

触手の餌食となっているのを見ながら、助けようとするどころか発情するふしだらな妹を姉はどう思うだろう。軽蔑されるに違いない。麻衣の心は痛みに沈んだ。

「麻衣様とて姉上様の艶姿がそそのものでしょう。麻衣様の膺肉はこんなにもひくひくとさせて、まだまだ、もつともつとと拙僧を誘っておりまする」

淫らの護符が肉の一部と化し鋭敏になった快楽器官はつぶさに己の女肉の様子を伝えてくる。淫茎にすぎるように絡みつき、早鐘を打つ心臓の鼓動に合わせ収縮を繰り返している。豊富に分泌した愛液を男根の表面全体にゆきわたらせてしつぽりと包み込んでいる。怪僧の言葉が間違っていないことが

麻衣にも理解できた。

「あうっ？ ああつくうっ……」

「姉上様とご一緒、それが麻衣様のお望みでしょう。この快幻坊しかと承知しております」

自在に変化する魔羅が毛虫触手と同じ形状となった。いやでも思い出した毛虫触手の悦楽を胎内で現実のものとされ麻衣を追い込んでいく。

さくらが深く突き上げ、まず亜衣が達した。

「ひひひひッ……」

とても絶頂の声とは思えぬ化鳥のような叫びをあげて、妖肉に拘束された四肢を引きちぎらんばかりに伸び上がった。沈み込んだ体がもう一度、円を描いて上下動した。そのままガツクリと首を折った。

「ああっ、ああっ……イクッ……イクッう」

後を追うように麻衣も達した。昇り詰めながらも麻衣は姉のことが心配でならない。亜衣の声は断末魔のような絶叫だった。亜衣はそれつきりぴくりとも動かない。

「お姉ちゃん……」

「姉君が心配ですか？」

精をたつぷりと吐き出した毛虫触手がしぼんでいく。黒く鋼線のごとき毛だけが女陰に残り、内側から押し広げた。黒毛により開口された姉の陰部は無惨の一言だった。真っ赤に染め上がった大陰唇は腫れぼったくなっているし、桃色の内肉は白い粘液がこびりつき、膣壁には赤い筋が何本も引かれている。炎症だけでなく軽く出血もしているかも知れない。

「ひっ……酷すぎる」

「ずいぶんと荒れてしまいましたな。ご姉妹様を思つてのこととは言え、少々やり過ぎたかも知れません」

自分がしでかした天罰必定の行いをまるで気にする様子もなく快幻坊は言つた。

新たな触手が亜衣の中へと入っていった。薄緑色の先だけ膨らんだ巨大な注射器を思わす形状の触手である。亜衣の口からは人形をつぶしたときのような空気が押し出される音がした。

「もう、お姉ちゃんは許してあげて。わたしが……わたしが……」

「ご心配には及びません。この触手から流れる薬液はどのような傷もたちど

ここに癒やすのです。なあに、少々副作用がございますが大したことではございません」

さっそく触手が注入したのだろう緑色の粘液が姉の陰部からあふれ出した。みるまに内腿を緑色のスライム状粘液が覆っていく。

「さあ、麻衣様も姉上様を癒やして差し上げなさい」

「かわいそうに……。わたしのお姉ちゃんちゃんの傷を舐めて治してあげる」

麻衣は真つ赤に染まった姉の肉花に顔を埋めた。

「もつと舌を出して。そうです、姉上の女陰に擦り込みなされ。麻衣様の愛情を込めて丹念に、丹念に」

赤く染まつてしまった肉のフリルを唇ではさみ、吸い出す。蛇の毒を吸い出すように何度も何度も――。凄烈な交合を物語るように快幻坊に打ち付けられた下腹部から内腿の肌が荒れている。鼠径部そけいぶから会陰部に丁寧ていねいに舌を這わせ緑色の薬液を塗り込んでいく。役目を終えた触手が抜け落ちるといよいよ姉の肉洞へと麻衣の舌が移動した。

麻衣は二重の喜びに満たされていた。

ひとつは姉の傷を癒やしてあげることの慈愛の喜びである。母が子に与え

るような優しきで白濁液のこびりついた秘部の穢れを取り除いていく。母性が刺激されてこの上ない充足感に彼女は浸っていた。

もうひとつはやつと姉のそこにありつけた喜びである。女たちが代わる代わるおいしそうに舐めていたそこをやつと麻衣も舐められた。つかず離れずの距離で延々と姉の肉花から淫汁を溢れ出る様を見続けて――。女陰が奏でる淫音を聞き続けて――。麻衣の中にどうしようもなくたまつた思い。それは明確に劣情だった。ようやくそれを満たせたのだ。

姉の陰部に舌を突っ込みながら、麻衣の腰が自発的にうねっていた。まるで快幻坊への謝意を示しているようである。もつとしゃぶらせて欲しいという懇願でもあるようである。

「麻衣様の姉上を思う気持ちが愚僧にも伝わります。おうおう、それ程までに……これこそ無償の愛でございまする」

尻を震えさせて麻衣は達した。その顔は喜びに満たされている。化け物に犯された悲壮感などどこにもなかった。わななく舌からツ―つと糸を引いて雫がこぼれ落ちた。

第四章 真・姉妹愛

2 2

「さあ、麻衣様の願いを聞かせて下され」

「——お姉ちゃんをもつと愛してあげたい」

快幻坊は麻衣を立ち上がらせると麻衣の肩から手を外した。思いがけず解放された麻衣は意外そうな顔をする。

「お忘れか。拙僧がご無礼を承知の上でいらざる手出しをさせていたただいたのは、おふたりが愛情を育むに相応しいおんなへと開花させんがため」

ぐったりとしていた亜衣が息を吹き返した。彼女の四肢を拘束していた肉触手がすつと離れていく——。

よろけた姉巫女を麻衣が支えた。

「——お姉ちゃん」

麻衣は優しく姉に口づけをした。

「——麻衣」

目覚めのキスを受けた亜衣はしつかりと目を見開いた。はっと妹を抱きしめる。麻衣の懸命な看病が功を奏したのか、亜衣の目には燃えるような輝きが蘇り、妹の肢体に絡ませた腕にもつい先ほどまで青息吐息だったとは思えぬ力強さがあつた。

「お姉ちゃん欲しい。他にはもう何もいらない」

「わたしもよ。ずっとこうしたかった。たぶん、そう……生まれたときからずっと……」

ふたりはともにこのときのためにこの世に生を受けたのだと、生きる意味を知った喜びに充ち満ちていた。忌まわしき淫鬼に陵辱を受けた沈痛は消し飛んだ。それさえもこのときのためにあつたと思えた。

触れあう肌と肌のあらゆる接点から悦びが生まれてくる。あとからあとからシャボン玉のように浮かび上がり、体内のあちこちで弾ける。性感に目覚めた肌は触れあっているだけで気持ちいいのに、擦れ合わせるとさらにその何倍もの快感を得ることが出来る。しかもその感覚を共有していた。どこを触って欲しいのか、どこを触ったら気持ちがいいのか、そんなことさえも互いに手に取るようにわかった。

肌と肌からか、それとも見つめ合う瞳からか、あるいは絡み合う舌からか、不思議な信号が流れて感覚が共有できていた。それを密にしようとふたりはますます濃厚に交わった。すると心さえひとつになった。以心伝心のふたりでも初めて体験する途方もなく深い一体感だった。決して嘘のつけない心の深奥で、亜衣は妹だけを想い、麻衣は姉だけを想っていることを知って、一片の偽りのない相思相愛の関係が明瞭になると、ふたりの目尻から涙が流れた。

麻衣が体を仰け反らせると、亜衣は妹の細腰を力強く抱きしめながら宙に浮かぶように揺らめく乳房にしゃぶりつく。

「嬉しい。お姉ちゃんもつと愛して」

麻衣は姉への一途な思いを口にした。

腰を少し落とした麻衣が姉の乳房に口を寄せると

「わたしのかわいい麻衣とずっとこうしていたい」

と亜衣は歓喜に震えた。妹の頭をがっしりと掴んでもつとしゃぶって欲しいと胸に押し当てる。

薄暗い地下の密閉された石室にしながら、ふたりの天女は雲海の中で千里

を駆け巡るような浮遊感と爽快な開放感に魂を遊ばせていた。



亜衣が愛妹の乳房に舌を這わせている。

麻衣は愛姉の美貌を両手で包み、伸ばした指先で耳たぶをさわさわとやさしく愛撫していた。

余人の入り込む余地などない天津姉妹を挟んでふたりずつ、四人の少女が石舞台に手をつき尻を突き出していた。

快幻坊が見いだした誓願の巫女であった。

怪僧は仲睦まじく交わる姉妹天女を、何を考えているのかわからぬ目で眺めながら、奈那実を犯していた。

誓願の法陣のため自らの手で傷ついた奈那実の処女膜はまだ胎内に残っていたが、ここに至り完全に引き裂かれた。

奈那実の股間から滴る鮮血をぬぐうと快幻坊は言った。

「ご姉妹よ、愛を語らうに相應しい姿となりなされ」

声高な宣言と同時に快幻坊は処女血と愛液が混じった和合水を頭上へと放

った。さらにはボロボロになった二枚の布きれを姉妹の頭上にフワリと投げ掛ける。

赤い血水が光の粒子をまとい、聖巫女姉妹に降り注ぐ。

麻衣、亜衣の姉妹はじつと目を見つめ合った。握りしめたふたりの手の間から光が生まれた。

暖かく眩い光が姉妹を包み込むとふたりは軍神羽衣をまとった姿へと変貌していた。

「お姉ちゃん、きれい。天女さまみたい」

「麻衣、あんただって。清らかに輝いているわ」

羽衣軍神の神々しい姿は穢れなき純愛の証しのように映るのだろう。ふたりは誇らしげな表情をしていた。

ふたりは互いの羽衣を肌で感じようと、肢体をすり合わせた。その触感が新鮮なのかふたりの手は互いの体のあらゆるところをまさぐった。どちらともなく唇を重ねる。初々しいキスが濃厚なディープキスへと移行するのにさほど時間はいらぬ。舌と舌も深く、しっかりと絡ませあっていた。深々と舌を差し入れ、口内粘膜のすべてを摩擦しあうようなキスはセックスそのもの

のだった。

淫鬼滅殺の装束に身を包みながら、戦う素振りもなく愛欲世界に耽溺する姉妹を横目に、快幻坊は美由衣、さくら、冴美と次々に貫いていく。幻妖な儀式に純潔を捧げた四人の乙女の処女膜は永遠に失われた。

「おふたりとも股をお開き下さい」

処女花が散らされる光景にも目もくれず、ふたりだけの世界にいる姉妹に怪僧は呼びかけた。

ふたりは総体をくつつけ合わせたまま、全く同じように石舞台に片手をつき、片足を上げると太ももの裏にもう一方の手をやり引き寄せた。その間もずっと口づけを交わしたまま、ひとときも離れようとしなない。

「このようなものまで装着なさるとは……」

羽衣装束のスリットの隙間に快幻坊の手が伸びていた。怪僧は姉妹の下着を無造作に引きちぎった。

装着者の意識によるのだろうか。どちらも現代風のショーツである。無地の純白の布地がきらきらときらめいているのは愛液によるものだろうか。おもむろに怪僧は麻衣の下着を口にするとするすると飲み込んでしまった。亜衣

の下着も同様にうどんでもすすするように喉に流し込んだ。神気を帯びた霊衣もこの破戒僧にかかつては前菜ていどの感覚なのだろう。

「おふたりの愛情を拙僧めが確かめて進ぜましょう。まずは亜衣様から……」

破瓜の返り血を浴び、赤く染まった淫茎が亜衣の陰部の中へと消えていく。

「博愛の亜衣様にあらせられても妹様への思いは格別のものがございますな。厳しさのなかに秘した麻衣様だけへの特別な愛情……なんとも味わい深い」

「さて……麻衣様の方は……。永遠に代わらぬ慈愛に充ち満ちております。

姉上様のためなら御身を犠牲にしても構わぬと、己を亜衣様の盾とする覚悟が感じられます」

快幻坊は姉妹のあいだを行き来して、それぞれの愛情を講評してみせた。

「おふたりは結ばれる資格が十分にございます。さあ、誓いなされ、願いなされ」

ふたりは長い長いデュープキスを中断し、しばし見つめ合う。

寸分の狂いもなく全く同時にうなずきあうと、

「麻衣を一生愛しぬくと誓います。だから……もつと麻衣のからだの隅々まで知りたい」

「片時もお姉ちゃんのそばを離れないと誓います。だから……もつとお姉ちゃん」とひとつになりたい」

と、誓いの言葉を口にした。

その振る舞いは花嫁に似て、相手の言葉を聞き届けるとどこか不安の入り混じった表情から晴れ晴れとした笑顔へと変わっていた。

「ご誓願確かに見届けましたぞ。乙女たちの処女血がその願いを成就させましょう」

快幻坊は力強く言った。

ふたりの唇はまた重なり合った。

「妹様の前ではあなた様もただのひとりのおんな。つまらぬ誇りも使命もすべて忘れてしまいなさい。麻衣様に隠し立ては無用、身も心も解放するのです」

「あはっ、いいっ……。愛し合うことがこんなにステキなことだったなんて……」

「これも下らぬ世俗のくびきから解き放たれたがため。わかりますかな？」
「はいっ、御坊様のお陰です。もつと早く素直になっただけ……。麻衣大

好きよ、ああ……」

亜衣は表情を緩ませてそう答えた。

「お姉ちゃんとするの気持ちいい。アアン、こんなの初めて……」

「姉上様に存分に甘えなされ。姉上様も同じ思いなのです。甘美なうねりに身を任せ、何もかも蕩けさせるのです」

「こんなにも気持ちいいことを教えてくれて麻衣は御坊様に感謝しています。ああ……からだがぐにやぐにやになっちゃう」

麻衣は謝意さえ表した。

——愛の賛歌か、肉欲に魂を売り渡したのか。

体の中に爆発的に広がる愛情と快美感の素晴らしさをふたりは口々に言つた。

姉妹は石舞台に身を横たえた。白く濡れてひかる脚は開いたまま——。いずれも美しい秘処を、代わる代わる怪僧が貫いている。もはや相手が淫敵だという認識はないのだろう。むしろ愛情の証しをもっと確かめて欲しいとせがむように、ふたりはがつちりと太ももを抱えて開脚している。

黒光りする人外の魔羅を肉の輪で愛しげに締め付けた。恋人にしか与えて

はならない神気を帯びた愛液を惜しみなく振る舞った。

それも羽衣装束の姿でだ。

身にまとう薄布がひらひらと舞った。

「美味、美味。おひとりでも極上のカラダがふたりそろつてとは豪勢かな。

これぞ天女の女肉でございまする。さあ、牝の本能の赴くままに愛欲にすべてを捧げるのです。拙僧が天女肉の価値をさらに高めて差し上げよう」

うぐいす
鶯の谷渡りを愉しむ魔宴の司祭は言った。

天女の血を引く姉妹巫女はこうして結ばれた。

23

石畳の一枚が隆起して石柱となり、即席の椅子を造り上げていた。

その上に乗った女体に木の枝のような茶褐色の何かが絡みついていた。あらゆる種の植物が寄生をしているようにも見える。事実、化け物の太幹が女体の中心に深々と突きささり、女のエキスを吸い上げていた。

女は亜衣であつた。

羽衣軍神の装束はそのままだに、胸元がはだけたあられない姿である。

石柱の椅子に半分だけ尻を乗せた亜衣を下から快幻坊が突き上げていた。

「わたしは麻衣と愛しあいたいのに」

亜衣と麻衣は姉妹同士の禁断のレズ行為に溺れ、時を忘れて愛しあつた。

永遠とも思えた甘美な時間も、それが過去のこととなつた今ではつかのまのできごとに思える。愛情のひとつときは夢幻のごとく消え失せ、魔僧の肉茎だけが胎内に残つた。異形の化け物に辱めを受けることよりも、亜衣には最愛の妹と引き離されたことがつらかつた。

「いまひとつ亜衣様が素直になりきれぬからこそ、確かめさせて頂いているのです。麻衣様と交わりたくば愛情の証しを我が魔羅に示し下され」

快幻坊の言葉に、ああ、と亜衣は恨めしげに呻いた。

「こんなにしてるのにまだ足りぬのですか？」

「まだまだでございます」

しとどに濡れた蜜部は麻衣と交わつたときの状態を維持したままだ。太幹に樹液を垂らしてしまっている。理性が散り散りになつたままの亜衣に嫌悪

と言えるほどのしこりは残っていない。が、頭の奥底からこんなことはいけないと、論すように思念が流れる。そのたびに彼女は苦悶の表情を浮かべた。

けたたましく電子音が鳴った。

亜衣の携帯電話からだった。折りたたみ式の携帯電話を触手が掴んで目の前に突きだしている。

「これで三度目ですぞ。お声を聞かせて上げなされ」

亜衣はかぶりを振った。ところが、触手は器用にボタンを押した。

『亜衣様でございますか？ 心配いたしましたよ。昨日はお帰りにならず、今日もすでに夜更け。いったいどこにいらつしやるのです』

携帯電話のディスプレイに名前が表示されている。蘭笙らんしようかずえ一かずえ枝からだった。

一かずえ枝は早逝した姉妹の母と同一年で二十年以上も巫女を務めている天神子守衆の重鎮だ。いまでは巫女頭としてまだ学生である姉妹に代わり後進の指導や神社の運営を行っていた。姉妹が学園に行っているあいだ、留守を預かり神社を守護するのも彼女の役目である。

「邪鬼の気配を感じたのです。追っているうちに遅くなってしまうて……」
母を亡くした姉妹は先代の天神子守衆宗家、幻舟に引き取られた。多忙な

幻舟に代わり、一枝は姉妹の養育を手伝った。一枝にも娘がいてそのついでということであつたが、おむつ交換や入浴を主に担当したのは一枝だつた。乳母とも言える彼女の前で恥をさらしたくないのだろう。嘘が大嫌いな亜衣が嘘をついた。亜衣はくなくと首を振り、電話を切つてと訴えかける。どうにか一枝に弁明した亜衣だが異様な感触を耳に受けた。ヒイツと危うく出そうになつた声を抑える。

【ほう……嘘をおつきになりますか】

声は耳の中から聞こえた。頭の中に直接囁くような声が伝わる。快幻坊の長い舌が亜衣の耳の中に入り込み、細かく振動させて音声としたのだ。

『麻衣様は？ 麻衣様はどうされたのです？』

【教えて上げなされ、妹君の様子を】

快幻坊は姉巫女のおとがいを押さえて荒い声のする方向を直視させる。



麻衣は石舞台の上で触手に犯されていた。

否、犯されていると言うよりも……。

赤い長手袋の上にも、むきだしになった健康的な長い脚にも触手が巻き付いている。

彼女の顔面には五本もの触手が鎌首をもたげ、己の番を待っている。麻衣はその一本一本に熱心な口唇奉仕を行っていた。

ねっとりとした奉仕を受け終わると触手は麻衣の背後にまわり、赤く垂れた衣服の隙間から入り込んでいく。後ろから忍びよる触手が白い裾をまくり上げると、そこにあるのは触手の突き刺さった丸い美尻だ。

麻衣は自分がねっとりとしやぶり、唾液まみれとなった触手に愛着のようなものを感じているのか、背後を振り返って触手に貫かれているのを見届けては表情を緩ませている。そして新たな触手に奉仕を開始する。

石舞台にはワイングラスのような器が置かれ、麻衣はそこに乳房を載せていた。器にこめられた魔力のためなのか、妹の美乳は弾丸状に変形し、伸びきった乳首が字でも書くように器の底をなぞっている。器のなかには液体が入っているらしい。前後に揺れる彼女の動きでときおりこぼれては、両サイドで何本も待ち受けるタラコ唇をした触手が先を競って舌を伸ばしている。タラコ唇触手が本当に狙っていたのは妖しげな液体で漬け込まれた麻衣の

乳房だったようだ。ワイングラス状の器が割れて碎けると、その中でも一番太い触手が他を押しつけて乳房に取りついた。乳房を丸ごと搾り出そうという勢いで、タラコ唇をもごもごさせている。

——いい、いい……もつと。

ひしめきあう触手が蠢くたびに麻衣は歓喜と肯定の声を発していた。妹を見つめる亜衣の表情には怯えが入り混じっている。

あんなに情熱的に純愛を誓い合ったのに——。

麻衣が触手を選んでしまいそうで怯えているのだ。



「麻衣は少し離れたところに居ます」

触手に溺れた妹の惨状を口にできるはずもなく、亜衣はそう説明した。

【やはり、亜衣様は嘘がお上手だ】

たかが方便のひとつとは言え、まっすぐに生きていた亜衣にとって、自分のアイデンティティーを否定するかのようなことである。唇を噛みしめて悔やむのだ。

『いかにご姉妹といえど、たったふたりでは包囲できるはずもなし。邪鬼を取り逃がせば大惨事は必定。ここは我々にご下知なさいませ』

「……なりません」

『なぜでございます。包囲するならひとりでも多くの人員であたるのが道理。我らの命を惜しんでいるのであれば大変な思い違いですぞ。幻舟様がご存命であればどれほど嘆かれたことか……』

説教めいた一枝の言葉は途中から亜衣には届いていなかった。

快幻坊は腰の動きを休め、亜衣のさせたいようにしていた。

淫僧の腰上でゆらりゆらりと亜衣は左右にくねらせている。できるだけ音を立てないようにしているつもりなのだろう。ねつとりとした腰遣いであった。

快幻坊のすりこぎ棒のようなまつすぐな棒状に近い肉柱。その先端が傘を開くように拡がっていった。さらに淫棒の真ん中でもこぶが盛り上がったと思ったら、そこでも傘状に隆起していく。

柔軟な粘膜は奇怪な淫茎にもぴったりと吸着し、型取りしているかのよう。膣道の姿を合わせていく。あるじにも新たな欲望の形を伝えるのだ。

二段重ねの傘を持つ毒キノコが亜衣の脳裏に浮かんでいた。異様な形状に膾を變形され亜衣は呻いた。

淫棒の変容はまだ終わらない。カリ首にあたる傘の内側からひげのようなもの毛が生えて膾内に根を伸ばしていく。

【熱く溶けた内なる膾をこの二段に連なるカリ首で擦り上げたらどうなるか？ 想像してみなされ】

「はあ、はあ……あふう……」

ほのおのような吐息をついて、亜衣の腰つきは卑猥さを増していく。

カリ首から伸びた細い髭根は膾内全体へと行き届いていた。埋まった髭根がしとどに濡れた粘膜から華蜜を吸い上げている。彼女もそれがわかるのだろう。恥ずかしげに首を振り、同じように腰も振る。

【これこそ噂に聞く天女蜜に相違ありますまい。天界でしか味わえぬ天女蜜をよもや下界でいただけるとは。高貴にして深くまろやかな味わい。極上にして至上でございます】

贅辞を惜しまず、淫蜜の美味ぶりを解説される。快悦に蕩けていても、彼女に築かれた芯が恥辱と感ずるのか、亜衣は顔を歪ませて嫌がつてみせる。

それがまた刺激となるのか熱いものがあとからあとから流れ出るのだ。

——美味、美味。一滴もこぼさず愛液を吸い上げて、怪僧は味わい深さを饒舌^{じょうぜつ}に亜衣に語り聞かせる。

「いわないで……そんなに言われたら……はあっん」

よほど淫僧の言葉が突き刺さるのか普段見せたことのない狼狽ぶりだ。快幻坊がささやくたびに亜衣の腰振りは卑猥になった。

催眠術にでも掛けられたように、巫女戦士は快楽人形と化していくのだ。【亜衣様のここはきつく締め付けてねだっておりますぞ。そんなにこのカリ首でかきむしって欲しいのか？ 我がカリ魔羅は亜衣様の蜜にも負けぬ味。ひとたび知ったのならやみつきになつてしますぞ】

こくん、こくんと亜衣は大きく頷く。彼女は首振り人形にもなっていた。

——あ い さ ま。

遠くから呼ばれたような声がして亜衣は現実^{現実}に引き戻された。

『いかなされたのです？ 先ほどから呼吸を乱しているご様子』

「移動しているのッ。走ったからア……はあっ……くうっ」

『山野を走っても息ひとつ乱さぬ亜衣様が……。それほどの危機がそこにあ

るというのですか？　なればやはり我らの出番。どうか場所を教えてくださいまし』

「……………」

『亜衣様、どうなされたのです？　早く場所を』

「黙ってて……はあん」

一枝をたしなめると、亜衣は首を、舌を思いつきり伸ばした。一瞬のすきをついて触手が掴んでいる携帯電話の保留ボタンを舌で押した。

「もう待ちきれない！　御坊様、お情けを、亜衣を突いて」

「これでよろしいのか？」

「そうです。ああつわたしのいやらしい部分を全部削って下さい。そうです。もつとお……」

電話を保留にするなり、溜まったものを爆発させる亜衣。

それに応えて、快幻坊が猛烈に腰を突き上げた。二段のかり首はよほど淫肉に食い込んでいるのか。ボゴッボゴッとそこから立てると思えない音を響かせている。

【この趣向、気に入っていただけましたかな？】

「はい、とても……ああイイツ」

【いいご趣味だ。快樂の声を耐え忍び、一気に解放させるのがたまらるのでしよう。好きなだけ高みへと昇るがいいですぞ】

「そうよつ。もつとお。わたしをほじくり返していいのツ」

亜衣は髪のを振り乱して悩乱し、淫泣を振りまく。聖なる羽衣を身にまといながらよがり狂った。

「ああんつ……きちやう。なにか来るッ！？」

絶叫とともに亜衣の股間から飛沫が宙を舞った。

自分の身に何が起きたのかわかっていない様子の亜衣に快幻坊が教えてやる。そして自分の口で言ってみせよと促した。

「亜衣は潮を吹きました。気持ちよすぎて潮を飛ばしました」

二度もその言葉を使って亜衣は説明する。

亜衣はよだれを垂らし、股間からは淫汁を滴らせていた。石畳みには触手が群がり、潮のつゆさえ残さずすすっている。

忘我を彷徨^{さまよ}う亜衣に携帯電話が突きつけられた。

「亜衣様！ 何事でございます。いったい何をなさっているのです？」

「えっ………」

電話の保留状態が解除されている。

——どこまで聞かれていたものか。

ゆでだこのような有様で亜衣の顔はみるみる真っ赤になった。

【存外と露見せぬものですなあ】

まるで意に介さず怪僧は言った。無情にも上下運動が再開される。

「一枝さんの前では許して」

乳母に聞かれていた。衝撃的な事実に一気に引き戻されたのか、亜衣は左右に首を振って懇願する。

くいくいと快幻坊が指をさした。

——麻衣いがこちらを見ていた。

妹の視線に灼かれて、亜衣はまた盛大に潮を噴いた。

『要領を得ませんな。まったく麻衣様は頼りになりません』
蘭笙一枝はあきれたように言った。

「ごめんなさい……うつ……うつ」

泣き声で謝罪する麻衣。彼女は亜衣と場所を替え、石畳みが隆起してできた即席の椅子の上にいた。石椅子に座る快幻坊の上に載せられて貫かれている。羽衣軍神の姿なれどぐつちよりと濡れた聖衣に本来の力は感じられない。うつすらと頼りなくひかるばかりだ。

怪僧は体をねじ曲げて麻衣の体に巻きつき、乳房に取り付いていた。露わになった麻衣の乳房をちゅうちゅうと吸っている。彼女のバストはワンサイズいやツーサイズは膨らんでいる。淫界の酒・《淫ら沼》に漬け込まれ、さながら酒樽となっているのだ。

【天にも昇る心地とはこのことかと。これこそ伝承に聞くソーマに違いますまい】

天女の乳酒をたらふく堪能した快幻坊が聖女の耳穴を舌でほじくり返した

がら激賞した。天女の肉体と天神の神通力が溶け込んだ淫酒がどれほどの愉悅をもたらすのか。人間には想像もできないが、この魔僧がソーマと称えるだけの超常的な酒であることは疑いようもない。

「い……や、そんなに……吸っちゃ」

くなくと麻衣は首を横に振る。

淫僧の術中に墜ちた麻衣に正常な判断は望みようもない。それでも快幻坊の言葉が自分が何者かを思い出させるのか、しきりにいやいやをする。

『麻衣様がしつかりとしてないから妙な噂も立てられるのです。麻衣様も耳にしておりましよう。裏山でおひとりでなさっていると。貞潔たる巫女にあるまじきハレンチな行為。宗家名代として模範となるべき麻衣様がよもやなさるはずもありますまいが……』

こちらも電話越しに舌鋒を振るう。

一枝の言動はどこかおかしい。普段は彼女は人柄を表して温厚に話す。だが今は――。言葉の端々に毒を含み、いばらのようにとげとげしい。

『お部屋のなかでもそもそとお手を動かす姿を見たという者もおるのです。五日続けてですぞ。このような話を亜衣様が耳にしたらどれほどお嘆きにな

るか……。ただの足手まといだとか、どうしようもない淫乱女だとか、麻衣様へ向けられた誹謗中傷の数々、わたくしにはもう抑えられますまいぞ』

「ああつ……ああんつ……ちがうんですつ。んんっ」

否定しながらも時折よがり声を漏らしているのを麻衣は気づいているのだろうか？

『淫乱呼ばわりされてなぜ艶めかしい声を上げなさる。ウスノ口の麻衣様はまことに淫乱でございましたか？』

「ちがう、淫乱なんかじゃない。ううつ……んっううつ」

『性に乱れた麻衣様を潔癖な亜衣様はお許しになりますまい。姉妹の縁さえ切るかも知れませんな。誰しも淫乱マゾな妹など欲しくはない』

「ひいつ……ひいつ。一枝さん、ひどいわ。ああつ……あんまりよ」

主従関係を見捨てて一枝は麻衣を罵倒しはじめる。聞くに堪えない言葉の暴力を受けて麻衣はなぜかすすり泣きを漏らすのだ。

じつのところ一枝は快幻坊の支配下にあった。

亜衣との通話に奇妙な音が混ぜられていた。それはある種の催眠音波で、宗家の声に耳を傾けるあまり、あっけなく快幻坊の秘術に掛かったのだった。

【言葉でなじられて法悦の境地に至るとは、これをマゾと申しますか。妹君様は奇怪な性癖でいらつしやる】

——露出狂、淫売、尻軽女、一枝はかさに掛かつて麻衣を言葉でなぶった。いつの世も女人とは陰口が好きなものではある。が、邪術により引き出されたとはいえどこにそんな暴力性を溜め込んでいたのかという口振りであった。

あきましたわ、マシガンのような毒舌をとめて一枝は嘆息をついた。

『わたくしも所用がありますゆえ、玲子^{れいこ}に代わりましょう。年頃の娘同士なら話もしやすいはず』

さんざん言いたい放題にして満足したのか、一枝は電話口から去って行つた。

玲子は蘭笙一枝の娘だ。まだ巫女見習いながら、天津姉妹よりひとつ年上で天神学園を一足早く卒業し、巫女修行に専念している。実の姉妹のようにいつしよに遊んだ幼なじみでもある。

『玲子です。ねえ、麻衣——』

電話を替わるやいなや玲子は問い質した。

『——さつきから母の隣で聞いていて不思議に思ったの。ピチャピチャと音が鳴っているのは何かしら？』

「……………、あんっ」

『麻衣、しらばつくれてもだめよ。ほら、わたしのも同じ音を立ててるでしょう。あはッん』

携帯電話を通じて水音が聞こえた。

「玲子までしてるなんて……あうっ……そんなことって」

『何をしているのかハッキリ言うのよ。いっしょなんだからイイでしょう』

「お、オナニー。ああっ、感じちゃう」

あろうことか淫らな誘惑を払うはずの少女戦士は自慰に耽っていた。傍らの魔僧に乳房と耳穴をいたぶられながら自らも体を慰めていたのだ。しかも淫猥な行為を白状させられながら股間に伸ばした両手は休むことがない。

『いじってるんでしょう。どうしてるの？ いいなさい』

「クリ転がしてるの、気持ちいいよ」

『それから——』

「触手をアソコのなかに。すごいわ、これっ」

ふたりの会話はテレフォンセックスの様相を呈してきた。

淫核をどのように転がしているのか、淫穴を埋め尽くすゴツゴツとした触手の形状も麻衣は克明に打ち明ける。幼なじみの玲子は美少女戦士の密戯を巧みに聞き出す。麻衣はいやいやをしながらもありのままを素直に応えてしまう。

麻衣はますます興奮した様子で、あどけなさの残る顔を紅潮させ、汗に濡らしながら、熱く吐息をついた。前垂れを横にやり、右手に握りしめた触手をズボズボと己の女陰をぶちこみながら、左手では淫核を押し潰して回している。

【それだけではありませんまい。すべて、正直に話さない。楽になりますぞ】意味ありげに言った快幻坊がズンと腰を深く送り込む。

それだけは――。そんな麻衣の拒絶も淫僧が一度三度と突き上げるだけで、脆くも崩れ去った。

「お、お尻の穴、御坊様に犯されてるのッ」

なんということか。麻衣は裏門で交わっていたのだった。

禁断のアヌスを犯され、自らの手で淫口に触手を突き込む麻衣は、告解す

ることで興奮のボルテージが最高潮を迎えたようだった。日頃の清純らしきをかなぐり捨てて狂態する。

「ああっ来ちゃう、来ちゃうわ」

天を仰いで絶叫すると、麻衣の股間からアーチが描かれた。黄金色の放水だった。

石畳みで待ち受ける触手はどれもが口を開き、黄金水をキャッチした。

飛沫が一滴残らず垂れると、放心状態の妹巫女は言葉にならぬ呻きを発した。快幻坊は彼女の耳の穴奥深くまで舌で犯していたが、舌伝いになにやら促したらしい。

「麻衣は、麻衣は……漏らしてしまいました。気持ちよすぎておしっこを漏らしてしまいました。神聖な羽衣をおしっこで汚してしまいました」

失禁した天女はその懺悔にさえ酔っているようである。その言葉を聞き届けると魔僧はピストン運動を激しくし、今度は肛悦の魔味を紅天女に刻み込み始めた。



「お姉ちゃんと愛するために御坊様にほじくり返されてるの」

「御坊様がどちらの穴も使えないと愛する資格がないって言うから」

「アナルが気持ちよすぎて、おつゆがとまらないよ」

「だってお姉ちゃんもお尻の穴ですごく気持ちよさそうにしてるんだもの」

麻衣はセックス実況に夢中になっている。

彼女の姉もまた快悦の虜だ。四つん這いになった亜衣は石舞台の上で触手に群がられていた。

触手にずぼずぼと穴という穴を犯されたあとは、セックス後の余韻を愉しむような口づけに移行している。麻衣の乳房を吸っていたあの巨大なタラコ唇を持った触手と恋人同然のキスをしていた。

タラコ唇の触手は亜衣の後ろにも群がり、膣口だけでなく尻の穴にも長い舌を深々と差し入れ舐めまわしている。暗紅色の舌がずつと何かをすすりながら、奥を穿つたびに姉巫女は背を仰け反らせて、ひい、と喜悦の声を漏らす。

亜衣のキスは人外の悦びを与えてくれたことへの謝意のようにも思える。
タラコ唇にぴったりと唇を押し当て、フェラチオのように顔を動かしてぶ厚い舌をしごくのだ。

25

石室内に突如として金色の光が灯った。

ホタルの光にも似た光の玉が室内を浮遊する。

——麻衣よ、しつかりするのじゃ。

彼女にとっては懐かしい、厳しさのなかに温かみのある声がした。

「……おばあちゃん？」

法悦のさなかにいた麻衣が反応した。

ほう、と快幻坊が感嘆する。

「この石室は学園の地下にあってさにあらず。人間界との経路は遮断し、淫

界外縁部辺境の密閉された空間にある。ご姉妹の気配をたどり、多重に敷いた結界を突破してここまで来たことは褒めてやろう」

光を追って触手がミサイルのように突撃する。

ひらり、ひらりと触手を交わしながら光球はまたも呼びかけた。

——お前たちのしていることは愛ではない。淫欲に支配されているのがわからんのか！

光球の正体は黒闇こくあんをも照らす霊格からも理解できよう。それは歴戦の羽衣継承者の魂魄が集合した大威霊だった。数多の魂の中でも姉妹にもっとも近しく、正義の心を奮い立たせるであろう声で呼びかける。

「だがお前たち怨霊の、そしてご姉妹の命運はすでに決していることがなぜ理解できないのだ」

偉大な英霊もここまでの遠き道程で力を使い果たしたのか、天神の威光が届かぬ閉鎖空間では魂の声で働きかけるのが精一杯のようだ。

力を振り絞るように光が輝きを増した。暖かな安らぎに満ちた金色の光に照らされて、麻衣も光の球を目で追った。

——あきらめてはならん。おのれの使命をまっとうするのじゃ。

懸命に訴え続ける光球の動きが突然コントロールを失った。情性で横に流れるだけとなつた光球はたちまち触手に捕らえられた。

無念じゃ、そう言い残しふつりと光球は声を失った。

『母や先輩方がご神体を封じたわ。あなたたちの声が神殿中に響いてるんですもの。ご先祖様に聞かせるわけにはいかないでしょう』

「おばあちゃんが……」

「執念深い怨霊といえど、元を断たれればこのざまよ」

どうやら一枝によつて招集をかけられた巫女衆全員が快幻坊の秘術の支配下にあるらしい。電話の音声をスピーカーによつて聞かされていたようだ。

いかに大威霊といえども無防備な力の源を、その聖域を守るはずの巫女衆によつて封じられてはどうにもならぬ。

こうして密閉空間に誘い出すことさえ、恐るべき怪僧の計画の内だったのかも知れない。



「さあ、受け取りなされ」

触手に捕らえられた光球が麻衣の前へとたぐり寄せられた。柔和な光を放つ球に麻衣はそつと手を伸ばす。光球は巫女戦士の体へと吸い込まれていた。

大威霊の最後の力を受け取った麻衣が小さく声を出した。延々と発していた糸を引くようなよがり声とは明らかに違う声である。淫熱に浮かされていた麻衣の瞳に黒く澄んだ光が戻ったようにみえた。

「あ、わたし？　こんなつもりじゃ」

光の巫女が淫鬼と交わり愛情たつぷりの愛液を振る舞う。しかも禁断の裏穴を穿たれながら。そのおぞましさを麻衣は思い出したようだ。

天神への背信行為をやめるべく麻衣は快幻坊を振りほどこうとした。淫茎が抜け落ちた。が、光の力を受け取ったといえ、長時間にわたり淫行を繰り返していた麻衣にそこまでの回復は望めない。麻衣は怪僧に絡みつかれたままである。彼女の逃げようとする動きに合わせ立ち上がった怪僧が体をピツタリと寄せた。

「覇気が蘇ったようすな。ヒヒヒ、羨のし直しじゃ」

珍しく感情を露わにして快幻坊は言った。三角形の巨大な昆虫そのものの

顔でほおずりすると麻衣は奇声を出して嫌がる。

——ぬぷり。

粘着音を立てて、魔羅が女陰へと納まった。

「たまらぬ。熱く、ねつとりと絡みついてきよる。よい具合に仕上がりましたぞ。いや、まだまだこんなものでは——。麻衣様の女体の性能、そのすべて引き出して見せますぞ」

麻衣は両腕を高々とつり上げられた。鮮度の蘇った女体を魔僧は嬉々として犯した。

ひい、ひい、呻く彼女の前に透明な触手が天井から垂れてきた。

細い管状の触手である。

その中間辺りが袋状になっていた。無色透明な液体で満たされている。麻衣はその奇妙な形状の意味をすぐに知ることになる。

透明な触手は妹天女の股間を目指す。淫茎に巻き込まれるようにして肉裂へと潜り込んだ。

「そこは違うッ！」

麻衣が悲鳴を上げたのは別の穴へと入っていくからだ。

透明触手の袋状部分はちょうど麻衣の目の前にぶら下がっていた。それが縮んでいく。袋の中の液体がどこへいくかは自ずと明らかだ。

女性の尿道は男性よりも当然ながら短く三、四センチの長さしかない。触手の先端は膀胱内まで達していた。

「注がないで……ひいい。冷たくて、熱いい」

聖女の膀胱を膨張させているのは、繰り返し麻衣に注がれた魔酒である。淫界の大吟醸《淫ら沼》をなみなみと蓄尿器官へ注入されて、麻衣は苦悶の表情で呻く。

触手のしぼんだ袋が膨らんでいく。魔酒を注入された膀胱が今度は反対に吸引されているのだ。袋内にあつた液体が元の位置へと戻る。残尿と混ざり合つた薄い黄色の液体が麻衣の目前にあつた。

「黄金色に輝いておりますな」

淫酒の魔力の影響か、その言葉どおり液体はきらびやかな光を放っていた。どれだけ美しくとも己の尿を見せられて、可憐な乙女は羞恥の極みとばかりに首を振る。

【ここもたつぷりと漬け込んで進ぜよう】

怪僧の声が耳の中から伝わった。耳穴がまた舌で犯されているのである。もはや痛みはないのか舌が内耳の奥深くまで入り込んでいるのに麻衣は首筋をビクつかせ、快楽を得てさえいるようだった。

【何を嫌がる必要があります。これは元々あなた様の中にあつた液体】
「おしっこ戻さないで。はあっん」

触手の袋はもう五たび膨らんでいる。麻衣の声には甘さが混じっていた。触手による導尿カテーテルを繰り返して施術され、快感を覚え始めたようだ。

「また、そこおお」

麻衣が新たな悲鳴を上げた。尻の穴に触手が入り込んだのである。その触手も透明だった。寒天質のなめらかな胴体にぬめりを帯びている。酒精の匂いが一層強くなった。どうやら触手の表面からも魔酒が滲み出ているらしい。
【ありとあらゆる穴で愉しめるのも、美しく生まれたご姉妹の特権なればこそ】

「いやよ、こんなの、ぐう、アがああ……」

天女の声は口腔へと侵入した触手によって封じられた。

麻衣の口元から液体がこぼれる。強制的に魔酒を飲ますと触手はさらに奥

へと潜り込んだ。彼女のほっそりとした首が一回り太くなった。触手はさらにねじ込む動きをみせている。

もはや声を出すこともできない哀れな少女の瞳から一筋の涙がこぼれた。触手の外に出ている部分は明らかに短くなっている。どうやら食道を超えて胃にまで到達したようだ。

【亜衣様のように搾り取らせて頂こう】

麻衣の秘花をめぐり返すのは二段カリ首の魔羅だ。姉を狂わせた邪欲を形にしたような肉塊がズブズブ、ズブズブと粘膜を摩擦する。

「んんううッ、んんううッ——」

声を封じられた麻衣にできる、唯一の意思表示である涙さえ淫僧は舐め尽くす。

麻衣は犯し続けられた。

それからどれほど時間が経ったのか——。

胃まで入り込んだ触手一本によって麻衣はつり上げられていた。深々と入り込み食道器官を支配する触手はそれのみで妹巫女の全体重を支えている。宙に浮いた肢体は淫口を犯す魔羅と尻穴を犯す触手によって上下に揺れて

いた。

手はダラリと下がりぶらぶらと体の揺れに任せたままとなっている。

焦点の合わない目がかつと見開かれた。

淫僧が低く唸った。

麻衣の下腹部が小刻みに震えている。ドクドクと流される体液の凄まじさが体表にまで及んでいた。

快幻坊は最後の一滴までも流し込まんと、肉槍を女体の奥深くまで挿し込んだままの姿勢を取っていたが、はてと、小首をかしげた。

果たして――。淫茎をぬいてみると亀頭になにやらこびり付いていた。びりびりに破けた千枚漬けの大根とでも呼ぶべきか。ともかくその薄い葉のような白いものを快幻坊は摘まんだ。

それは梅の護符の成れの果てだった。子宮口で殴打されつづけ、魔精漬けとなつて、花びらは薄く伸びきり、白く染まっていたのだ。中央には大きな穴が空いている。

「いかん、いかん。拙僧としたことが少々ハリキリすぎたようじゃな」
ニタリと嘲笑まじりに破戒僧はつぶやいた。

「なに、代わりはいくらでもある」

そう言つて、快幻坊は女壺に魔羅を納めた。

淫虐の限りを尽くしながらまだ飽き足りることはないのか。

なおも魔僧は紅き天女に挑むのだつた。

26

石舞台はピンク色に染まっていた。

成長した苔は天然のボアシートとなつて隆起した石畳みを覆っている。半透明な葉が薄桃色の淡い光で輝いているのは良質な養分のおかげだろう。燐光さえ浮かび幻想的である。

石畳みに刻まれた呪印は紫から赤、赤から白へと色を変えながら明滅している。呪力の増した光は厚く生えた石苔を貫き、巫女装束の少女ふたりを照らしていた。

妖しさを増した桃色淫景の中で亜衣と麻衣が情熱的に絡み合っている。

ちゅぷっ……ちゅぷっ……。『あぁっっっ……』

じゅるっ……じゅるっ……。『いっっっ……』

姉妹はシックスナインで交わっていた。亜衣が上になり、横たえた麻衣の上に被さっている。巫女の代名詞ともいえる緋袴は半脱ぎとなり亜衣は妹の股座に顔を突っ込んでいる。揺れるポニーテールに合わせて、淫汁をすすする音が室内に響く。

亜衣の緋袴もずり落ちて、魅惑のヒップが丸出しになっている。尻は妹の唇を求めてさまよう。貞操観念のあれほどしつかりとした亜衣だと、にわかには同一人物とは思えないほど淫らに美尻は動いていた。

「麻衣いい、もつと吸って、舐めて、奥まで舌をいれて」

「おいしいよお、お姉ちゃん」

「ああん、やめないで！ もつと、もつと奥まで……。そこっ！ 気持ちいいのっ」

姉巫女は美尻を舐めやすいように位置を調整しながら、ぐいぐいと妹巫女の顔面に押しつけた。貪欲ぶりが見てとれる。

「お姉ちゃんも私のアソコを吸って、舐めて、奥までほじくり返して」

「ああ、もつと出して。いっぱい飲みたいわ」

「そうよ、たつぷり吸つて。どんどん溢れちゃう」

長い時間愛し合ったのだろう。どちらの顔も汗と汁でずぶ濡れである。そればかりか純白の衣が粘液まみれとなっていた。

粘液の正体はふたりの上方で待機していた触手が垂らした先走りの汁だ。触手が垂らすよだれ汁をローション代わりにふたりは体を擦り合わせている。最初はほてった体に粘液の冷たさが心地よかっただけだった。それが擦り合わせているうちに肌のいたるところが敏感になつていった。衣がただけ皮膚と皮膚を密着させると粘膜同士を貼り合わせたような一体感がある。ふたりは体中が性器と化したかのような皮膚感覚に囚われていた。

体中を絡みつかせながらも女性器から口を離さずにいる。亓衣だけでなく下側の麻衣まで積極的にくねらせて、全身の肌を刺激し合っている。体と体が融着してしまったかのようなさまは、なめくじの交尾そのものといって差し支えなからう。

ふたりでひとつの生き物となつた姉妹は総身を密着させたまま裏表を返した。

上になった麻衣は姉の淫核に食らいついた。

ちゆうつと吸い上げながら妹巫女は陰唇のひくつきを観察している。

「お姉ちゃんの亜衣汁がたっぷり湧き出てくるわ」

「焦らしちやいやよ、麻衣」

淫裂から溢れた淫蜜が尻の狭間へ垂れるまで妹巫女はクリトリスを唇で弄ぶ。しとどに潤みきった泉のごとき状態となった姉の秘唇に口をつけるとチュルチュルと音を立てて飲み干す。

亜衣も競うように妹を責め立てた。

浅瀬に潜り込ませた舌をゆるゆると動かして劣情を誘う。すると妹巫女は桃尻を振っておねだりするのだ。

果てどもなく愛しあう姉妹を快幻坊が見下ろしていた。

傍らにいる快幻坊はもちろん傍観していたわけではない。

体節のあちこちから伸びた細い触手が姉妹の体の至るところに伸びていた。耳の穴、脇の下、足指のあいだまで、体中のあらゆる場所にある。

花満開と言った風情をかもす姉妹の淫花の中にもである。姉妹の淫戯を邪魔せぬよう細い触手が膣奥にまで伸びて華蜜を吸っていた。

——究極のラブジュース。

そう表現するのがもつとも相応しいだろう。固い絆で結ばれた姉妹が嫌悪の欠片もあるはずもない最愛の相手に垂れ流す愛液は、犯すことでは決して得られることのない神聖な雫であり、それが天界の血縁の流すものであれば淫者にとって垂涎のエキスであることは言うまでもない。

快幻坊は惜しげもなく振る舞われる究極のラブジュースのおこぼれに預かっていた。



姉妹は再び裏返しになった。

下になった麻衣の顔が表に出た。亜衣が妹巫女のお尻を狙って体を前へつんのめらせたのである。

姉に責め立てられる麻衣に、快幻坊は肉塊を突きだした。

「そろそろいかがですか？」

「はい、御坊様、お願い致します」

嫌がる素振りもなく麻衣は即答した。ちゅっ、ちゅっといばむようなキ

スを降らせる。肉塊は明らかに一回りは太くなっている。何度も交わり姉妹から天女の力を頂戴しているのだ。

麻衣がうつとりと口唇奉仕に耽る様を上から快幻坊は見下ろす。責め手のいなくなつた亜衣の淫裂には怪僧がすかさず舌を長く伸ばして甘酸っぱい蜜をすすつていた。

淫僧はしばらく美妹の柔らかな舌の感触と美姉の華蜜を堪能していた。麻衣の舌遣いが献身的でねつとりとしたものへ変わったころ、怪僧は後ろへと手を伸ばした。

石舞台の下にはひとりの少女が控えていた。

緋袴姿の蘭笙玲子であつた。

姉妹の巫女装束がここにあるのは玲子の働きによるものである。玲子はさらに重大なある荷物をこの石室へ運び込んでいた。

片膝を立ててそれを持ち上げる。

透明な水瓶だつた。無数の花びらが液体で満たされた水瓶の中を舞っている。

快幻坊はそこから一片の花びらを摘まみ取つた。

それこそは天津屋敷に貯蔵されていた梅の花びらの護符であつた。花びらは本来のうすい桜色ではなく、梅肉のようにくすんだ赤色で葉脈は紫色に明滅している。属性を反転させられ邪淫の符となつた花びらだつた。水瓶を満たしているのは巫女たちが自慰行為によつて流した愛液だ。

女たちの欲望の汁に浸された淫符を快幻坊は麻衣の唾液で濡れ光る亀頭に載せた。麻衣が念入りに舌腹で押し当てて淫符を貼り付ける。娼婦が口を使つてコンドームを装着させるかのごときである。



「御坊様の御魔羅が欲しいです」

「では、お言葉に甘えて」

股座を占拠していた亜衣に場所を譲らせる。

剛柱が麻衣の中へと突き入れられた。巨根の衝撃に麻衣は声を詰まらせる。ひとたび挿入されてしまえばその後の快楽を期待してか、ほつと安堵の息を漏らすのだつた。

「たくましいわ」

「我が魔羅こそ麻衣様と亜衣様を繋ぐよりどころ。ご姉妹の固い絆の証しなれば」

その言葉を心底、妹巫女は信じているようだった。己を貫く肉棒の太さにくつとりとしながら味わっている。姉妹の交わりは淫棒にて終わる。姉妹レズで昂ぶったあとは必ず肉塊でとどめを刺されると習慣づけられているのだ。

「いいつ……お姉ちゃんといつしよで気持ちいい」

麻衣の顔の上では姉巫女の女陰が触手に貫かれていた。こちらも極太の逸品である。

姉が汚らしい触手に犯されようとも、いまの麻衣にはともに快楽に狂う悦びしかないようだ。

「あ、あんっ。そうです。いっぱい、いっぱい突いてください」

「ならば我が巫女となっていただきたい。さすれば毎日毎晩これが味わえますぞ」

魔僧が墮落へと誘う。そうしながら新たな淫符を子宮口に貼り付けている。「なります！ だからもつとわたしをおかしくして。ああっ……」

闇巫女となることを承諾しながら麻衣は悩乱した。そこには清純な少女の姿はない。快悦に蕩けたおんなの顔だった。

「誓願の巫女とは精願の巫女。すなわち『魔精願の巫女』でございます」
魔僧はついに「誓願の法陣」の真の実態を打ち明けた。

「好きなだけ出して。精子で麻衣の子宮を満たしてエ——」

「精一杯に、精強に願うのです。拙僧の魔精漬けにして差し上げよう」

「おなかのなかを熱いのでいっぱいにしてください」

邪精に穢されることを自ら麻衣は願う。

膝裏に手を添えた開脚姿勢で串刺しにされた股間をゆらゆらと動かす。あどけなさを残した麻衣がそのように男を誘う様はなんとも卑猥であつた。

欲望の噴出を期待し、だらしなく緩ませていた麻衣の表情が突如として曇つた。

「お姉ちゃん、それだけはやめて」

「麻衣が御坊様に色目を使うからよ」

亜衣が妹の下腹部を舐めあげていた。

ただでさえ剛棒によつて内から押し拡げられた肉筒は筋肉の層を越えて、

肌の表面までおとこの形を浮かびあがらせているのだ。胎内を占拠する肉棒に沿って舌を這わせられると、形を変えさせられた膣の形状が如実になつていく。

「そんなことしちやつ……ダメだよッ、ダメな娘になっちゃう！」

舌背を強く押し当てる美姉には粘膜のひくつきようまで届いているに違いない。ずんずんと猛烈に突かれて弾ませている子宮の様子さえ知られてしまうのだ。

——視られている。麻衣が味わっているのは浮気現場を押さえられたかのような背徳感だった。麻衣はそれさえ快悦に変えてしまう。姉が視ているであろう胎内の透視図を思い浮かべて興奮のボルテージを高めていく。

「だめだめだめッ、本当におかしくなるうッ」

妹の巫女の体が持ち上がった。亜衣をはねのけるように体を弓なりにする。「イクウウウ——」

ブリッジの姿勢となつたまま麻衣は若鮎のような全身をいつまでもビクビクとさせた。

麻衣の願い通り、濃厚で大量の魔精が子壺に注ぎ込まれていた。

姉巫女はそれでも妹の下腹を離さなかった。最愛の妹が邪精で穢されるのを舌で感じ取りながら、お尻を震わせている。妹の魔精体験が伝播したようである。姉もシンクロさせて絶頂へと達していたのだ。

27

射精の後始末を亙衣がしている。

鈴口に唇を密着させて音を立てて残精を吸い上げる。裏筋に舌を這わせ、柔らかな朱唇で包み込んで残り汁の噴出を促す。出し尽くしてもなお姉巫女は奉仕を続けた。

四つん這いになった亙衣の下では妹が強烈すぎる射精を受けて忘我を彷徨さまよっている。妹をそこまで狂わせた巨根に、敬意さえもっているような有様であつた。

「妹君のおつゆは美味でありましょう」

「はい、とつてもおいしい」

茎胴がゼリー状の粘液でまみれている。亜衣が舌ですくい取っても後から後からにじみ出るのだ。魔羅が搾り出した麻衣の愛液は海綿体中に吸湿されていたのである。

妹の淫汁は聡明な姉巫女でさえ理性を奪つてしまうようだ。

亜衣がスロートを開始した。口をいっぱい開いて巨根を咥えている。唇を何度も異形のもの茎胴に滑らす。

美尻を振り振り口唇奉仕に耽る亜衣が切なげな吐息を漏らして、口戯を打ち切った。

「これをください。もう我慢できない」

背後に回った魔僧を期待のまなざしで亜衣は追いかける。

「ククク……まるでさかりのついた牝犬のようではありませんか」

亜衣は尻を上げて快幻坊を迎え入れた。

姉妹レズの効果でたっぷりの愛液で満たされた姉巫女の膣道はのっけからヌチャヌチャといやらしい破裂音を奏でた。

助走から本格的な抽挿へと移ろうとする頃、突然に快幻坊が動きをとめた。

「アン、どうして？」

亜衣は後ろを振り向いて、戸惑いの声を漏らす。

中央から裂けた淫符が亀頭にこびりついていて、限度を超えた淫行のあまり破けたのである。

怪僧は淫符を右に向かつて投げ捨てた。

姉妹の彫像、下着などがならぶガラス壁に淫符は貼り付いた。すでに右には五枚、左にも四枚もの薄く伸びきった花びらが、ガラス壁に押し花のように並んでいた。

塗精十吐の淫術にさえ耐える淫符がそれほど消費されるほど姉妹は魔僧と交わっていたのだ。

「はうん……」

これから悦びが始まろうというときに中断させられた亜衣は途方に暮れている。

そんな亜衣の前に新たな触手が現れた。新顔の触手は奇妙な形状をしていた。先端が金魚鉢のように透明に丸く膨らんでいて、なかでひらひらと花びらが泳いでいる。液体で満たされたそこに梅花の護符が封入されているのだ。金魚鉢状の先端を持つ触手は妹の秘花を割り開いた。ずぶりとその奇妙な

頭部が潜り込む。ヒダ状のカリ首が何度もラビアをめくり返す。亜衣に見せつけているのだ。やがて長大なストロークへと移った。入り口から最奥まで妹巫女の全てを我が物顔で触手は出入りしている。

先端部の鉢状の部分がうっすらとピンク色に発光しているのが見て取れた。

「いけないわ、麻衣」

亜衣のなかに連綿と受け継がれた巫女戦士の魂が言わせたのだろうか。その言葉がどこまで本気かはわからない。なぜなら姉巫女は背後の淫僧にお尻を突き出したままだからだ。

ともかく亜衣は妹巫女が何をしているのか理解したようだ。

「姉君の淫水で漬けた護符を気に入って頂けたようですねあ」

麻衣は光の巫女の力を差し出しているのだ。姉の汁が染みついた護符が封入された亀頭で子宮口をノックされると、巫女戦士の力の源さえ求めに応じてしまう。

チュパチュパと聞き慣れたリップ音がした。妹巫女は腰を落とした快幻坊に下から口でも奉仕しているようだ。陰囊をしゃぶっているのだろう。姉巫

女はもうそれを咎めようとはしない。亜衣の瞳は出入りを繰り返す触手に釘付けになっている。

中断されたままの劣情が体中に燃え広がっているのだ。

「お願い、続きを――。わたしのなかに新しい護符を貼り付けてください」
「亜衣様も我が巫女^いとなっていただけなのかな？」

快幻坊が尋ねる。不埒^{ふらち}にも巫女宗家の鼠径部にビタビタと肉竿を打ちつけながら。

「仰せのままに従います。だから早く……」

剛直で肉の割れ目をなぞると亜衣はさらに高く尻を上げてせがんだ。

ゆつたりとした動きで淫符を亀頭に載せると散々もったいぶってから挿入した。

「我らの願いもひとつになりましたな、亜衣様」

「そうよ！ 出して。ぐちゃぐちゃにかき混ぜて。子宮の中で麻衣のと練り合わせて」

妹の淫汁は亜衣を狂わす鍵なのか。肉襪でキュツキュツと太幹を締め上げて妹汁を搾り出そうとする。魔羅が垂れ流すよだれ汁と麻衣の愛液が姉巫女

の膣内で混ぜ合わされる。

このように尻を高々と掲げていれば、その混合汁が行き着く先は膣の最奥だ。淫符を貼り直された子宮口はパクパクと口を開いて淫らな混合汁を迎え入れる。

「あん……あんツ、麻衣ィ、麻衣ィ」

妹の名を叫びながら、亜衣はこれまで見せたことのないよがりようで乱れに乱れる。

「このまま我が欲望の捌け口とさせていたいただいてもよろしいかな？」

「はいっ……はいっ……ぜひそうしてください」

「ご心配召されるな。ただの淫乱とならぬよう拙僧がしつかり管理させていただきます」

姉妹を結びつけた媒酌人を信頼しきっているのか、亜衣は体のすべてを魔僧のなすがままとしていた。淫僧は細腰をがちり掴んで容赦なく打ち込む。麻衣を犯しているのと同じ形状の金魚鉢状の頭部に花びらを封入した触手がにじり寄った。こちらには妹の愛液が漬け込まれた淫符が封入されている。無遠慮に触手は亜衣の菊花をこじ開けた。

「あうっ、ひいい……」

悲鳴が祈りの言葉と聞こえたのか、怪僧は高らかに宣言した。

「もつと願いなさい。この魔精願の法陣に願うのです」

限界まで尻を持ち上げたまま、二本刺しにされた亜衣はよだれを垂らしてあえいでいる。

麻衣も触手に上下の口を塞がれながら、快感にむせび泣いている。

石室のなかにはもはや清楚で可憐な巫女姉妹はいなかった。

むせかえるような淫臭のなか、ただ魔精だけを請い願い、亜衣も麻衣もよがり狂っていた。

第二部 天女淫壞

第五章 獣愛

28

あれから五日が過ぎていた――。

石畳の地下室から解放された姉妹は自宅へと帰参していた。

神社に併設された道場にふたりはいた。

鬼獣淫界の襲撃により天津屋敷は焼き討ちにされた。この道場も例外ではない。すぐさま建て直されたが、神社や屋敷が優先され、道場は一番最後だ。まだ再建されてから半年も経っていない。いつもならまだ新しい家屋からは木の香がけぶっていた。

だが、いま道場内を満たしているのは牝臭である。おんなの内から湧き出る蜜の臭いが道場内に充満していた。

天津姉妹は絡まり合っていた。

道場内に照明は点いていない。代わりに板間に刻まれた“誓願の法陣”が双子姉妹を妖しく照らしていた。

ふたりはともに全裸であつた。ふたりの周囲には紺袴の道着が脱ぎ捨てられていた。

ご覧頂きありがとうございます。

試し読み版はここまでとなります。

淫獣愛牢——双天女淫恋に墜ちる（試し読み版）

著者

妄想虜囚

サークル

妄想虜囚

発行日

二〇一八年一月三日

連絡先

<https://ci-en.dlsite.com/creator/5672>

<http://pixiv.me/mousou02>（ピクシブ）

mousouryosyuu@gmail.com